年報

青森県立美術館

令和4年度

目 次

003　青森県立美術館の沿革

展覧会
004　企画展
015　コレクション展
026　アートプロジェクト
030　5館連携プロジェクト
032　各種イベント

学芸
033　美術資料収集
036　美術資料貸出状況
037　作品保存修復

教育普及
038　普及プログラム
039　スクールプログラム
040　サポートスタッフ

パフォーミングアーツ
041　演劇
043　音楽
050　映画

サービス等
052　貸館
054　図書室
055　キッズルーム
056　博物館実習
057　サポートシップ倶楽部

資料
059　広報
060　広聴
061　入館者数
062　運営予算･決算
063　組織
064　関係規程等
065　施設設備概要

青森県立美術館の沿革

1990年 3 月	美術館の設置について検討を開始することを表明
1991年 1 月	美術館、音楽・演劇ホール等の複合文化ゾーンである「総合芸術パークの検討開始
1996年 2 月	総合芸術パークの建設場所を、三内丸山遺跡に隣接した移転予定の総合運動公園跡地に決定 総合芸術パークの核となる美術館を先行し整備することが決定
1999年度	美術館設計競技を実施、最優秀者に青木淳氏
2000年度	建築基本設計
2001年度	建築実施設計
2002年度	美術館建築工事着工
2003年度	別棟で建築予定だったアトリエとレジデンスを休止、同じく別棟で建築予定だったレストランとミュージアムショップを美術館本体に組み込む等見直しを行う
2005年 9 月20日	美術館竣工
2006年 3 月17日	「運営諮問会議」設置
2006年 4 月 1 日	青森県立美術館開館準備室設置
2006年10月17日	「青森県立美術館条例」制定
2006年 6 月13日	開館プレス発表開催
2006年 7 月13日	開館（館長　三村　申吾）
2007年 7 月24日	博物館法に基づく博物館相当施設登録（青森県教育委員会告示第11号）
2007年 9 月13日	「県民のための美術館づくり懇話会」設置
2008年 7 月19日	あおもり犬屋外連絡通路開通
2008年 7 月20日	青森県立美術館2周年記念シンポジウム開催
2009年 1 月 1 日	館長　鷹山　ひばり　就任
2010年 5 月 7 日	入館者150万人達成
2010年 7 月 8 日	あおもり犬えさ皿完成
2011年 7 月11日	入館者200万人達成
2011年 7 月13日	開館5周年
2012年11月14日	入館者250万人達成
2013年11月14日	入館者300万人達成
2015年 4 月 1 日	館長　杉本　康雄　就任
2016年 3 月	入館者350万人達成
2016年 3 月19日	「青森県立美術館アドバイザリーボード」設置
2016年 7 月13日	開館10周年
2016年12月23日	八角堂リニューアル　《Miss Forest / 森の子》完成
2018年 5 月25日	入館者400万人達成
2021年 6 月	入館者450万人達成
2021年 7 月13日	開館15周年

企画展

「詩・季・彩 ー石井康治　四季を詩う彩りのガラス」展

開催概要

2022 年 4 月 23 日（土）−6 月 26 日（日）
休館日：4 月 25 日、5 月 9 日、23 日、6 月 13 日
開催日数：61 日（65 日間）
主　催：石井康治展実行委員会（青森県立美術館、青森放送株式会社、青森県観光連盟）
特別協力：株式会社石井グラススタジオ
後援 :NHK 青森放送局、青森ケーブルテレビ、エフエム青森、東奥日報社、デーリー東北新聞社、陸奥新報社、青森県教育委員会
観覧料：一　般 1,500（1,300）円
　　高大生 1,000（800）円
　　小中学生無料
※（ ）内は Web チケット料金。
Web チケットはシステム利用料等別途 165 円が必要。
※心身に障がいのある方と付添者 1 名は無料。
※青森県立美術館 1F 受付にて前売チケットを限定 100 枚販売（ 一般 1,300 円のみ）
入場者数：17,500 人

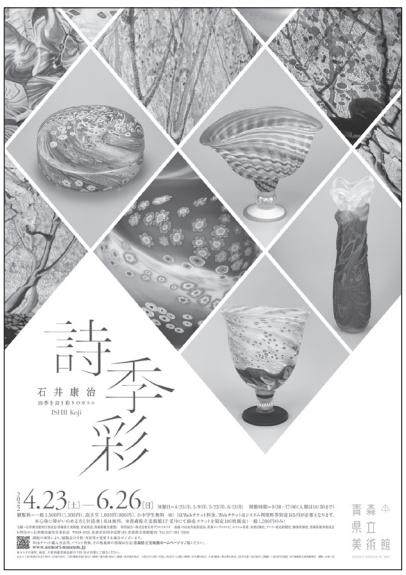
関連企画

美術館内カフェ「四匹の猫」における展覧会連動企画商品として、石井グラススタジオの協力により、石井康治作品の器による「プリンアラモード」が提供され好評を博した。

展覧会カタログ

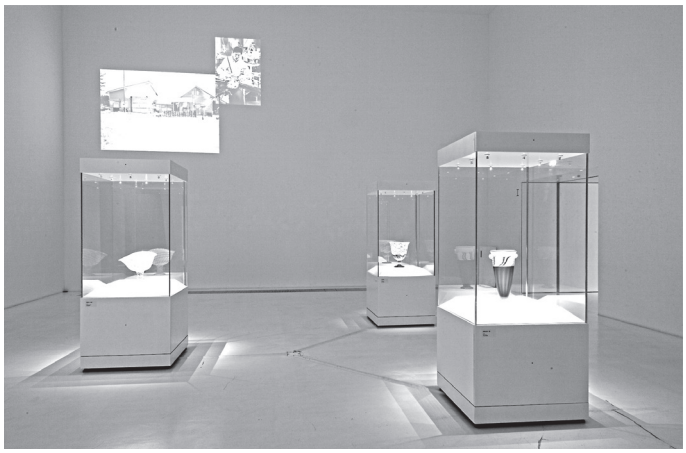
A4 判　144 頁 (カラー 112 頁)
特別寄稿 : 金子賢治 (茨城県陶芸美術館館長)
　　「ガラス、散り果てる―石井康治の造形思考」
編集・執筆：菅野晶 (青森県立美術館)
デザイン：須藤一幸
印刷：東奥印刷株式会社
発行：石井康治展実行委員会
発行日：2022 年 5 月

石井康治は、青森の自然に魅せられ、北国の光と風が織りなす四季を彩り豊かなガラス作品にうつし取り、ガラス工芸に新たな息吹を吹き込んだ作家である。
1946 年千葉県に生まれた石井は、30 代初めから吹きガラスによる創作活動に専念し、制作の場を求めて訪れた青森で、四季のうつろいと共に自然がみせる豊かな色彩と鮮やかな変化に魅了される。91 年には青森市郊外の三内丸山に念願のアトリエ「石井グラススタジオ青森工房」を開設し、青森の四季折々の美しい表情を作品にとどめようと探求を重ねたが、96 年に 50 歳で急逝した。
本展は、石井の初めての本格的な回顧展として、1980 年代から、青森工房を設立した 91 年以降に次々と考案した「彩烈文」「汎状文」「環象文」「彩花文」「彩硝文」などの独創的な文様技法、そして 95 年に八甲田の森の四季をモチーフに生まれ、自身の創作における一つの到達点と自負していた「樹映」シリーズまで、152 点の作品を展示し、石井が創作について語った言葉とともにその創作活動の軌跡を辿った。
さらに、石井の創作活動を支えた青森工房での作品制作について、作家遺族や、工房長はじめ元工房スタッフの協力を得て、工房で実際に使用された様々な道具、多種多様な色ガラス等の素材、貴重な記録映像等により、制作行程を解説する充実したコーナーを設けた。展覧会カタログにもこれらの内容を反映し、作家の基本文献となるよう、図版や解説、年譜等の資料を充実させた。
美術館は 3 月まで新型コロナ感染拡大のため休館していたが、4 月からの展覧会期間中の感染状況は比較的落ち着いており、ゴールデンウィークを含む前半は県外からの旅行者が多く来館した一方、5 月後半からは県内の来館者が増加し、TV 等での露出と併せて評判が広がり更に多くの来館を促す好循環を作ることができた。来館者からは、美しいガラスの造形に身近な風景が投影されていることに新鮮な驚きと喜びを感じ、これらの作品が青森から生まれたことを誇らしく思う、という声が数多く寄せられ、青森に生まれ育った作家とはまた異なった在り方で、重要な作家を広く紹介する展覧会とすることができた。



ポスター









展示風景

出品作品

※作品サイズは原則として高さ × 横 × 奥行、又は高さ × 直径の順序で表記。
※出品リストは展示の各章毎に作品をまとめてある。

プロローグ
青森工房開設まで

《潮騒》
1983 年
59.0×15.0cm
青森県立美術館寄託

《炎晶》
1984 年
66.0×20.0cm
青森県立美術館寄託

《夕映》
1986 年
12.0×58.0×13.0 cm
青森県立美術館寄託

《夕映》
1986 年
20.5×49.0×15.0 cm
青森県立美術館寄託

《彩炎大鉢》
1986 年
15.0×43.0cm
青森県立美術館寄託

《木影》
1987 年
28.0×28.0 ×15.0cm
青森県立美術館寄託

《海ー MOANA》
1987 年
31.0×28.0×12.5cm
株式会社石井グラススタジオ蔵

《彼方》
1987 年
23.0×53.0×20.0cm
青森県立美術館寄託

《引き潮》
1987 年
29.0×31.0×13.0cm
株式会社石井グラススタジオ蔵

《挽歌》
1988 年
36.0×25.0×11.0cm
青森県立美術館寄託

《湖映》
1989 年
33.0×17.0×10.0cm
青森県立美術館寄託

《銀河》
1989 年
31.0×22.0×7.5cm
株式会社石井グラススタジオ蔵

《波の景》
1989 年
30.0×23.0×10.0cm
青森県立美術館寄託

《銀河》
1989 年
31.0×22.0×7.5cm
株式会社石井グラススタジオ蔵

《雲海》
1990 年
36.5×20.0×10.0cm
株式会社石井グラススタジオ蔵

《波の音》
1990 年
29.0×38.0×23.0cm
青森県立美術館寄託

《花の景ー眺》
1990 年
43.5×23.5×18.0cm
青森県立美術館寄託

《波涛》
1990 年
32.0×25.0×19.0cm
株式会社石井グラススタジオ蔵

青森工房誕生

《汎状文器ー譜》
1992 年
44.0×22.0cm
青森県立美術館寄託

《彩流モール器》
1993 年
35.0×41.0×25.0cm
青森県立美術館寄託

《彩花文器》
1995 年
40.5×32.0cm
青森県立美術館寄託

詩・季・彩
―文様さまざま

《彩烈紋器》
1991 年
36.0×27.0cm
青森県立美術館寄託

《彩烈文花瓶》
1991 年
44.0×19.0×13.5cm
株式会社石井グラススタジオ蔵

《彩烈文器ー轟音》
1992 年
40.0×28.0cm
青森県立美術館寄託

《金彩流文大皿》
1992 年
8.0×52.0cm
青森県立美術館寄託

《流水文器》
1993 年
45.0×24.0cm
青森県立美術館寄託

《汎状文器》
1993 年
32.5×27.0cm
青森県立美術館寄託

《環象文器ー想》
1993 年
39.0×32.0cm
青森県立美術館寄託

《環象文器ー愁》
1993 年
45.0×29.5cm
青森県立美術館寄託

《環象文器》
1993 年
40.5×32.0cm
青森県立美術館寄託

詩・季・彩
―ランプ

《テーブルランプ》
1993 年
85.0cm
青森県立美術館寄託

《テーブルランプ》
1994 年
72.0cm
青森県立美術館寄託

《テーブルランプ》
1995 年
72.0cm
青森県立美術館寄託

《テーブルランプ》
1996 年
51.0cm
青森県立美術館寄託

《テーブルランプ》
1996 年
70.0cm
青森県立美術館寄託

《テーブルランプ》
1996 年
67.0cm
青森県立美術館寄託

詩・季・彩
―樹映

《風》
1987 年
43.5×26.5×10.5 cm
株式会社石井グラススタジオ蔵

《風》
1987 年
27.5×17.5×8.0cm
株式会社石井グラススタジオ蔵

《風》
1987 年
17.5×16.5×8.5cm
株式会社石井グラススタジオ蔵

《径》
1988 年
31.0×27.0×8.5cm
青森県立美術館蔵

《樹映》
1988 年
30.0×23.0×9.0cm
青森県立美術館寄託

《朝霧》
1989 年
31.0×27.0×10.0cm
青森県立美術館寄託

《風の景》
1989 年
33.0×28.0×11.0cm
青森県立美術館寄託

《樹映》
1991 年
41.0×20.5×13.5cm
株式会社石井グラススタジオ蔵

《樹映》
1992 年
34.5×26.5×11.0cm
株式会社石井グラススタジオ蔵

《風》
1994 年
31.0×22.0×13.0cm
青森県立美術館寄託

《樹映文器》
1994 年
26.5×26.0×13.0cm
株式会社石井グラススタジオ蔵

《樹映一春の景》
1995年
29.0×35.5×15.0cm
青森県立美術館寄託

《樹映一夏の景》
1995年
36.5×24.0×14.0cm
青森県立美術館寄託

《樹映一秋の景》
1995年
27.5×28.5×14.0cm
青森県立美術館寄託

《樹映一冬の景》
1996年
26.5×33.0×16.0cm
青森県立美術館寄託

詩・季・彩
―間奏

《青嵐》
1991年
44.0×27.0cm
青森県立美術館寄託

《武蔵野》
1991年
45.0×34.0cm
青森県立美術館寄託

《大皿一冬の詩》
1992年
8.0×59.0cm
青森県立美術館寄託

《大皿一春の詩》
1992年
8.0×54.5 cm
青森県立美術館寄託

《葉状文花生》
1993年
46.0×29.0×15.0cm
青森県立美術館寄託

《ガラス筈一緑映》
1994年
26.5×22.0×14.0cm
青森県立美術館寄託

《ガラス筐一流景》
1995年
33.0×22.0×14.0cm
青森県立美術館寄託

《高杯一春譜》
1996年
100.0×33.0cm
青森県立美術館寄託

《高杯一夏譜》
1996年
99.0×31.0cm
青森県立美術館寄託

《高杯一雪譜》
1996年
81.0×40.0cm
青森県立美術館寄託

《大皿一夏の象》
1996年
6.0×44.0cm
青森県立美術館寄託

《大皿一秋の象》
1996年
5.0×46.0cm
青森県立美術篭寄託

《緑蔭》
1996年
38.5×16.0×10.0cm
青森県立美術館寄託

《緑蔭一やすらぎ》
1996年
23.0×36.0×12.0cm
青森県立美術館寄託

詩・季・彩
―彩花文

《花映盤》
1992年
12.0×55.0cm
青森県立美術館寄託

《彩花文器一映》
1994年
24.0 ×24.0cm
青森県立美術篭寄託

《彩花文器》
1994年
41.0×32.0×20.0cm
青森県立美術館寄託

《彩花文器一霞》
1995年
37.0×27.0×18.0cm
青森県立美術館寄託

《彩花文モール花生》
1995年
42.0×27.0cm
青森県立美術館寄託

《彩花文器》
1995年
32.5×39.0cm
青森県立美術館寄託

《彩花文器一醍醐》
1995年
31.0×29.0cm
青森県立美術館寄託

《彩花文器》
1995年
33.5×30.0×27.0 cm
青森県立美術館蔵

《彩花文器》
1995年
41.0×22.5×14.0cm
株式会社石井グラススタジオ蔵

《彩花文器》
1995年
43.0×36.0×18.0cm
青森県立美術館寄託

《ガラス宮一譜》
1995年
13.0×23.0cm
青森県立美術館寄託

《ガラス宮一詩》
1995年
3.0×23.0cm
青森県立美術館寄託

《ガラス筈一花筏》
1996年
11.0×23.0cm
青森県立美術館寄託

《ガラス営一はなびら》
1996年
28.0×20.0×13.0cm
青森県立美術館寄託

《彩花文器一花筏》
1996年
45.0×23.0×16.0cm
青森県立美術館寄託

《彩花文器一流》
1996年
36.5×30.0cm
青森県立美術館寄託

詩・季・彩
―技法さまざま

《窓》
1987年
38.0×27.0×9.0cm
青森県立美術館寄託

《秋宵》
1991年
45.0×34.cm
青森県立美術館寄託

《彩文花器》
1991年
29.0×26.0×19.0cm
株式会社石井グラススタジオ蔵

《彩烈文器》
1992年
30.0×24.0cm
株式会社石井グラススタジオ蔵

《汎状文器》
1993年
37.0×26.0cm
青森県立美術館寄託

《彩流モール花瓶》
1993年
54.0×17.5cm
青森県立美術館蔵

《彩流モール花生》
1993年
30.5×28.0cm
株式会社石井グラススタジオ蔵

《モザイク文花器》
1993年
25.5×23.0cm
株式会社石井グラススタジオ蔵

《環象文器》
1993年
32.5×20.0cm
青森県立美術館寄託

《葉状文器》
1993年
23.0×24.5cm
株式会社石井グラススタジオ蔵

《彩花文器》
1995年
42.0×22.0×14.0cm
青森県立美術館寄託

《彩硝文器》
1995年
41.0×19.0×13.0cm
青森県立美術館寄託

《流文双耳花瓶》
1995年
35.0×15.0×10.0cm
株式会社石井グラススタジオ蔵

《ガラス筈一天空》
1996年
25.0×22.0×14.0cm
青森県立美術館寄託

《線状文花生》
1996年
34.0×19.0×11.0cm
青森県立美術館寄託

《香炉一花吹雪》
1996年
17.0×8.5cm
青森県立美術館寄託

詩・季・彩
―器さまざま

《花吹雪鉢》
1990年
15.0×27.0cm
青森県立美術館蔵

《彩烈文コンポート》
1992年
23.0×33.0×31.0cm
青森県立美術館寄託

《コンポート》
1992 年
19.0×34.0cm
青森県立美術館寄託

《彩花文器》
1996 年
26.0×30.0cm
青森県立美術誼寄託

《彩硝文コンポート》
1996 年
20.5×30.5cm
青森県立美術館寄託

《ちろり》
1993 年
22.0×16.5cm
青森県立美術館寄託

《茶怨》
1994 年
8.5×12.0cm
青森県立美術館寄託

《茶怨》
1995 年
7.0×13.5cm
青森県立美術館寄託

《茶盆ー花吹雪》
1996 年
8.0×14.5cm
青森県立美術館寄託

《茶盆》
1996 年
7.5×12.5cm
青森県立美術館寄託

《水指》
1992 年
18.5×18.0cm
青森県立美術館寄託

《水指》
1995 年
16.0×15.0cm
青森県立美術館寄託

《水指》
1996 年
17.5×16.0cm
青森県立美術館寄託

《水指ー花吹雪》
1996 年
17.5×15.0cm
青森県立美術館寄託

《香炉ー樹映》
1996 年
15.5×8.0cm
株式会社石井グラススタジオ蔵

《香炉ー新雪》
1996 年
15.0×8.5cm
株式会社石井グラススタジオ蔵

《カポチャ折皿》
1995 年
4.0×21.5×23.0cm
株式会社石井グラススタジオ蔵

《輪花皿》
1996 年
1.8×16.5cm
株式会社石井グラススタジオ蔵

《輪花鉢》
1996 年
7.0×19.5cm
株式会社石井グラススタジオ蔵

《銀彩ー文字手鉢》
1996 年
17.0×23.0cm
株式会社石井グラススタジオ蔵

《銀彩ー文字鉢》
1996 年
7.5×15.5cm
株式会社石井グラススタジオ蔵

《銀彩ー文字鉢》
1996 年
6.5×14.0cm
株式会社石井グラススタジオ蔵

《とっくり》
1990 年
13.0×7.5cm
株式会社石井グラススタジオ蔵

《杯》
1991 年
10.0 ×7.0cm
株式会社石井グラススタジオ蔵

《盃》
1991 年
4.5×8.0cm
株式会社石井グラススタジオ蔵

《とっくり》
1992 年
15.0×9.0cm
株式会社石井グラススタジオ蔵

《花吹雪手鉢》
1994 年
18.0×19.0cm
株式会社石井グラススタジオ蔵

《花吹雪鉢》
1995 年
9.0×19.0cm
株式会社石井グラススタジオ蔵

《花吹雪平鉢》
1996 年
6.0×21.0× 21.5cm
株式会社石井グラススタジオ蔵

《十草文蓋物》
1995 年
9.5×7.5cm
株式会社石井グラススタジオ蔵

《十草文皿》
1995 年
2.0×15.1×12.3cm
株式会社石井グラススタジオ蔵

《十草文手鉢》
1995 年
18.0×19.5×12.0cm
株式会社石井グラススタジオ蔵

《千筋ひさご鉢》
1995 年
11.0×24.5×19.0cm
株式会社石井グラススタジオ蔵

《千筋鉢》
1996 年
8.5×23.5×18.0cm
株式会社石井グラススタジオ蔵

《とっくり》
1996 年
10.5×7.0cm
株式会社石井グラススタジオ蔵

《盃》
1996 年
4.0×8.0cm
株式会社石井グラススタジオ蔵

《盃》
1996 年
5.5×5.5cm
株式会社石井グラススタジオ蔵

《流文ビッチャー》
1994 年
32.0×12.5cm
株式会社石井グラススタジオ蔵

《流文ビアマグ》
1995 年
16.5×10.0cm
株式会社石井グラススタジオ蔵

《水玉コップ (5 点組)》
1996 年
11.0×7.0cm
株式会社石井グラススタジオ蔵

《ビッチャー》
1996 年
21.0×11.5cm
株式会社石井グラススタジオ蔵

《ビッチャー》
1996 年
22.0×9.7cm
株式会社石井グラススタジオ繭

《流文ビアマグ》
1995 年
16.5×10.0cm
株式会社石井グラススタジオ蔵

《流文ビアマグ》
1995 年
17.0×10.0cm
株式会社石井グラススタジオ蔵

エピローグ
石井康治が残したもの

《彩烈文器》
1991 年
40.5×33.0cm
青森県立美術館寄託

《月夜野》
1991 年
43.5×33.0cm
青森県立美術館寄託

《環象文器》
1993 年
35.0×35.0×31.5cm
青森県立美術館寄託

《流文器ー燿》
1993 年
35.0×27.0cm
青森県立美術館寄託

《彩花文器》
1996 年
37.0×28.0cm
青森県立美術館寄託

《彩硝文花生》
1995 年
22.0×35.0×14.0cm
青森県立美術館寄託

《樹映ー春の景》
1995 年
42.0×30.0×14.5cm
株式会社石井グラススタジオ蔵

《ガラス箸ー緑蔭》
1996 年
22.5×21.5×14.0cm
青森県立美術館寄託

《ガラス宮ー秋詩》
1995 年
29.0×21.5×14.5cm
青森県立美術館寄託

《ガラス宮ー新雪》
1996 年
26.0×21.5×14.5cm
青森県立美術館寄託

《テーブルランプ》
1996 年
68.0cm
青森県立美術館寄託

掲載記事等

東奥日報社

2022年4月23日
本県の風景テーマ　石井康治ガラス展　県美できょう開幕

2022年6月29日
明鏡欄　石井康治さんのガラス美

河北新報社

2022年4月27日
東北の美術館・博物館　5月

毎日新聞社

2022年3月29日
美術館ガイド

美術の窓（生活の友社）

2021年12月20日
2021年 12月号：2022年の美術展　日本全国　一挙紹介!!

2022年5月20日
2022年5月号：展覧会 PREVIEW（チケットプレゼント）

月刊ギャラリー（株式会社ギャラリーステーション）

2021年4月号：今月の展覧会

RAB 青森放送

2022年5月2～6日
「RAB ニュースレーダー」石井康治　回顧展①～⑤

NHK 日本放送協会

2022年6月12日
「新日曜美術館アートシーン」

青森ケーブルテレビ

2022年4月29日～（月～金繰り返し）
「あーとふる県美」石井康治展①～③

企画展

ミナ ペルホネン / 皆川明　つづく

開催概要

2022 年 7 月 16 日（土）−10 月 2 日（日）
開催日数：74 日
開館時間：9：30−17：00（最終入場 16：30）
休館日：7 月 25 日（月）、8 月 8 日（月）、22 日（月）、9 月 12 日（月）、26 日（月）
会場：青森県立美術館　企画展示室
主催：つづく展青森実行委員会（青森県立美術館、朝日新聞社、青森県観光連盟）
後援：青森放送、青森テレビ、青森朝日放送、青森ケーブルテレビ、エフエム青森、東奥日報社、デーリー東北新聞社、陸奥新報社、青森県教育委員会、青森市教育委員会
観覧料：一　般　1,500 円（1,300 円）
　　高大生　1,000 円（800 円）
　　中学生以下　無料
※（　）は前売り及び Web チケット料金
※障がい者手帳をお持ちの本人と付添者 1 人は無料
総入場者数：28,568 人
有料入場者数：24,537 人



ポスター　デザイン：葛西薫

デザイナーの皆川明が 1995 年に設立したブランド、ミナ ペルホネンの過去最大規模の展覧会。「つづく」をキーワードに、ミナ ペルホネンの創作の全貌を部屋ごとのコンセプトに沿って紹介した本展は、2019-2020 年に東京都現代美術館で開催され、以降、兵庫県立美術館（2020 年）、福岡市美術館（2022 年）、高雄市立美術館（2022-2023 年）に巡回した。

東北・北海道地域では唯一の開催となった当館での展覧会には、東北･北海道地域をはじめ、全国各地からも多くの来場者があった。アンケート回答等によれば、県外からの来場者の中には本展を既に他会場で観覧している人が多く見受けられたが、当館のダイナミックな展示空間の中で、ゆったりと時間をかけて鑑賞することが出来た、当館監視スタッフの制服が同ブランドのものであることから、美術館全体が展示会場のようにも感じられ、他会場とはまた違った雰囲気の中で展覧会を楽しむことができたといった感想が多く寄せられた。一方、県内の来場者からは、写真等でしか見ることのできなかったミナ ペルホネンの洋服やテキスタイルを実際に間近で目にすることができた感動や、以前から当館の制服に関心を持っていたため、制服をデザインしたブランドの展覧会を見ることができて良かった、本展覧会を通してミナ ペルホネンに関心を持った、「大量生産・大量消費・大量廃棄」ではない未来を見据えた「ものづくり」に対する考え方や「大切に生きること」の意味を考えさせられた等の感想も寄せられ、来場者一人一人に多くの示唆をもたらした展覧会となった。

また、会期中には公開制作やトークイベント、ワークショップ、ライブなどの関連イベントを数多く実施、作家および本展覧会について、より深く理解してもらうための重要な機会となった。なかでも、皆川明、青木淳、菊地敦己による開幕記念鼎談は、当館設計者、V.I. 担当者、ユニフォームデザイナーの 3 人による当館での初の鼎談であり、美術館開館前の経緯から今後の美術館活動のあり方についてまで、話題は多岐に及んだ。その他、本展覧会開幕前に県内の小学校で実施した皆川明による特別授業は、子どもたちが作家と直接交流し、ものづくりについての思いを作家本人から聞くことが出来た貴重な体験となった。

展覧会入場者数は当初の目標人数に及ばなかったものの、来場者のリピート率が高い展覧会であったことからも、充実した内容の満足度の高い展覧会であったといえる。










展示風景　撮影：高橋マナミ

関連事業

⑴プレイベント「皆川明　特別授業」

青森県内の小学校において、皆川明による「洋服を作ること、着ること」についての特別授業を実施。

日時：6 月 2 日 (木)10:25 ～ 12:00 / 6 月 3 日 (金)13:30 ～ 15:05

場所：青森市立合浦小学校、青森市立三内西小学校

講師：皆川明（ミナ ペルホネンデザイナー）

参加者数：26 人（青森市立合浦小学校 5 年生）、63 人（青森市立三内西小学校 5 年生）

⑵皆川明公開制作

皆川明による公開制作。完成した作品《キリンの旅立ち》は、会期中、エントランスギャラリーに展示された。

日時：7 月 13 日（水）、14 日（木）10:00 ～ 16:00 頃

場所：青森県立美術館　2 番エントランス前（観覧自由）

⑶開館記念スペシャル鼎談：皆川明＋青木淳＋菊地敦己

当館ユニフォームデザインを担当した皆川明、当館を設計した青木淳、当館の V.I. を手がける菊地敦己によるスペシャル鼎談。

日時：7 月 16 日（土）14:00 ～ 16:00

場所：青森県立美術館　シアター
入場料：無料（事前申込による抽選）
参加者数：80 人

⑷皆川明　りんご箱公開ペインティング
皆川明による古いりんご箱を用いた公開ペインティング。
日時：8 月 20 日（土）10:00 ～ 15:00 頃
場所：青森県立美術館　B1F 屋外ヤード（観覧自由）

⑸ワークショップ「自分でつくる自分だけの柄」
ミナ ペルホネンのテキスタイルデザイナー・田中景子と一緒に参加者が各自オリジナルの柄を作るワークショップ。
日時：8 月 20 日（土）10:30 ～ 12:00/13:30-15:00
場所：青森県立美術館ワークショップ A
入場料：無料（事前申込による抽選）
参加者数：40 人（各回 20 人）

⑹トークショー：ミナ ペルホネンのはじまりとこれから
ミナ ペルホネンを支える 3 人のクリエイター（皆川明、田中景子、長江青）によるクロストーク。
日時：8 月 21 日（日）14:00 ～ 15:30
場所：青森県立美術館　シアター
入場料：無料（事前申込による抽選）
参加者数：80 人

⑺haruka nakamura「PIANO inspired by minä perhonen」
青森市出身で、皆川明とも親交の深い音楽家・haruka nakamura によるインスタレーションとしての即興ピアノ演奏。
日時：9 月 23 日（金・祝）15:30 ～ 17:00
場所：青森県立美術館　アレコホール（聴講自由）

⑻伊藤ゴロー featuring 坂本美雨「A Midsummer Night's dream」
青森市出身の作曲家・ギタリストの伊藤ゴローと青森市生まれ NY 育ちの坂本美雨によるコラボレーションライブ。皆川明による自作詩の朗読もおこなわれた。
日時：9 月 25 日（日）19:00 ～ 20:00
場所：青森県立美術館　アレコホール
入場料：無料（事前申込による抽選）
参加者数：80 人

出品目録

ミナ ペルホネン / 皆川明　つづく
minä perhonen / minagawa akira　TSUZUKU

つづく

ミナ ペルホネンのものづくりの営みを自然界に例えて各章の名称としています。
活動の要素をその名称の意味合いと重ねてご覧いただきます。
ものづくりに在る「つづく」と人の心に繋がる「つづく」を様々な視点から感じる中で、
ミナ ペルホネンのデザインがつくり手とつかい手を繋ぎ、
どのように関係しながら循環と継続をしていくかをご覧ください。　皆川明

キャプション等に記載されている「2019–2020 ~A/W」「2019–2020 ~Autumn / Winter」は「2019–2020年秋冬コレクション」で発表されたことを示しています。

芽
designs for textiles
テキスタイルのためのデザイン

ミナ ペルホネンのものづくりの特徴は、生地からデザインして、洋服に仕立てることです。ここでは、皆川明と田中景子などインハウスのデザイナーによる生地のためのデザイン画を紹介します。手描きの線や色の重なりが印象的なプリント用の原画、糸から織り組みまで考えて描かれる織物用のデザイン、模様の反復やステッチの立体感を想起させる刺繍用の図案は、その後、国内有数の職人たちのいる生地工場に手渡され、やりとりを重ねつつ、時間をかけてテキスタイルへと作り上げられるのです。その数は柄数にして850種を超え、色やベース生地の違いも数に入れると約3500種にもなります。

風
life and design
生活とデザイン

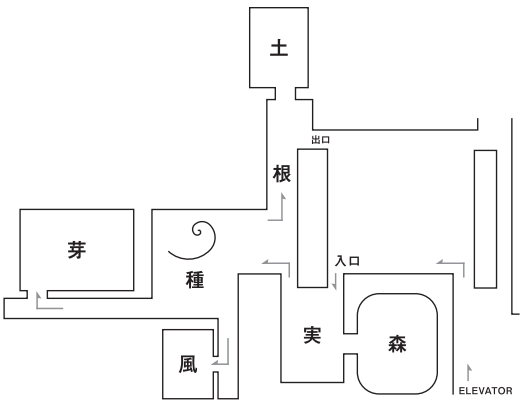
ここではミナ ペルホネンの服を着ている人の「日常」を映像作品でご覧いただきます。特別なシチュエーションのための服ではなく、日常のための特別な服を作りたい。ブランド設立時から一貫した服づくりをつづけてきました。アトリエで産声を上げたデザインが、職人によってテキスタイルへ。そして服となったプロダクトは人々の日常へと寄り添う旅に出ます。広島、山形、沖縄、東京、パリの5都市を舞台に、5人の愛用者の生活や仕事に密着し、その日常を追いました。（制作：藤井光）

根
drawings
挿画

朝日新聞の「日曜に想う」のための挿画は2016年からスタートし、毎週1回、現在でもコラムのために描き続けられています。日本経済新聞の「森へ行きましょう」（川上弘美作）のための挿画は、2016年1月4日から2017年2月18日までの連載で計332枚の絵が描かれました。登場人物が馬や鳥といった動物モチーフによって描かれる不思議な夢想の世界。皆川が描く繊細なタッチの線や点、独特な色づかいはテキスタイルの図案とはまた違う表現に満ちています。

土
memory of clothes
洋服と記憶

服やプロダクトを購入する時、私たちは何年先の未来を想像するのでしょうか。ミナ ペルホネンは時の経過によって色褪せることのない服を追求してきました。何年にもわたり、その人の人生に寄り添い、ともに成長変化し、その人の一部になっていく服。ここでは、服とその持ち主との関係性に焦点を当てて、個人が所有している愛用品を、彼らが語る服とのエピソードと共に紹介します。



森
pieces of clothes
洋服の森

ミナ ペルホネンではファッションの流行にとらわれないものづくりをしてきました。短いサイクルで大量消費されていく服には背を向け、シーズンを超えて長く繰り返し愛用してもらえる服を目指しています。ここでは設立当初から2022–23年秋冬コレクションまでの約27年分の服を一堂に集めた大規模なインスタレーションとしてご覧いただきます。展示は年代順ではなく、純粋に視覚的・造形的な観点から配置されています。そこには最新の服も過去の服も分け隔てがなく、価値に変わりがないとするミナ ペルホネンの哲学が示されています。

種
idea and study
アイデアと試み

ファッションブランドとして始まったミナ ペルホネンは、1999年にはオリジナルデザインの家具、2008年には食器のコレクションへと領域を広げ、国内外のブランドやクリエイターとの協働事業の件数も年々増えています。ここでは、その幅広い活動の根幹にある皆川明とミナ ペルホネンのものづくりの哲学や創作のアイデアを、過去・現在・未来の試みを通して紹介します。奥に配置されている「shell house（シェルハウス）」は、皆川が将来の夢として構想している「簡素で心地よい宿」のプロトタイプです。（設計：中村好文）

実
tambourine
タンバリン

ミナ ペルホネンを代表する刺繍柄のtambourine（タンバリン）。この25個の小さなドットが柔らかな円を描く刺繍柄は2000−2001年秋冬コレクションの発表以来、服だけでなく、家具や食器などのプロダクトにも展開されています。一見すると整然と並んでいるtambourineの刺繍ですが、円の形状やドットの間隔は不均一で、さらに刺繍のふくらみや形にも差異があります。均一ではない一つ一つの粒子が織りなす個性を、機械レースで表現することは発表当時画期的なことでした。そんなtambourineの秘密を紐解き、またこの柄の持つ可能性を探ります。

ミナ ペルホネン（minä perhonen）はデザイナーの皆川明（1967−）が設立したブランドです。ファッションからスタートした活動は、インテリアや食器など生活全般へと広がり、現在では創造的なデザインやアイデアを社会に提供するブランドとして幅広い活動を展開しています。「ミナ」とはフィンランド語で「私」、「ペルホネン」は「繰」を意味しています。

「ミナ ペルホネン／皆川明 つづく」鑑賞ガイド　執筆：森千花（東京都庭園美術館）、井波吉太郎（東京都現代美術館）　2022年発行

会場マップ
展示構成：田根剛、阿部真理子
グラフィックデザイン：葛西薫（sun-ad）

掲載記事

掲載記事は新聞記事を主として記載している。

朝日新聞社

2022年6月3日
ミナ ペルホネン皆川明さんが特別授業　子どもに語る衣服への愛着

2022年8月17日
県立美術館「ミナ ペルホネン」 皆川さん企画展に来場1万人

東奥日報社

2022年6月17日
大切な思い出 愛着を持って　皆川明さん特別授業

2022年7月26日
デザインに「青森らしさ」 県美にかかわった3人が対談
ものづくりへの思いたどる　県美で「ミナ ペルホネン」展

2022年8月5日
展覧会ガイド　8月　つづく展情報

2022年8月21日
天地人

2022年9月2日
展覧会ガイド　9月　つづく展情報

2022年10月6日
化学反応起こしたライブ
青森ゆかりの伊藤ゴロー × 坂本美雨

2022年10月14日
青森での「ミナ ペルホネン」展　展示室の個性引き出す

陸奥日報社

2022年6月21日
「日常服」に普遍的価値　来月16日から「ミナ ペルホネン」展

2022年7月10日
ブランド創作の全貌紹介　16日から県美 皆川明さん企画展

2022年8月25日
見どころ満載！この夏の青森県美！①
ミナ ペルホネン／皆川明　つづく

2022年9月8日
見どころ満載！この夏の青森県美！②
ミナ ペルホネン／皆川明　つづく

2022年9月14日
見どころ満載！この夏の青森県美！③
ミナ ペルホネン／皆川明　つづく

2022年9月22日
見どころ満載！この夏の青森県美！④
ミナ ペルホネン／皆川明　つづく

毎日新聞社

2022年6月28日
美術館ガイド　つづく展スケジュール

河北新報社

2022年6月29日
東北の美術館・博物館7月「ミナ ペルホネン／皆川明　つづく」開催スケジュール

2022年7月28日
東北の美術館・博物館8月「ミナ ペルホネン／皆川明　つづく」開催スケジュール

2022年8月30日
東北の美術館・博物館9月「ミナ ペルホネン／皆川明　つづく」開催スケジュール

令和 4 年度コレクション展

Permanent Exhibition 2022

通年展示

展示室 F、G：奈良美智

2022-1：北のまほろばを行く

国内外で活躍する青森県出身の美術作家・奈良美智は、挑むような目つきの女の子の絵や、ユーモラスでありながらどこか哀しげな犬の立体作品などで、これまで若い世代を中心に、多くの人の心をとらえてきました。

青森県立美術館では、開館前の 1998 年から奈良美智作品の収集を始め、現在、その数は 170 点を超えます。

2020 年 3 月からは、絵画やドローイング、ブロンズなど、作家からの寄託作品 24 点があらたに加わりました。その多くは、北海道白老町にある集落、飛生（とびう）での滞在と同地のコミュニティとの交わりから生まれた近年の作品です。飛生に集う子どもたちの姿を、現地で見つけた木の枝から作った木炭でデッサンした「トビウ・キッズ」シリーズや、アイヌ民族の聖地・アフンルパルにインスパイアされたドローイングなど、白老という地の歴史や自然、そして人々の暮らしに触れながら制作されたものです。

また、創造の営みにおいて音楽と深い関りを持ち続けてきた奈良は、2015 年から福島県の猪苗代湖畔で開催されてきた、音楽とアートのフェスティバル「オハラ☆ブレイク」に継続的に参加しています。本展では 2019 年、フェスティバルで行われた、野外でのライブドローイングのシリーズ「北のまほろばを行く」も展示いたします。

記憶の古層を探るように、北へと向かう奈良の旅の中から生まれた作品の数々をお楽しみください。

2022-2 ～ 4：1990 年代を中心に

青森県出身の美術作家・奈良美智は、挑むような目つきの女の子の絵や、ユーモラスでどこか哀しげな犬の立体作品で、これまで国内外の多くの人の心をとらえてきました。

現在 170 点を超え、世界最大規模を誇る当館収蔵の奈良美智作品の多くは、美術館が開館する 8 年前の 1998 年に収集されています。その頃ドイツに留学していた奈良は、制作の拠点をケルンに置いていました。欧米での発表の機会が増え始め、個人コレクターの間でも人気が高かった奈良の作品は、当時既に散逸が危ぶまれていました。郷土が輩出した新しい世代のアートの旗手として奈良を注視していた青森県は、その年、1980 年代後半の初期作品から当時の最新作にいたるまで 124 点の作品を一度に収集しました。本展はその年の収集作品を多数含む奈良の 1990 年代のドイツ時代の作品を中心にしつつ、作家から寄託されている 2000 年代以降の作品も合わせて展示いたします。

奈良は 2000 年にドイツから帰国。翌年以降、初の大規模な個展「I DON’ T MIND, IF YOU FORGET ME.」が横浜美術館を皮切りに、広島や弘前 (現 : 弘前れんが倉庫美術館) など全国 5 か所で開催されると、奈良美智の名前は日本国内に広く知られるようになります。

アレコホール　マルク・シャガールによるバレエ「アレコ」の舞台背景画

青森県立美術館の中心には、縦・横 21m、高さ 19m、四層吹き抜けの大空間が設けられています。アレコホールと呼ばれるこの大きなホールには、20 世紀を代表する画家、マルク・シャガール（1887-1985）によるバレエ「アレコ」の背景画が展示されています。青森県は 1994 年に、全 4 作品から成るバレエ「アレコ」の舞台背景画中、第 1 幕、第 2 幕、第 4 幕を収集しました。

これらの背景画は、帝政ロシア（現ベラルーシ）のユダヤ人の家庭に生まれたシャガールが、第二次世界大戦中、ナチス・ドイツの迫害から逃れるため亡命していたアメリカで「バレエ・シアター（現アメリカン・バレエ・シアター）」の依頼で制作したものです。大画面の中に「色彩の魔術師」と呼ばれるシャガールの本領が遺憾無く発揮された舞台美術の傑作です。

残る第 3 幕の背景画《ある夏の午後の麦畑》は、アメリカのフィラデルフィア美術館に収蔵され、長らく同館の西側エントランスに展示されていましたが、このたび同館の改修工事に伴い、4 年間の長期借用が認められることになりました。青森県立美術館での「アレコ」背景画全 4 作品の展示は、2006 年の開館記念で開催された「シャガール 『アレコ』とアメリカ亡命時代」展以来です。背景画全 4 作品が揃ったこの貴重な機会に、あらためてシャガールの舞台美術作品の魅力をお楽しみください。

★フィラデルフィア美術館所蔵の第３幕は、長期の借用となるため、函館税関からアレコホールを保税展示場とする許可をいただいて展示しています。

★アレコ特別鑑賞プログラム

高さ約 20 メートルの大ホールに展示された「アレコ」背景画に舞台用の照明をあて、音楽とともにバレエのステージを彷彿とさせる演出を加えながら、作品制作の背景、バレエのストーリーなどをナレーションで紹介する約 15 分間の鑑賞プログラムを、開館中、定時で上映しました。

上映時間 :① 10:30－ ② 12:00－ ③ 13:30－ ④ 15:00－

コレクション展 2022－1：地と天と

会期：2022 年 3 月 7 日（月）～ 6 月 26 日（日）
休館日：3 月 14 日、28 日、4 月 11 日、18 ～ 22 日、25 日、5 月 9 日、
23 日、6 月 13 日

今回のコレクション展は会場を地下 2 階展示スペースに移して開催。「地と天と」というテーマのもと、大地に根を下ろす力、大地から発するエネルギー、天空への憧憬、天からもたらされる恩恵などを描いた青森ゆかりの作家の作品をとおして、青森の精神風土について考えてみたいと思います。自らが生まれ育ち、生涯を暮らし、そして還っていくであろう「地」と、限りない可能性にむけて飛びたつことを夢みて仰ぎ見る「天」の、それぞれをめざす精神の運動の軌跡を紹介いたします。
また県立美術館の支援団体「青森県立美術館サポートシップ倶楽部」との共催による十和田市出身の美術家、中野渡尉隆の個展と、2021 年度に津軽地方で開催したアートプロジェクト「美術館堆肥化計画 2021」の成果展示を同時開催します。

展示室 A　棟方志功：天地万物を封じこめる

青森に生まれ、画家を目指して上京したのち版画の道へと進み、世界で活躍した棟方志功。その作品には裸の女人がよく描かれます。立っていたり座っていたり、舞っていたり漂っていたり、画中の女人像はしばしば天地を感じさせない様々な恰好で刻まれます。
1953 年制作の《湧然する女者達々》は、2 点組の板画それぞれに 3 人ずつ女人が描かれています。地から湧き出る「湧然の柵」、天から没する「没然の柵」、女人像が縦に配置されているこの作品は、元々は横向きで向かい合う形でした。このことについて棟方は「はじめ、毎日新聞社の現代日本美術展（※1）に出品したとき、屏風にして横に飛翔しているようにして出したのですが、サンパウロ（※2）のときは縦にして出しました。《飛翔する女者達々》だったのが《湧然する女者達々》になったわけです。」（※3）このように話します。出品する展覧会が違えば摺りや彩色の違いに伴って作品名が変わることはよくある棟方ですが、四方正面だとよく言われる冗談を楽しむかのように向きまで変えています。しかしそれでも違和感なく成立するのが棟方板画の妙。足首から下、足先の表現の仕方で作品の下辺は地にも宙にもなります。
棟方は作品制作について「天地の中にあるもろもろのものを作品にしてゆこう」「天地がもつ組織体のすべてをも板画の中に封じこめよう」などと述べ、天と地を大きなテーマの一つに捉えていました。書作品や倭画、板画のタイトルでは天と地を意味する「乾坤」を好んで使用したり、鳥と魚、太陽と月、東西・南北などの対になる要素を天と地を象徴するモチーフとして用いたりと、天地、すなわち全世界、宇宙まで思いをめぐらせています。好んで描いた大地の力や生命力を感じさせる立派な樹や山、天に向かってそびえ立つ姿、軽やかに舞う天妃たちなどからは、天地万物に対する棟方の畏敬の念や、生命への賛歌がほとばしるようです。棟方の手にかかれば天と地でさえ様々な姿形で描きだされます。

※1　1954 年第 1 回現代日本美術展《大蔵頌･乾坤輪上板壁画柵 (如･妙･慈･恩･眞･怒)》と題し出品。
※2　1955 年第 3 回サンパウロ・ビエンナーレ《湧然する女者達々》と題し出品。《二菩薩釈迦十大弟子》などと共に版画部門の最高賞を受賞。
※3　棟方志功「湧然する女者達々」『板画の道』宝文館、1956、p.52

展示室 B　成田亨：彫刻と怪獣の間で

青森高校在学中、阿部合成に学び、詩人山岸外史から薫陶を受けた成田亨。合成に「君は抒情詩人だ。浪漫派だ。」と賞され、「作為に満ちたエモーションのない絵は一喝された。」という成田は、晩年まで「初発的感情」という創作動機の重要性を繰り返し述べていました。少年期に戦争記録画を見て衝撃を受け、戦後の混乱期に多感な青年期を過ごし、高度成長期に入ると同時に映画、そしてテレビの仕事を手がけ、バブル期に自身の彫刻の集大成とも言える《鬼のモニュメント》（1991 年）を京都府大江町に完成させた成田は、ある意味で戦後社会の動向に沿いつつ創作活動を続けた作家と言ってよいでしょう。さらに、自らがデザインしたウルトラマンや怪獣が消費の対象という「商品」になってしまったことで精神的に疲弊した成田は「悲劇的なもの」へと傾倒し、晩年には「僕の描きたい絵のテーマは〈絶望〉です」（＊1）と述べるようになっていきました。
怪獣デザインについても成田は、「怪獣が芸術ではないというのは、内容的に芸術的であるかないかという問題じゃなくて、やっぱり芸術の分類の形式から、そうなっているんじゃないですか。」（＊2）と述べていますが、それはサブカルチャーが「傍流」であるという集合的無意識を反映したものと言えるのではないでしょうか。そうした一般的な価値観と、自身の表現との間で終生苦悩したのが成田亨という芸術家でした。それを成田個人の問題と捉えるのではなく、広く戦後日本の文化史／社会史の中に位置づけ、考えてみること。社会の閉塞感が再び強まりをみせる今、成田亨の歩んだ人生と残された作品から考えるべき点は多いように思います。

＊1　成田亨『特撮と怪獣』フィルムアート社、1995 年、p.256
＊2　前掲書『特撮と怪獣』 p.251

展示室 C　地と天と

この展示室では、「地」と「天」という、作家の創造的な精神が向かう二つの方向を軸に、5 人の作家を紹介しています。自らが生まれ育ち、生涯を暮らし、そして還っていくであろう「地」と、限りない可能性にむけて飛びたつことを夢みて、仰ぎ見る「天」のそれぞれをめざす精神の運動が、彼らの作品に描かれているように思われます。
横浜町にうまれ、八戸市で少年期をすごした豊島弘尚は、東京藝術大学卒業後、前衛画家のグループ「新表現展」をたちあげて活躍しますが、70 年代なかば、北欧に赴いたことをきっかけに、北欧神話などに想を得た壮大な作品を描くようになります。「アンドロメダ」「アンタレス」という二点では宇宙の星々を仰ぎ見、「アトランティス」では、空想の大地に、オリオン、ジュピターといっ

た神々の名やトロイ、バビロンといった古代の都市の名に交じって、青森、八戸といった故郷の地名が書きこまれています。
村上善男は、自らも担い手のひとりであった 60 年代の前衛の疾風が失速したのち、数値と記号で表現される無機的な気象の世界に韜晦しますが、弘前に居を移した 80 年代以降は、津軽の風土に自らの痕跡を刻み付けるように、「釘打ち」のシリーズを制作しています。これらのシリーズでは、ロマンティックな夢想よりも科学的な精神を感じさせる視点によって、地の理と天の法則をとらえようとしているかのようです。
田舎館村出身の田澤茂は、60 年代には前衛絵画の影響もうけていましたが、後年は児童画の素朴さにひかれつつ、日本人の心性に根差した表現を追い求め、鬼や故郷の化粧地蔵、菩薩などを描きました。「野の仏」では、岩木山をバックに、故郷の大地にしっかりと足をつけて生きる人々の真摯な祈りがユーモラスな群像表現のなかに息づいています。
弘前市出身の工藤甲人は、西洋美術の影響を深くうけながら、岩絵の具を用いた華やかな日本画を描きました。夢と覚醒、光と闇などの相反するものを合体させるということが、工藤の表現の核にあります。ここに展示した作品でも、冬の大地に眠る生命の息吹が春の光をもとめて空へとのぼっていこうとする自然の循環が、描かれています。
青森市浪岡に生まれ、旧制青森中学以来の太宰治の親友であった阿部合成は、大地とともに生きる農民たちへの共感と、現実の生活の彼方にある真実への希求との間に修羅の生涯を送った画家でした。出征し、シベリア抑留から帰国した阿部は、戦後のメキシコ滞在時にであった民俗的なキリスト教信仰などを題材に、ミイラや髑髏に代表される地の底の死の世界と、天上の救済への祈りが同居する独自の作品を描いています。「マリヤ・声なき人々の群れ A」で描かれた髑髏の海で祈る聖母の姿は、地の底にたちながら、はるか天の彼方を希求する画家の精神の姿ではないでしょうか。

展示室 D、映像室　美術館堆肥化計画 2021 成果展示
2021 年度、県立美術館ではアートプロジェクト事業「美術館堆肥化計画」を行いました。本事業は、美術館が地域とアートの今までにないつながりを生む「堆肥（肥やし）」となるべく、県内津軽地域で県立美術館や現代アート体験を展開したものです。本成果展示においては、美術館プロモーション展示「旅するケンビ」を行う中で出会った津軽地域ゆかりの資料（五所川原市に産出する偽石器や開拓農家・竹内正一氏による十三湖干拓の記録写真、農婦・外崎令子氏による平成の中泊の生活写真など）や、「耕すケンビ　津軽編：みみずの足あと」の中で展開されたアーティストらによる地域リサーチに基づき制作された作品、関連企画として開催した糞土師・伊沢正名氏による講演の記録動画などを組み合わせて紹介します。また「みみずの足あと」にちなんで平内町出身の「みみず博士」畑井新喜司先生ゆかりの資料も県立郷土館からお借りして紹介します。
各要素がまるで作物の根のように絡みあい、「よい畑」の条件である土の団粒構造になぞらえるようにして構成される本成果展示においては、津軽地域の人びと・アーティスト・美術館が協働で計画した、人が地域と、生き生きと関係するための術（アート）の様々が示されることになります。



小田香 (フィルムメーカー／アーティスト) による映画《これるおん 27 sep – 5 oct, 2021》を中心とした展示風景　撮影＝小山田邦哉

展示室 E　中野渡尉隆：コスモス
（青森県立美術館サポートシップ倶楽部共催展）
青森県立美術館サポートシップ倶楽部との共催により、十和田市在住の美術家、中野渡尉隆の個展を開催します。1966 年、十和田市に生まれた中野渡は、東京藝術大学で油画および油画技法材料研究を専攻。まだ学生であった 1994 年に制作した逆走するバイク《パイドロス》で大きな注目を集めますが、バブル崩壊後の閉塞感が漂う中、目的を見失ったままに疾走を続ける現代日本のありようを、高度に洗練された機械の集合体たるオートバイの「逆走」によってメタ的に捉えた作品と言えるでしょう。その後は「平面」という出自に立ち返り、絵画や写真を表現手法としながら、「世界」と「人間」の実在根拠を探るような作品を数多く手がけていきます。
人の耳を洞窟の入口に見立てた写真シリーズ「洞窟としての耳のために」では、ひとつとして同じ形のない人間の耳、その奥に広がる「暗黒」が見る者の多種多様な欲望を飲み込んでいきます。しかし暗黒はただ飲み込むだけではありません。むしろその暗黒は応え、そこから光を感じるときがあります。主体と他者の関係性がイコールとなる瞬間、すなわち「愛」がそこに生じるのです。本作はその奇跡の瞬間をもたらす装置とも言えるでしょう。
その後は、水を用いて平面上に複雑なマチエールを作り出す「WATER DROPLETS」シリーズを経て、その発展系となる「星・雪・水蒸気」シリーズ（2011 年～）を手がけます。雪、霧、雲、雨といった水をともなう自然現象、大気中の水分に反射することでゆらめきまばたく天空の星々・・・。生命の源たる水をモチーフとし、メディウムとしての「水」と「油」、技法としての「塗る」と「描く」、表現としての「具象」と「抽象」、モチーフとしての「大気圏」と「宇宙」など、2 つの要素をひとつの平面上に同存させたのが、この本シリーズです。入口であり出口としても機能する本作は、世界と生命の始原や、生と死、光と闇、文明と自然など相反する現象の「境界」のイメージとも解釈できます。そこには人間として生きることの本質的意味や、主体と他者 / 世界と均整のとれた関係性を考察す

るための糸口がひそんでいます。
洞窟から宇宙へ。地から天へと連なる本インスタレーションに身を浸し、わたしと世界のあり方、あるいは内在と超越という概念について改めて考えてみてください。



中野渡尉隆　星・雪・水蒸気 G7　2011 年　キャンバス、混合技法（油絵具・合成樹脂エナメル・タルク、天然白亜、胡粉、他数種の体質顔料）　194×162cm

コレクション展 2022−2：サマータイム・サマータイム
COLLECTION 2022-2: Summertime, Summertime

会期：2022 年 7 月 9 日（土）～ 10 月 2 日（日）
休館日：7 月 11 日、25 日、8 月 8 日、22 日、9 月 12 日、26 日
ナイトミュージアム：7 月 9 日、7 月 23 日、8 月 27 日、9 月 10 日、
9 月 24 日

新型コロナウイルス感染症の世界的大流行や頻発する自然災害、戦争とその影響による社会経済的混乱など、2020 年代に入って世界は大きな危機を迎えています。そうした中でも季節はまためぐり、夏がやってきました。しかし、季節は循環しながらも、気候変動によって四季のありようは大きく移り変わってきています。覚えているあの日々はすでに失われつつありますが、今求められるのは、これまでの価値や生活様式を見つめ直すレジリエンス（しなやかさ）ではないでしょうか。
そして文化もまた地域固有の環境が育んできたものです。つまりアートとの出会いは、我々の暮らす時代や土地を認識するための重要なファクターと言えるのです。そこで得た個人の意識は、やがて共同体の意識となり、ひいては病み、傷つき、歪んだ社会全体を立て直す力となっていくはずです。
本展をとおして、ある夏の、とても心地よく晴れた日のような「これから」を見つけていただければ。
あふれる光の中で、私があなたを愛するように。

企画展関連展示　ー青森と民芸

〇展示室 N：北国のさしこ着

青森県では、庶民の暮らしの中から、津軽地方の「こぎん刺し」、南部地方の「菱刺し」、「つづれ刺し」「裂織（さきおり）」など、地域の特性が反映された、寒い北の地域ならではの染織文化が生まれ、伝えられてきました。そのなかでも、江戸時代後期から明治・大正時代にかけて盛んに作られた「こぎん刺し」と「菱刺し」は、他の地域においても類例をみることができない、土地に深く根差した独自の技法をもった染織として注目されています。そのなかから、本展示では、2009 年に閉館した小川原湖民俗博物館旧蔵資料で、現在、青森県立郷土館に所蔵されている「こぎん刺し」のさしこ着物を中心に紹介します。
「こぎん刺し」は、農民の生活に対する厳しい統制（木綿の使用禁止など）がなされていた江戸時代、着用が許されていた自給の麻布の補強と保温効果を高めることを目的に生まれました。藍で染めた麻布の（主に）上着に、地布の奇数目を刺し糸ですくって模様刺ししたもので、当初は麻糸も使用されていたようですが、明治時代に入り、綿糸が手に入るようになると、木綿糸を使用した「こぎん刺し」が急速に発展し、明治 20 ～ 30 年代がその最盛期となりました。
「こぎん刺し」の模様は、「猫の足」「蝶々（テコナコ）」「胡桃殻（クルビカラ）」など身の回りの動植物などからモチーフを得た 40 種類ほどの基本模様を巧みに組み合わせたパターンを「流れ」「囲み」「イト」と呼ばれる刺し方でつなぐことで、大きく美しい模様を構成していきます。
「こぎん刺し」の刺し手は女性でした。5 歳の頃より刺し方の手ほどきを受け、12 歳になる頃には着物を刺せる腕前になっていたという女性は、「外出した時、珍しい柄のこぎんを着ている人を見かけると、その人の後をついて歩き、その柄のこぎんを覚えて帰り、早く思い出して刺すということも幾度もしました」（横島直道『津軽こぎん』日本放送出版協会、1974 年）と回想しています。
「こぎん刺し」は晴れ着として着古した後、仕事着としてさらに使い込まれていた跡が見られることから、晴れ着、仕事着のいずれにも用いられていたといわれています。また、藍染めの麻布に白い木綿糸で刺し綴ったイメージの強い「こぎん刺し」ですが、着古され、汚れやシミが目立つようになると、着物全体を色持ちがよく、殺菌効果の高い藍で何度も染め直して、さらに着続けられました。
青森の庶民の暮らしの中から生まれ育まれた生活着の一つ一つは、その実質的な役割を終えた現在もなお、私たちに語りかける多くのものを持っているように思われます。

〇棟方志功展示室：民芸運動家と棟方志功

1924 年に画家を目指して上京するも版画の道へと進んだ棟方志功。初めて板画を制作してから 9 年、1936 年第 11 回国画会展の会場で、大きな出会いがありました。絵巻物のような板画巻をやりたいと、全長 7mを超える板画《大和し美し（やまとうるわ）》を 4 枚の額に入れて搬入した棟方は、量が多いと陳列を拒否され大騒ぎ。そこへ工芸部の審査をしていた濱田庄司が通りかかり、「これは君、すごいよ」と民芸運動の指導者である柳宗悦を連れて来ます。感動した柳はこの年開館する日本民藝館で作品を買い上げるとし、展示についても全て飾れるように話をまとめました。出世作《大和（やまと）し美（うるわ）し》、この出会いが転機となり、棟方は濱田や柳、河井寛次郎といった民芸運動家との知遇を得ます。会期が終わり建設中の民藝館へ作品を届けに行った棟方は、部屋の正面に飾られている大鉢に心奪われ「先生、イギリス製でしょうか」と尋ねます。すると柳は、「九州の二川という窯の、うどん粉をこねる鉢で、職人が作ったものだよ」と答えました。「君のお父さんは立派な鍛冶職人だと聞いたが、この鉢も同じ職人の作だ。いまに、お父さんの造った刃物が、この鉢のように素晴らしいものであるのが判ってくるよ」（※1）　自分の名が偉くならないと立派な仕事にならないと思い込んでいた棟方にとって、このときの柳の民芸の教えは世界が一変する体験でした。棟方はこの時の感動を、「わたくしの仕事が希望と輝きと力にみちみちて来たのでありました」（※2）　と表しています。初めての師・柳から次々と指導を受け、また、状況に応じて指導者を与えられた棟方は、世界のムナカタへと成長していきます。
民芸のつながりは、東京だけのものではありません。1942 年、地方支部としては最初に結成された日本民芸協会青森県支部（現・青森県民芸協会）支部長の相馬貞三とは民芸でつながった親友で、一時は夏に帰省するたび弘前の相馬邸に宿泊し楽しみました。青森県支部発会時には、倭画《東湧西没韻（とうゆうざいもついん）》が会場を飾っています。濱田、柳、河井から始まった民芸運動家との親交は各地に広がり、

棟方の制作活動を物心両面で支えました。

※1　棟方志功「ラーメンと花」『わだばゴッホになる』日本経済新聞社、1975、p.80

※2　棟方志功「苦闘の日々」『板極道』中央公論社、1964、p.60

特別展示

〇展示室 O、P、Q、M：草間彌生のキセキ –W コレクションによる

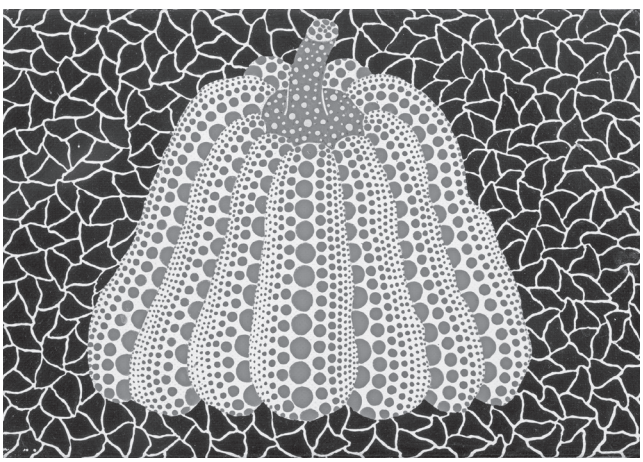
この度の特別展示では、昨年度、当館に寄託された「W コレクション」の草間彌生作品全 51 点を一堂に公開いたします。

草間彌生は 1929 年、長野県生まれ。1950 年代初頭にデビューし、多くの批評家やアーティストから注目を集めますが、50 年代後半に単身渡米。ニューヨークを拠点とし、絵画のみならず、彫刻、インスタレーション、パフォーマンス、映像など表現の幅を広げ、前衛美術家として広く知られるようになります。欧米で高い評価を受けた草間は 1973 年に帰国後も、既成の価値観や常識にとらわれない創造力をもって新たな表現を追求し続けていきました。90 歳を越えた現在も旺盛な制作意欲をもって前衛表現の最先端を走り続けています。

草間の創作の源泉は幼少時の幻覚体験や心の中に生じるイメージに求められます。それは、「点」や「網目」といった強迫観念的なモチーフを外在化（絵画化）することで、自らを抑圧する存在から解放され、自らの魂を救済しようとする試みであったのかも知れません。個の内面的な問題を、無限の創造力をもって普遍的な芸術へと昇華させていく点に草間芸術の本質があると言えるでしょう。草間の作品は人間の秘められた感性、感覚、感情を呼び覚ましてくれます。人間と自然の関係に対する深いまなざしから生み出される詩的で神秘的なイメージは、理性や思考を超越して多くの人々の心に迫ってきます。

今回展示する「W コレクション」は、初期から現在に至る草間の歩みとその芸術的エッセンスが凝縮された作品群です。最初期の貴重な「点」の作品をはじめ、インク、パステル、水彩、墨といった様々な画材を併用した平面作品、アッサンブラージュやコラージュの技法を用いた作品、大画面の油彩画や有機的な突起物が増殖するかのような立体作品から空間を活用するインスタレーションまで、草間の多彩な活動と、その強烈なオリジナリティが一望できます。

この「奇跡」のコレクションをとおして、草間彌生という異能の芸術家の「軌跡」を辿りつつ、永遠や無限、そして生と死、さらには愛といったテーマのもとに草間が紡ぎ出した、豊潤かつ幻想的なビジュアルイメージを堪能していただければ幸いです。



草間彌生　かぼちゃ　1990 年　アクリル・キャンバス　15.8 × 22.7cm
青森県立美術館寄託（W コレクション）　©YAYOI KUSAMA

夏休み企画

〇展示室 L：タイガー立石の陶彫 ー『じょうもんくんとたまご』

絵画、彫刻、漫画、絵本、イラストなどジャンルを自在に横断しながら独創的な表現活動を続けたタイガー立石（立石紘一 / 立石大河亞）。1963 年の読売アンデパンダン展でデビューし、64 年には中村宏氏と「観光芸術研究所」を結成。時代 / 社会のアイコンを多彩に引用しながら不可思議な情景を描き出したその作品は、和製ポップ・アートの嚆矢として注目を集めました。1965 年からは漫画も描き始め、タイガー立石の筆名を用いて雑誌や新聞へナンセンス漫画の連載を持つようになりますが、69 年 3 月に突如ミラノへ移住。延べ 13 年にわたるミラノ時代は、漫画からヒントを得たコマ割り絵画を精力的に制作する一方、デザイナーや建築家とのコラボレーションで数多くのイラストやデザイン、宣伝広告等を手がけています。1982 年に帰国し、90 年以降は絵画や陶彫作品を「立石大河亞」、漫画や絵本を「タイガー立石」名義で次々と発表していきました。

1991 年に「ギャラリー・ホロ」（千葉・茂原）の古代体験イベントで縄文風動物像を作って以降、立石は作陶に強い関心を抱くようになります。94 年にはアトリエに作陶用電気釜を設置、以降、陶彫による立体作品を本格的に制作していきました。縄文人の生活を想起しながら制作された土偶の数々から、立石は「じょうもんくん」というキャラクターを思いつき、まず絵で 1 冊の物語を描きます。しかし土偶の質感を伝えるためには実物を使った方が良いという判断に至り、表情やポーズを変えた「じょうもんくん」を何体も制作。周辺の環境や背景もすべて作り起こしたジオラマをひとコマごとに写真撮影するという膨大な作業を経て、絵本『じょうもんくんとたまご』は完成しました（福音館書店より 1994 年に刊行）。

ここでは、この写真絵本のために制作された陶彫作品を一堂に紹介いたします。愛らしい「じょうもんくん」をはじめ、立石のユニークな発想と高い造形力が読み取れる作品の数々をお楽しみください。

〇展示室 J：馬場のぼる：愛すべきぶたたち

青森県三戸町出身の漫画家、馬場のぼるの描く動物のキャラクターといえば、なんといっても代表作「１１ぴきのねこ」シリーズの「ねこ」や、名前ともゆかりのある「馬」がよく知られていますが、馬場の作品世界には、それだけでなく、きつね、くま、たぬき、おおかみ、ライオンなど、様々な愛すべき動物たちが登場します。なかでも「ぶた」は、『１１ぴきのねことぶた』など、わき役としてもしばしば登場しますが、手塚治虫、福井英一とともに少年漫画の三羽烏と称された時期の馬場の代表作で、第 1 回小学館漫画賞を受賞した『ブウタン』では、こぶたが堂々たる主人公をつとめ、

孤独にまけず生きていくやさしく強い心をもった少年が、ぶたの姿に託して描かれました。
今回は、馬場のぼるの後年の絵本作品の中から、友達にいじわるをしてしまう一風変わった女の子を主人公にした『こぶたのぶうこちゃん』、こぶたを捕まえて食べたいオオカミのお話『ごんすけのドーナツ』、そして、悠揚迫らぬ山の主と村の心優しい少年の物語、「もん太と大いのしし」の三作の絵本原画を展示、弱さと強さをあわせもつ、人間よりも人間らしい、馬場のぼるのぶたの世界を紹介します。

〇展示室 H：キッズ・リターン -「キッズ・アートワールドあおもり」の頃

「キッズ・アートワールドあおもり」は美術館の開館以前のプレイベントとして、2000 年と 2001 年に青森市で、2002 年に三戸郡、2003 年にむつ市で計 4 回開催されました。美術家のみならず、映画監督、料理研究家、ミュージシャン、絵本作家、ファッション・デザイナー、落語家、詩人など分野横断的な様々なクリエイターに参加してもらい、作品展示だけでなく、地域の子どもたちとの交流も積極的に行いました。やがてオープンする美術館のための環境づくりというコンセプトではじめたプロジェクトですが、そこで得た経験値は、その後の美術館活動の大きな基盤にもなっています。
様々なクリエイターと子どもたちとの交流によって、青森の未来を担う子どもたちが、早くからプロフェッショナルな表現活動にかかわり、その現場に立ち会うことには大きな意義があるのではないか。様々なクリエイターと遭遇し、様々な表現の形に触れることで、表現活動とは既成のもの、伝統的なものだけでなく、形式的にも、素材的にも、考え方においても、多種多様な可能性を秘めたものであるということを、肌で感じ取るという経験が、子供たちの自由な発想をはぐくむことになり、その後の人生を豊かにしていくのではないか。そうした想いのもとに「キッズ・アートワールドあおもり」は企画されました。さらには絵がうまくなるとか、将来クリエイターを志すきっかけを作る、といったことも目的とはしていませんでした。むしろ、利益に直結しない、あるいは時間を空費することの大切さを体験的に知ってもらうことを目指したプロジェクトでした。世界が多様であり、価値観も多様であり、生き方も多用であることを、お互いに認め合うことの大切さは、世界平和の基礎であり、アートはそのような認識に到達する一番早い文化活動領域である、と考えていたからです。われわれ大人にとってもアートとの出会いは、「私」を形成する上で非常に大きなファクターとなります。だからこそ、純粋な意識を保持している子どもたちに対しては、もっと強力に作用するのではないのでしょうか。
「キッズ・アートワールドあおもり」から 20 年。当時参加してくれた子どもたちはもう成人しています。果たしてどんな大人になっているのかな。それはわからないけど、あのみんなで楽しくワイワイ騒いだ夏の日の思い出を、いまここでもう一度振り返ってみたいと思います。これからの未来を担う、今の子どもたちに向けて。



秋山祐徳太子　ワークショップ「ダリコ DE アート」@三内丸山遺跡　2000 年

特集展示

〇展示室 I：没後 20 年記念 成田亨ー『ウルトラマン』の世界

映画『シン・ウルトラマン』に登場するウルトラマンは、カラータイマーが存在せず、目ののぞき穴やファスナーを隠すための背びれもなくなり、マスクからボディ、ブーツ、グローブまでシームレスにつながるなど、無駄な要素が極限まで削ぎ落されたデザインとなっています。そのシンプルで美しい造形は、ウルトラマンをデザインした成田亨の「理想」を具現化したものと言えるでしょう。
ウルトラマンのデザインにおいて成田は、「コスモス（秩序）」というコンセプトのもと、調和、純粋を意識しながらフォルムを練り上げていきました。デザインの変遷を初期稿から追っていくと、混沌とした要素が徐々に整理されていくことが読み取れます。おおまかなフォルムが固まったところで、立体での検討作業へと移行したため、ウルトラマンにはデザイン画としての決定稿は存在しません。このようにドローイングと立体で検討を重ねることで、一切の無駄が削ぎ落とされ、洗練されたフォルムを持つ新しいヒーローイメージが生み出されていったのです。
一方の怪獣デザインで成田は「コスモス」と対極にある「カオス（混沌）」の概念を用い、動植物をはじめ、世界各地の文化的所産やモダンアートの前衛的表現を自在に引用、合成することで、それまで誰も目にしたことのない斬新な形を導き出していきました。成田自身は「私は彫刻家ですから、形を基礎に怪獣を考えました。形の変形が私の怪獣といえます。」と述べていますが、そうしたフォルムの「意外性」が成田怪獣の最大の魅力と言えるのです。
成田がデザインした怪獣は 50 年以上経っても古びることなく、今もなお多くの人々を魅了し続けています。成田は 2002 年に 72 歳でこの世を去りましたが、没後 20 年の節目を迎える記念の年に『シン・ウルトラマン』が公開され、成田亨というアーティストに再び脚光が集まる今、当館では所蔵する『ウルトラマン』のデザイン原画のほぼ全点を一挙に公開し、その造形的な魅力を存分に紹介いたします。

コレクション展 2022−3
COLLECTION 2022−3

会期：2022 年 11 月 23 日（水・祝）～ 2023 年 1 月 29 日（日）
休館日：2022 年 11 月 28 日（月）、12 月 12 日（月）、26 日（月）
～ 2023 年 1 月 1 日（日）、10 日（月）、23 日（月）
ナイトミュージアム：2022 年 12 月 10 日、24 日、2023 年 1 月 14、28 日
会場＝地下 1 階、地下 2 階展示室

第 3 期コレクション展では特別企画として、津軽地方を拠点に活動する画家・櫻庭利弘（さくらばとしひろ）の展覧会を開催いたします。櫻庭の代表的なシリーズに加え、交流のあった豊島弘尚、常田健、工藤哲巳など青森県ゆかり作家もあわせて紹介し、櫻庭が生きてきた時代性を浮かび上がらせます。また、没後記念展示として没後 50 年の阿部合成、没後 30 年の小坂圭二、没後 20 年の成田亨の 3 人展も開催します。個性豊かな青森ゆかりの作家の表現をお楽しみください。

○展示室 N＋棟方志功展示室

棟方志功：ねぶたの原色、冬の白と黒。

青森市で生まれた棟方志功、本業の板画の他にも多岐にわたる彼の芸業（げいごう）を大きく二つに分けるとすれば、色の有る無しで語ることができます。板画は、白と黒絶対の対比こそがいのちであるとし、当初板画の彩色は足りないところを補う補助的なものでした。対して倭画や油絵は、評価対象となる板画から解放されたかのような伸びやかな筆致と鮮やかで華やかな色遣いが特徴として挙げられます。これは一見相反するような色彩ではありますが、青森市で生まれた棟方にとって、どちらも目に焼き付いてきた色彩ではないでしょうか。棟方は自身の色彩感覚について、「強烈きわまる染料で、黄、赤、青、紫の、さまざまな極端な原色を駆使して作るのです。このネプタの色、これこそ絶対まじりけのないわたくしの色彩でもあります。」※1 と語り、幼い頃に見たねぶたの強烈な原色が身についていると自伝で振り返っています。青森市はねぶたが終わると秋に向かい、紅葉が終わるとつらく長い冬がやってきます。一面の銀世界といえば綺麗ですが、暮らしている人々にとっては耐え忍ぶ季節です。大地が雪で覆われ空はどんよりと重く、街には葉の落ちた木々が黒く立ち並びます。そんな一年の半分近くにも及ぶ冬が明けると待ち望んでいた草木の芽吹く春がやってきます。極彩色の夏から色のなくなる冬、四季のはっきりと感じられる青森の風土は、棟方の芸業においても多大な影響を与えたことでしょう。

このたびの展示では、色の有る無しの観点から棟方作品をご覧いただきます。白と黒の絶対の対比が美しい板画や、無彩色でありながら彩りが感じられる華麗な板画、また、ねぶたの原色にも似た激しく華やかな色彩など、青森の四季折々の色彩が、棟方作品の中にも感じられるのではないでしょうか。

※1　棟方志功「幼少年時代」『板極道』中央公論社、1964、p.21

○展示室 O、P、Q、M、L、J

［特別企画］　デモシカ先生の絵画道（みち）：櫻庭利弘の歩み

津軽地方を拠点に活動する画家で元小学校教員の櫻庭利弘は、1934（昭和 9）年、青森県西津軽郡深浦町に生まれました。定年退職するまでの 42 年間に及んだ長い櫻庭の教員生活は、1953（昭和 28）年、当時の車力（しゃりき）村（現つがる市）にあった車力小中学校に代用教員として職を得たことに始まります。戦後の教員不足の時代にあって、「先生にデモなるか」「先生にシカなれない」と、一時しのぎのように教職に就いた代用教員たちは当時「デモシカ先生」と呼ばれました。櫻庭は近年、教師としての半生を『デモシカ先生回想記』と題した 3 巻の本にまとめました。そこには櫻庭と教え子たちの心温まる日々のエピソードや、櫻庭自身の信念のある生き様がいきいきと綴られています。

櫻庭は小学校教員として勤務するかたわら独学で油彩画を学び、50 年以上にわたり制作を続けてきた画家でもあります。日本海に面した小さな集落で過ごした幼少時代、美しく神秘的な海の光景に感性を育まれた櫻庭は、その長い画歴において、深浦の海の生物や轟川に沈む石、岩木川の流木など、津軽の自然に触発されながら、人間の内面に潜む生と死の相克を、力強く鮮やかな色彩のうねりと渦の中に表してきました。

櫻庭は教員を退職後、自らのアトリエ兼展示スペースとして、また人々が集う場として金木町に「私設櫻庭利弘美術館」を設立しています。この交流の場ができる以前から、津軽を拠点とする櫻庭のもとには、工藤哲巳（1935−1990）、田澤茂（1925−2014）など、青森に縁ある同世代の美術家たちや、撮影で青森に通った写真家の北井一夫（1944−）といった、さまざまな芸術家たちが訪れていました。

この展覧会は、櫻庭の教員そして画家としての歩みを資料と作品で振り返る PART1 と、彼が交流を持った芸術家たちを紹介する



櫻庭利弘　不漁の浜　1975　油彩・キャンバス　53×45cm
私設櫻庭利弘美術館蔵

PART2 の二部構成となっています。津軽の地に根ざし、絵画の道を貫いてきた櫻庭利弘の歩みと彼が生きてきた時代を見つめることで、私たちの「今」もあらたな姿で浮かび上がってくることでしょう。

協力： 私設櫻庭利弘美術館、深浦町美術館

〇展示室 C

［阿部合成没後 50 年］ 真実と浪漫の系譜ー阿部合成、小坂圭二、成田亨

今年、2022 年は青森市浪岡出身の画家、阿部合成の没後 50 年に当たります。戦中に郷里の出征の情景を描いた『見送る人々』が戦時体制にそぐわないものとして批判され、自らも出征して過酷なシベリア抑留を経験した阿部合成は、日本社会との軋轢に苦しみつつ、苦悩とともに生きる人々への共感にあふれた作品を残しました。また、若き日に合成と出会い、その薫陶をうけたのが彫刻家の小坂圭二と、彫刻家・特撮美術監督の成田亨です。彼らの作品にみられる芸術への真摯な姿勢と、自由で想像力に富んだ造形は、師の阿部合成からうけついだものといえるでしょう。今回の展示ではそれぞれ没後 30 年、没後 20 年をむかえた彼らの作品を阿部合成の代表的な作品と共に展示。3 人の芸術家の魂に宿された真実と浪漫の系譜を軸に紹介します。



小坂圭二　ガダルカナルの落日　1979　ブロンズ
120.0×60.0×40.0cm

コレクション展 2022−4
COLLECTION 2022−4

第 4 期コレクション展では、三沢市・六ヶ所村・新郷村など三八上北地方で開催した「美術館堆肥化計画 2022」の成果展示を中心に、棟方志功、成田亨、馬場のぼる、奈良美智の作品展示を行います。美術館が県南地域をフィールドとして展開したアートプロジェクトの豊かな成果を一堂に紹介するとともに、青森ゆかりの作家の個性に富む表現の数々をお楽しみください。

会期：2023 年 2 月 4 日（土）～ 2023 年 4 月 16 日（日）
休館日：2023 年 2 月 13 日（月）、27 日（月）、3 月 13 日（月）、
27 日（月）、4 月 10 日（月）

特別展示
展示室 O、P、Q、M、L、J｜美術館堆肥化計画 2022　成果展示

→26～29 ページを参照

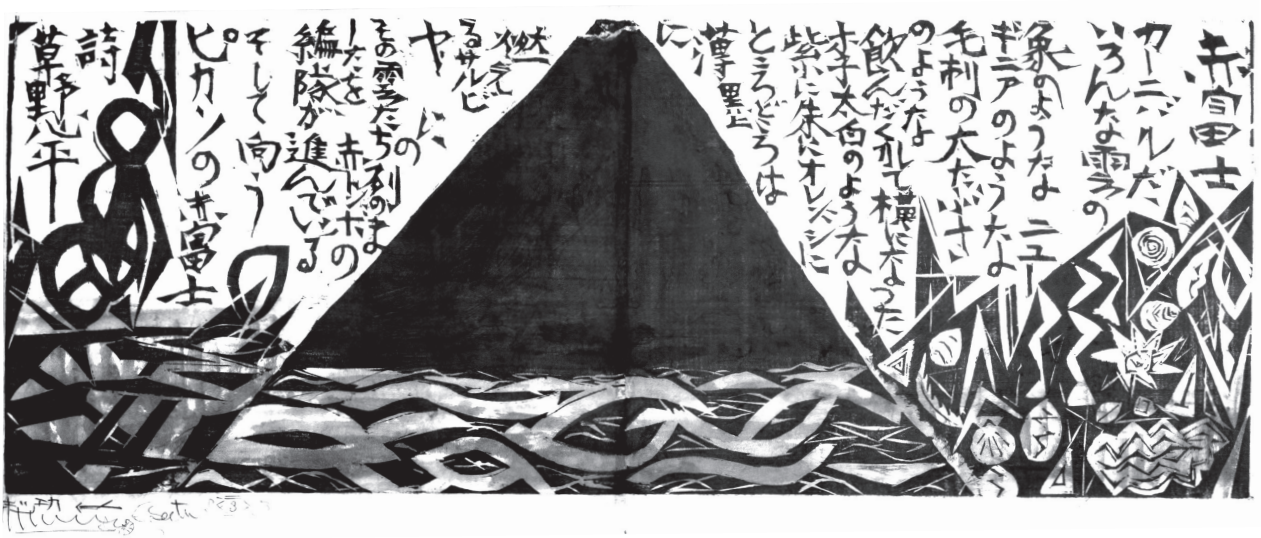
展示室 N＋棟方志功展示室｜棟方志功：文字をえがく
棟方志功は書作品はもちろん板画や倭画の中でも「文字」を表現するということに長けていました。その多くが俳句、短歌、詩といった文学の世界がテーマの作品に見られます。「僕は文字を彫るのが好きで…」「字もやはり絵だと思っているのです」（＊1）と語る棟方の板画や倭画の中の文字は、対象の文学作品を伝える言語としての役割を果たすと同時に、美しく図柄化されたものとして味わい深い存在です。特に板画では、陽刻と陰刻を組み合わせたり、レタリング風にしたり、扱い方は自由自在。絵と同等の主役と言っても過言ではない作品も少なくありません。谷崎潤一郎は、「あなたの文字はなかなか面白い」（＊2）、司馬遼太郎は、初期の頃は浄瑠璃本のようだったがやがて石工が鑿で叩き彫った金文や石文のようになった（＊3）と、文学者らもその文字表現を讃えています。

若い頃から文学に惹かれ、短歌や詩を自作することもあった棟方にとって、感銘を受けた文学作品は創作意欲を駆り立てるものでした。例えば、《大和し美し》（1936年）は佐藤一英の詩「大和し美し」を、《流離抄》（1953 年）は吉井勇の短歌を、それぞれ板画にしたいという思いが湧き上って生み出した作品です。文学者たちとの結びつきも強かったことから、本の挿絵や装幀、題字の仕事にも恵まれ、無名時代から晩年に至るまで、生涯で携わった本の数は千冊にも及ぶと言われます。そうした仕事の積み重ねもあって、文字の扱いや、絵との一体化を磨いていったのでしょう。
優れたデザイン力と詩人的感性を兼ね備えた棟方の、図柄的な文字と絵が共存した情感あふれる画面は、唯一無二の存在感を放っています。

＊1　「歌々板画巻をめぐって」『歌々板画巻』（1957 年、宝文館）
＊2　前掲書
＊3　司馬遼太郎『街道をゆく　41　北のまほろば』（1997 年、朝日新聞出版、258 頁）

展示室 I｜成田亨：彫刻と怪獣の間で
「真の芸術って何だろう？おそらく無償の行為だろう？私は、そう思っています。映画をつくったり、デザイナーと云われる人種は、芸術家ではなくなりそうです。世の中の変化と要求に、作家の方がピントを合わせて、努力は、自己探求ではなく、環境の変化への目移りだ、と云う事になりそうです。パイオニヤは薄幸の中にこの世を去り、そのパイオニヤの開いた道を、手際よく頂いて、我が世の春を謳うのがデザイナーと云う人種かも知れません。（中略）私はデザイナーです。これは彫刻家のアルバイトと、割り切れるものでもありません。新しい形を創ろうとしている自分は何だろう？（中略）私は彫刻家なのだろうか？或いはデザイナーなのだろうか？その両方だろうか？そのどちらでもないのだろうか？」（＊1）

青森高校在学中、阿部合成に学び、詩人山岸外史から薫陶を受け



棟方志功　赤富士の柵　1965 年　木版、彩色・紙

た成田亨。合成に「君は抒情詩人だ。浪漫派だ。」と賞され、「作為に満ちたエモーションのない絵は一喝された。」という成田は、晩年まで「初発的感情」という創作動機の重要性を繰り返し述べていました。少年期に戦争記録画を見て衝撃を受け、戦後の混乱期に多感な青年期を過ごし、高度成長期に入ると同時に映画、そしてテレビの仕事を手がけ、バブル期に自身の彫刻の集大成とも言える《鬼のモニュメント》（1991 年）を京都府大江町に完成させた成田は、ある意味で戦後社会の動向に沿いつつ創作活動を続けた作家と言ってよいでしょう。さらに、自らがデザインしたウルトラマンや怪獣が消費の対象という「商品」になってしまったことで精神的に疲弊した成田は「悲劇的なもの」へと傾倒し、晩年には「僕の描きたい絵のテーマは〈絶望〉です」（＊2）と述べるようになっていきました。

怪獣デザインについても成田は、「怪獣が芸術ではないというのは、内容的に芸術的であるかないかという問題じゃなくて、やっぱり芸術の分類の形式から、そうなっているんじゃないですか。」（＊3）と述べていますが、それはサブカルチャーが「傍流」であるという集合的無意識を反映したものと言えるのではないでしょうか。そうした一般的な価値観と、自身の表現との間で終生苦悩したのが成田亨という芸術家でした。それを成田個人の問題と捉えるのではなく、広く戦後日本の文化史／社会史の中に位置づけ、考えてみること。社会の閉塞感が再び強まりをみせる今、成田亨の歩んだ人生と残された作品から考えるべき点は多いように思います。

＊1　成田亨「彫刻と怪獣との間」『成田亨　彫刻・映画美術個展』リーフレット、1968 年

＊2　成田亨『特撮と怪獣』フィルムアート社、1995 年、p.256

＊3　前掲書『特撮と怪獣』 p.251

展示室 H｜馬場のぼる：『絵巻えほん　11 ぴきのねこマラソン大会』を中心に

（青森県立美術館サポートシップ倶楽部共催展）

馬場のぼる（1927-2001）は、青森県三戸町出身の漫画家、絵本作家です。戦後、漫画家としてデビューし、児童漫画・少年漫画の世界で活躍した後、大人漫画へと活動の幅を広げる一方で、1960 年代後半からは活動の中心を絵本制作へと移行させていきました。特に 1967 年に第 1 作を発表した『11 ぴきのねこ』（こぐま社）シリーズは馬場のぼるの代表作として、現在も多くの人たちに愛読されています。

『絵巻えほん　11 ぴきのねこマラソン大会』は、こぐま社が刊行する「絵巻えほん」シリーズのうちの一作として制作された作品です。馬場のぼるは、この大画面を舞台にねこの国で繰り広げられるマラソン大会の様子を、スタートからゴールまでの時間の経過とともに周囲の風景も含めてパノラミックに描き出しました。

最終的に描かれたねこの総数は約 1400 匹にも及びます。それぞれのねこの大きさにバラつきがでないよう、基準となるねこのサイズを設定した鯨尺ならぬ“ねこ尺”を用いながらの制作は、アイデアスケッチやラフスケッチを描きつつ、修正を重ねながらの下描きまでに約 2 か月、そこから墨書きに入り、彩色して完成させるまでにさらに約 2 か月を要する大仕事となりました。

作品のメインはマラソン走者として登場するおなじみの「11 ぴきのねこ」をはじめ、ねこの国に暮らす大勢のねこたちですが、他にも馬場のぼるの絵本によく登場する動物やキャラクター、馬場のぼるが好んだ草花、思い出の風物などが丹念に描き込まれており、読者は、マラソン走者のねこたちを目で追いながらも自由にサイドストーリーを想像し、楽しむことができるのです。まさに「絵で物語る」ことができた馬場のぼる作品の真骨頂といえるでしょう。

本展では『絵巻えほん　11 ぴきのねこマラソン大会』原画を中心に、馬場のぼるが愛し、描き続けた作品世界の一端を紹介します。長年にわたり、絵を見ることの楽しさ、面白さを多くの子どもたちに届けてきた馬場のぼるの作品世界をどうぞお楽しみください。



馬場のぼる　『絵巻えほん 11 ぴきのねこマラソン大会』原画（部分） 1984 年
鉛筆、墨、水彩・紙　個人蔵　©Noboru Baba

アートプロジェクト

美術館堆肥化計画 2022



事業ポスター

開催概要

－旅するケンビ　〈県立美術館プロモーション展示〉

2022 年 10 月 29 日（土）－12 月 11 日（日）

会　　場：三沢市歴史民俗資料館

開館時間：[10/31 まで]9:00－17:00

[11/1 から]9:00－16:00

休 館 日：毎週月曜日　＊要入館料

鑑賞者数：142 名





「旅するケンビ」三沢市歴史民俗資料館での展示の様子

－耕すケンビ　県南編：囁きを編む

〈現代アーティストによる作品制作・展示等〉

2022 年 10 月 29 日（土）－12 月 11 日（日）

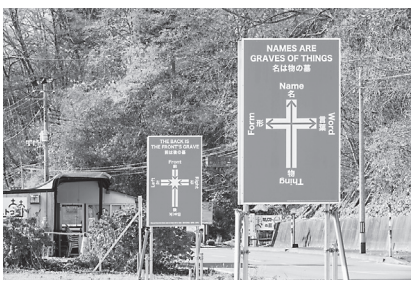
参加作家（1）アート・ユーザー・カンファレンス（アートコレクティブ）

会　　場：キリストの里公園のその周辺（新郷村）

＊会期中無休　＊＊観覧無料

鑑賞者数：1,200 名程度

※積雪状況によっては 12 月 11 日以降も観覧可能とし、現在まで作品看板は現地設置中。





「耕すケンビ」アート・ユーザー・カンファレンス『ジェネラル・ミュージアム｜墓』展開

参加作家（2）小田　香（フィルムメーカー／アーティスト）

会　　場：斗南藩記念観光村内「開墾村」（三沢市）

開村時間：[10/31 まで]9:00－16:30

[11/1 から]9:00－16:00



「耕すケンビ」小田香による映像作品《ホモ・モビリタス》（2022）展示の様子

休 村 日：毎週月曜日　＊観覧無料
鑑賞者数：329 名

参加作家（3）田附　勝（写真家）
会　　場：六ヶ所村立郷土館
開館時間：9:00 - 16:00
休 館 日：毎週月曜日　＊入館無料
鑑賞者数：751 名



「耕すケンビ」田附勝による写真展示『刻み込む土地』から地下空間での《KAKERA》展示風景



「耕すケンビ」田附勝による写真展示『刻み込む土地』から常設展示室での写真作品《住んでいた土地（上弥栄 石油備蓄基地）2022 年 7 月》の展示風景

オンライン勉強会「蚕虫山人とみる夢」
参加無料・要事前申込
vol.1「蚕虫山人という生き方」
日　　時：10 月 8 日（土）13:30−15:00
講　　師：望月昭秀（『蚕虫放浪』著者／『縄文 ZINE』編集者）
参加者数：14 名
vol.2「蚕虫山人 in 青森」
日　　時：10 月 22 日（土）13:30−15:00
講　　師：太田原慶子（青森県立郷土館学芸員）
参加者数：12 名
vol.3「墓という距離　−『ジェネラル・ミュージアム』をめぐって」
日　　時：11 月 27 日（日）14：00−15：30
講　　師：アート・ユーザー・カンファレンス
参加者数：10 名
vol.4「美術館の『内』と『外』　−寺山修司のミュージアム論から」
日　　時：12 月 4 日（日）14：00−15：30
講　　師：広瀬有紀（寺山修司記念館学芸員）
参加者数：10 名



「耕すケンビ」オンライン勉強会「蚕虫山人とみる夢」DM

ー成果展示
2023 年 2 月 4 日（土）−4 月 16 日（日）
会　　場：青森県立美術館 OPQMLJ
開館時間：9:30−17:00
休 館 日：毎月第 2、第 4 月曜日　＊要入館料
鑑賞者数：13,846 名

主　　催：青森県立美術館
協　　力：三沢市観光協会、新郷村ふるさと活性化公社、一般財団法人六ヶ所村文化振興公社
企画ＨＰ：
https://www.aomori-museum.jp/schedule/11031/



「成果展示」入口



「成果展示」アート・ユーザー・カンファレンス：ジェネラル・ミュージアム｜墓　展開の様子





「成果展示」三沢市ゆかりの歴史資料 × 美術館コレクション：波のまにまに 展示の様子



「成果展示」三沢市ゆかりの歴史資料 × 美術館コレクション：波のまにまに 展示の様子



「成果展示」田附 勝：刻み込む土地 展示の様子



「成果展示」小田 香：ホモ・モビリタス 展示の様子





「成果展示」蓑虫山人：「陸奥庵」の夢 展示の様子

記 録 集

総 頁 数：124 頁
サ イ ズ：A5 判　ソフトカバー
編　　集：奥脇嵩大
執　　筆：アート・ユーザー・カンファレンス、奥脇嵩大
デザイン：菊地敦己
印刷製本：株式会社山田写真製版所
発　　行：青森県立美術館
発 行 日：2023 年 3 月 30 日

事業解説

2021 年度からはじまった「美術館堆肥化計画」第二弾。県南地域に伝わる「歴史」「記憶」「縄文」を手がかりに、美術館と地域が協働することを通じて地域の魅力を発掘・発信した事業である。三沢市の歴史民俗資料館を会場にした美術館プロモーション展示部門「旅するケンビ」と、県南地域の様々な場所や施設を拠点に参加アーティストによる現代アート作品の制作展示やオンライン勉強会を行うプロジェクト部門「耕すケンビ　県南編:囁きを編む」の二本立てで展開し、年度末にそれらの成果を組み合わせた「成果展示」を県立美術館で開催した。

旅するケンビ　美術館の紹介パネルや外壁を彩るネオンサイン、ファッションブランド「ミナペルホネン」が手がけた監視員の制服を紹介したほか、旧小川原湖民俗博物館所蔵の神棚などを美術館の模型と組み合せて紹介した。本展示においては既存の美術館と博物館の領域の「あわい」を設計することを通じて、総合的なミュージアムのあり方を示され、そうした実験的な展示のあり方は「芸術かそうでないかを越えて、作品資料を見る目が養われて新鮮な感覚」という意見がでるなど好評であった。

耕すケンビ　「県南編：囁きを編む」をテーマとし、参加作家 3 組が県南地域 3 会場でもって作品を展開した。新郷村ふるさと活性化公社の協力を得たアート・ユーザー・カンファレンスは、キリストの里公園とその周辺を会場とし、「キリストの墓伝承」から着想を得た、まだ見ぬ世界に向かうための国道看板状の作品を設置した。小田香は三沢市観光協会や青い森鉄道の協力のもと、斗南藩の人々の会津藩からの移動や斗南藩の重臣・廣澤安任と旅人・蓑虫山人の交流などから着想を得て、運行中の電車の車窓風景をもとにした映像作品《ホモ·モビリタス》を制作。斗南藩記念観光村内「開墾村」の展示と組み合せる形で展示を行った。六ヶ所村立郷土館の協力を得た田附勝は、各地の博物館収蔵庫の土器をその保護材として使用されていた新聞紙とともに撮影する写真シリーズ《KAKERA》新作を制作。それと並行して現在の村の風景や石碑を撮影するなどして制作した写真作品を六ヶ所村立郷土館の 1 階常設展示室や地下空間で展示する展覧会『刻み込む土地』を開催した。いずれの会場でも地域と協働し、取材してつくられた現代アート展開を歓迎する声が聞かれたほか、地域の魅力に改めて気づかされた旨の声を多くいただくことができた。

また事業を準備する過程で知るところとなった岐阜出身で幕末明治の県下を旅した才人・蓑虫山人の業績を知り、その活動を現在に活かすためのオンライン勉強会「蓑虫山人とみる夢」を実施し、蓑虫山人の研究者や、蓑虫山人の業績を手がかりにして多角的にその意義を検討すべく集められた様々な分野の講師陣による勉強会はいずれも好評をもって終了した。

成果展示　コレクション展内特別展示として開催される本展示は、「美術館堆肥化計画 2022」が県南地域でどのように展開したかを示し、その展開のありようを美術館本体にフィードバックさせることを試みるものであった。県南地域でなされた現代アート展開や地域固有の生活資料、蓑虫山人ゆかりの作品資料や民間伝承などに至るまでを美術館コレクションを混在させることになった本展は、美術館が作品を管理し歴史化するべく切り捨ててきた曖昧性や親密さといった要素を拾い集め、それらをあえて軸とし構成されることに特徴がある。E.H. カーが示したところの「現在と過去との尽きることのない対話」が歴史であるならば、ミュージアムは歴史生産を担うとともに、地域の人びとや作品との対話（交流）の中でなされた誤読や、途切れた対話の沈黙に含まれるある種の雄弁さにも目を向けることが必要ではないか。そこに結ばれる地域の歴史によりそいながら、今ある歴史をもとに美術館内部からもう一つの歴史を形にしようとする態度を養うべきではないだろうか。総じて本成果展示は、既存の芸術のあり方を足がかりとして、人が今ここを生きることを足元から更新させるような術（アート）の萌芽を示すものとなった。

担当所感

県南地域に固有の「歴史」を手がかりとし、地域団体とアーティスト、美術館が協働して作り上げる局面が多くみられた「美術館堆肥化計画 2022」においては、作品を至上のものとして扱うのではなく、地域生活や歴史と一体となったものとして取り上げ、それを価値として発信する美術館なりのやり方を開発するものとなった。総じて個人の発意も作品制作も一連のものとして捉え、そうして今に残る作品や資料を生活と芸術を総合的にとらえたところに生まれるエネルギーと扱い、そんなエネルギーを見る人すべてが受け取り、自らの生活に影響させられるような場所、そんな文化的堆肥のような働きを創出する場所として美術館を位置づけなおす機会となった。地域の協力団体と作家、美術館との濃密なやりとりのもとに準備された本事業は、必然的に作家の今後の制作に影響を与え、参加作家の一人においては取材地域を引き続きリサーチし、地域の協力のもと新作をつくろうとする動きがみられる。美術館においても彼らの活動を引き続き注視していきたい。

総じて「美術館堆肥化計画 2022」は昨年度同様、美術館活動を広く地域に向けて積極的にひらくことを介して、美術館の活動可能性を拡張すると同時に地域に根ざした文化的な生活の向上を図る機会として機能していたとすることができる。

5 館連携プロジェクト

5 館連携の推進

事業概要

2020 年の弘前れんが倉庫美術館の開館と 2021 年の八戸市美術館の開館を機に、青森県立美術館、青森公立大学 国際芸術センター青森、十和田市現代美術館の 3 館を加えた 5 つの公立の美術施設による連携の取組を推進するための組織として 2020 年 7 月に「青森アートミュージアム 5 館連携協議会」（事務局 : 青森県立美術館）が設立された。

県民及び観光客の県内周遊を促進し、美術館への入館者数の増加につなげるため、5 館連携の基盤を活用して、青森のアートの魅力を国内外への情報発信及び周遊促進に係る事業を行っている。



5 館連携ロゴ・キャッチコピー

主な事業内容

（1）5 館共通ウェブサイトを活用した情報発信

（URL : https://aomorigokan.com）

①各館の基本情報、展覧会スケジュール

②5 館以外のアートコンテンツ情報

③アクセス情報

④建築家インタビュー動画

青森県立美術館、青森公立大学 国際芸術センター青森、弘前れんが倉庫美術館、十和田市現代美術館の各館建築家へのインタビュー動画を制作、公開（※八戸市美術館の動画は 2021 年度制作、公開済）

⑤学芸員コラム

青森県立美術館、弘前れんが倉庫美術館、十和田市現代美術館の各館建築に関連した学芸員コラムを制作、公開（※八戸市美術館は 2021 年度制作、公開済。青森公立大学 国際芸術センター青森は 2023 年度制作、公開予定）

（2）「建築」を共通テーマとするプログラムの実施

各館独自に建築に係る展示や建築ツアー等を実施

（3）青森アート周遊パンフレットの制作

5 館の情報のほか、美術館が建てられた背景や地域の魅力を感じられるスポットの紹介、よりみちスポット（飲食店、雑貨店等）、アクセス情報を掲載したパンフレットを制作

①タイトル

rakra× 青森巡り

※大人のための北東北エリアマガジン ラ・クラ特別編集版として制作

②規格

B5 判変形（226mm×180mm）

32 ページ（表紙・裏表紙含）両面フルカラー

③作成部数

10,000 部

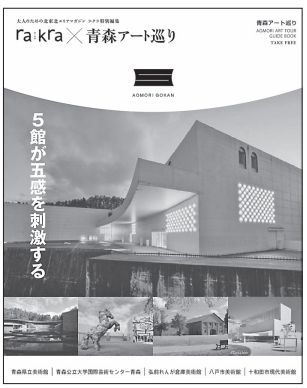
④配布先

5 館、行政機関、県内観光施設、取材先

⑤発行

2023 年 3 月 17 日

※rakura4・5 月号に見開きで紹介記事も掲載



rakra× 青森巡り（表紙）



rakra× 青森巡り（青森県立美術館紹介ページ）

（4）5 館周遊チケットの制作

「AOMORI GOKAN アートフェス 2024」での効果的な周遊チケット販売につなげるため、2023 年 4 月より、周遊チケットを試行的に販売し、販売・精算方法の課題、集客・宣伝効果等についての検証を行うためのツールとして、5 館周遊チケットを制作。

①内容

・2023 年 4 月 15 日から 7 月 15 日まで利用可能な各館展覧会チケット
・オリジナルデザインのトートバッグ
・上記を封入した特製缶「Go 缶」

②制作数

300 セット

※販売は 2023 年度に行うが、販売期間、販売数、金額等は 2022 年度に決定。



「Go 缶」とセットイメージ

（5）パブリシティ

各媒体に情報提供を行い、5 館で連動した情報発信を行った。

○雑誌等掲載実績（主なもの、順不同）

・ノジュール
・HARPER’S　BAZAAR
・フィガロジャポン
・FDA 機内誌ドリーム 3776
・東横 INN 客室誌　たのやく
・Kappo
・BUNGA NET
・イロハニアート
・青い日記帳　　ほか

（6）青森アート周遊観光コンテンツの開発

「5 館連携協議会」の連携の基盤と、青森県ならではの文化、食などの地域資源を活用して、「アートツーリズム」の旅行商品化に向け、アートを活用した周遊促進につなげる観光コンテンツを開発した。

①公益社団法人青森県観光国際交流機構

5 館周遊コースの開発（八戸市美術館･十和田市現代美術館と、南部の文化・アートにふれる旅など）

②一般社団法人十和田奥入瀬観光機構

十和田エリアの地域資源を活用した体験型コンテンツを開発（E-Bike でアート探しの旅など）

③一般社団法人 Clan Peony 津軽

弘前エリアの地域資源を活用した体験型コンテンツを開発（津軽こぎん刺しの体験箱など）

※2023 年度は八戸、下北エリアでも同様にコンテンツ開発を行う予定。

（7）「AOMORI GOKAN アートフェス 2024 実行委員会」の設立

・5 館連携協議会のこれまでの取組を基礎として、5 館、各館を所有している県と市に加え、アート周遊の取組を考えて公益社団法人青森県観光国際交流機構を含めた「AOMORI GOKAN アートフェス 2024 実行委員会」が新たに発足した。（2023 年 3 月）
・今後「AOMORI GOKAN アートフェス 2024」の開催に係る内容はすべて当実行委員会で検討していくこととした。
・構成団体

青森県立美術館、青森公立大学 国際芸術センター青森、弘前れんが倉庫美術館、八戸市美術館、十和田市現代美術館、青森県、青森市、弘前市、八戸市、十和田市、（公社）青森県観光国際交流機構

各種イベント

ナイトミュージアム

開館時間を延長した夜の美術館で、多くの方にゆったりとした時間を楽しんでいただくための「ナイトミュージアム」を開催した。

概要

日程：2022年 7月 9日（土）、23日（土）
8月27日（土）
9月10日（土）、24日（土）
12月10日（土）、24日（土）
2023年 1月14日（土）、28日（土）
2月11日（土）、25日（土）
時間：17:00−20:00（最終入館 19:30）

広報活動

宣伝物作成枚数：
チラシ（A4版／カラー両面）8,500枚
※夏季・冬季で計2回印刷

広報：
・青森市内の文化施設、観光施設、ホテル、飲食店を中心にチラシを配布し、配置を依頼。
・青森県立美術館のホームページやSNS、県広報（ラジオ・新聞）等で情報を発信。
・青森ケーブルテレビのお知らせにて、定期的に情報を発信。



夏季チラシ



冬季チラシ

イベント

（1）アレコホール無料開放（全日実施）
「アレコホール」をナイトミュージアム限定で無料開放。アレコホールのみ入場の来館者には、青森県立美術館のロゴマークのシールを確認しやすい位置に貼付。

（2）館内鑑賞ツアー（全日実施）
・青森県立美術館の建築や作品について、学芸員が解説するツアーを実施。
・ホームページで募集。先着順・予約制・コレクション展チケットの購入が条件のもと10名限定で実施。すべて定員上限の申込。


館内鑑賞ツアーの様子

（3）ピアノ演奏会
「アレコホール」にてピアノを学ぶ学生等によるピアノ演奏会を開催。（詳細は46P参照）

（4）ミュージアムコンサート
「アレコホール」にて、様々な音楽ジャンルのミュージアムコンサートを開催。（詳細は47P参照）

（5）カフェ「4匹の猫」
ナイトミュージアム限定メニューを提供。
・夏季メニュー


上段：生ハムとじゃがいものジェノベーゼ 1480円
右下：ウニとアワビのいちご煮風ピラフ 1780円
左下：チキンと厚切りベーコンのBBQソースバーガー 1580円

・冬季メニュー


チョコラータプディング　600円

学芸

美術資料収集

「美術資料収集」における作品データは、作家名、作品名、制作年、寸法（高さ × 縦 × 横、㎝）、技法、収集区分、備考の順に記した。

令和 4 年度収集美術資料

棟方志功
市民体操の柵
1936
39.2×39.2
木版・紙
寄贈

棟方志功
山懐頌　山懐の柵（1）
1963
149.5×144.0
木版・彩色・紙
寄贈
小林正一コレクション

棟方志功
山懐頌　山懐の柵（2）
1963
149.5×144.0
木版・彩色・紙
寄贈
小林正一コレクション

棟方志功
山懐頌　妙唱の柵
1954,1963,1964
130.0×125.6
木版・彩色・紙
寄贈
小林正一コレクション

棟方志功
山懐頌　胸肩妖顔の柵（B）
1959
39.8×23.3
木版・彩色・紙
寄贈
小林正一コレクション

棟方志功
山懐頌　一字金輪の柵
1967
46.0×28.2
木版・彩色・紙
寄贈
小林正一コレクション

棟方志功
大弁財天妃図
1970
69.5×44.5
墨・彩色・紙
寄贈
小林正一コレクション

棟方志功
余香佳饌図
1964
27.0×24.0
墨・彩色・紙
寄贈
小林正一コレクション

棟方志功
両妃飛天図
1967
52.0×58.5
墨・彩色・紙
寄贈
小林正一コレクション

棟方志功
御躍鯉図
1970
58.8×34.5
墨・彩色・紙
寄贈
小林正一コレクション

棟方志功
加和施美図
1969
27.3×19.2
墨・彩色・紙
寄贈
小林正一コレクション

棟方志功
御鷹松図
1970
69.5×44.5
墨・彩色・紙
寄贈
小林正一コレクション

棟方志功
金魚ネブタ図
1970
36.0×34.5
墨・彩色・紙
寄贈
小林正一コレクション

棟方志功
白描胸肩妃神図
1971
59.7×27.0
墨・紙
寄贈
小林正一コレクション

阿部合成
牛追い（メキシコにて）
1971 年頃
14.6×44.9
油彩・板
寄贈

阿部合成
菜の花
1966
41.0×31.3
油彩・板
寄贈

阿部合成
道化
15.8×10,5
油彩・板
寄贈

阿部合成
女の横顔
13.8×10.2
鉛筆、インク、水彩・紙
寄贈

阿部合成
猫
13.8×19.1
水彩・紙
寄贈

工藤甲人
流れる霧
1960 年代
36.9×44.3
着彩・紙
寄贈

工藤甲人
春雪
30.8×37.8
着彩・紙
寄贈

飯窪敏彦
棟方志功写真
1968−1971
27.9×35.6 / 25.4×30.5
ゼラチン・シルバー・プリント
寄贈
62 点

中野渡尉隆
星・雪・水蒸気 D13
2011
162×130.3
キャンバスに混合技法（油絵具・合成樹脂エナメル・タルク、天然白亜、胡粉、他数種の体質顔料）
寄贈

馬場のぼる
「絵巻えほん　11 ぴきのねこマラソン大会」
原画
1984
45.3×439.0
紙・墨、水彩、鉛筆
寄贈

馬場のぼる
漫画原画
寄贈
61 点

馬場のぼる
絵本・かみしばい原画
寄贈
43 点

北井　一夫
《ヒョウタン》撮影地：下北地方
1970 年（1988 年のモダンプリント）
15.5×23.0
ゼラチン・シルバー・プリント
寄贈

北井　一夫
《干物》撮影地：下北地方
1970 年（1988 年のモダンプリント）
15.5×23.0
ゼラチン・シルバー・プリント
寄贈

北井　一夫
《干物》撮影地：下北地方
1970 年（1988 年のモダンプリント）
23.0×15.5
ゼラチン・シルバー・プリント
寄贈

北井　一夫
《恐山》撮影地：下北地方
1970 年（1988 年のモダンプリント）
15.5×23.0
ゼラチン・シルバー・プリント
寄贈

北井　一夫
《恐山宿坊の少女》撮影地：下北地方
1970 年（1988 年のモダンプリント）
15.5×23.0
ゼラチン・シルバー・プリント
寄贈

北井　一夫
《東通村の少女》撮影地：青森県下北郡東通村
1970 年（1988 年のモダンプリント）
15.5×23.0
ゼラチン・シルバー・プリント
寄贈

北井　一夫
《海》撮影地 : 下北郡東通村尻労
1970 年（1988 年のモダンプリント）
15.5×23.0
ゼラチン・シルバー・プリント
寄贈

北井　一夫
《十三大橋》
1971 年（1988 年のモダンプリント）
15.5×23.0
ゼラチン・シルバー・プリント
寄贈

北井　一夫
《スルメ》撮影地 : 北津軽郡小泊下前
1971 年（1988 年のモダンプリント）
23.0×15.5
ゼラチン・シルバー・プリント
寄贈

北井　一夫
《漁村》撮影地 : 北津軽郡小泊下前
1971 年（1988 年のモダンプリント）
15.5×23.0
ゼラチン・シルバー・プリント
寄贈

北井　一夫
《間垣の兄弟》撮影地 : 五所川原市脇元
1972 年（1988 年のモダンプリント）
23.0×15.5
ゼラチン・シルバー・プリント
寄贈

北井　一夫
《五能線》撮影地 : 津軽地方
1972 年（1988 年のモダンプリント）
23.0×15.5
ゼラチン・シルバー・プリント
寄贈

北井　一夫
《二十三夜講》撮影地 : 津軽地方
1972 年（1988 年のモダンプリント）
15.5×23.0
ゼラチン・シルバー・プリント
寄贈

北井　一夫
《十三湖》
1973 年（1988 年のモダンプリント）
15.5×23.0
ゼラチン・シルバー・プリント
寄贈

北井　一夫
《十三湖》
1973 年（1988 年のモダンプリント）
15.5×23.0
ゼラチン・シルバー・プリント
寄贈

北井　一夫
《地吹雪》撮影地 : 五所川原市十三
1973 年（1988 年のモダンプリント）
15.5×23.0
ゼラチン・シルバー・プリント
寄贈

北井　一夫
《お地蔵さま》撮影地 : 五所川原市金木
1973 年（1988 年のモダンプリント）
15.5×23.0
ゼラチン・シルバー・プリント
寄贈

石井康治
潮騒
1983
59.0×15.0
吹きガラス
寄贈

石井康治
炎晶
1984
66.0×20.0
吹きガラス
寄贈

石井康治
夕映
1986
12.0×58.0×13.0
吹きガラス
寄贈

石井康治
夕映
1986
20.5×49.0×15.0
吹きガラス
寄贈

石井康治
海－MOANA
1987
31×28×12.5
吹きガラス
寄贈

石井康治
木影
1987
28.0×37.0×15.0
吹きガラス
寄贈

石井康治
風
1987
43.5×26.5×10.5
吹きガラス
寄贈

石井康治
樹映
1988
30.0×23.0×9.0
吹きガラス
寄贈

石井康治
朝霧
1989
31.0×27.0×10.0
吹きガラス
寄贈

石井康治
風の景
1989
33.0×28.0×11.0
吹きガラス
寄贈

石井康治
湖映
1989
33.0×17.0×10.0
吹きガラス
寄贈

石井康治
銀河
1989
31×22×7.5 吹きガラス
寄贈

石井康治
花の景－眺
1990
43.5×23.5×18.0
吹きガラス
寄贈

石井康治
波の音
1990
29.0×38.0×23.0
吹きガラス
寄贈

石井康治
樹映
1991
41×20.5×13.5
吹きガラス
寄贈

石井康治
青嵐
1991
44.0×27.0
吹きガラス
寄贈

石井康治
彩烈紋器
1991
36.0×27.0
吹きガラス
寄贈

石井康治
樹映
1992
34.5×26.5×11
吹きガラス
寄贈

石井康治
金彩流文大皿
1992
8.0×52.0
吹きガラス
寄贈

石井康治
花映盤
1992
12.0×55.0
吹きガラス
寄贈

石井康治
汎状文器－謐
1992
44.0×22.0
吹きガラス
寄贈

石井康治
彩烈文コンポート
1992
23.0×33.0×31.0
吹きガラス
寄贈

石井康治
彩烈文器－轟音
1992
40.0×28.0
吹きガラス
寄贈

石井康治
彩流モール器
1993
35.0×41.0×25.0
吹きガラス
寄贈

石井康治
葉状文花生
1993
46.0×29.0×15.0
吹きガラス
寄贈

石井康治
流水文器
1993
45.0×24.0
吹きガラス
寄贈

石井康治
流文器－燿
1993
35.0×27.0
吹きガラス
寄贈

石井康治
環象文器－想
1993
39.0×32.0
吹きガラス
寄贈

石井康治
環象文器
1993
40.5×32.0
吹きガラス
寄贈

石井康治
樹映文器
1994
26.5×26×13
吹きガラス
寄贈

石井康治
樹映－秋の景
1995
27.5×28.5×14.0
吹きガラス
寄贈

石井康治
樹映－春の景
1995
29.0×35.5×15.0
吹きガラス
寄贈

石井康治
樹映－夏の景
1995
36.5×24.0×14.0
吹きガラス
寄贈

石井康治
ガラス筥－緑映
1995
26.5×22.0×14.0
吹きガラス
寄贈

石井康治
ガラス筥－秋詩
1995
29.0×21.5×14.5
吹きガラス
寄贈

石井康治
テーブルランプ
1995
72.0
吹きガラス
寄贈

石井康治
ガラス筥－流景
1995
33.0×22.0×14.0
吹きガラス
寄贈

石井康治
彩花文器
1995
40.5×32.0
吹きガラス
寄贈

石井康治
彩花文器－醍醐
1995
31.0×29.0
吹きガラス
寄贈

石井康治
彩硝文花生
1995（22.0×35.0×14.0）
吹きガラス
寄贈

石井康治
彩硝文器
1995
41.0×19.0×13.0
吹きガラス
寄贈

石井康治
流文ビアマグ
1995
16.5×10
吹きガラス
寄贈

石井康治
流文ビアマグ
1995
16.5×10
吹きガラス
寄贈

石井康治
流文ビアマグ
1995
17×10
吹きガラス
寄贈

石井康治
ガラス筥－天空
1996
25.0×22.0×14.0
吹きガラス
寄贈

石井康治
樹映－冬の景
1996
26.5×33.0×16.0
吹きガラス
寄贈

石井康治
緑蔭
1996
38.5×16.0×10.0
吹きガラス
寄贈

石井康治
緑蔭
1996
23.0×36.0×12.0
吹きガラス
寄贈

石井康治
ガラス筥―緑蔭
1996
22.5×21.5×14.0
吹きガラス
寄贈

石井康治
ガラス筥－新雪
1996
26.0×21.5×14.5
吹きガラス
寄贈

石井康治
雪の舞
1996
11.0×55.0×49.0
吹きガラス
寄贈

石井康治
テーブルランプ
1996
51.0
吹きガラス
寄贈

石井康治
テーブルランプ
1996
70.0
吹きガラス
寄贈

石井康治
テーブルランプ
1996
68.0
吹きガラス
寄贈

石井康治
彩花文器－流
1996
36.5×30.0
吹きガラス
寄贈

石井康治
彩花文器
1996
36.5×27.0×15.0
吹きガラス
寄贈

石井康治
ガラス筥－花筏
1996
11.0×23.0
吹きガラス
寄贈

石井康治
ガラス筥－はなびら
1996
28.0×20.0×13.0
吹きガラス
寄贈

石井康治
ピッチャー
1996
21.0×11.5
吹きガラス
寄贈

石井康治
ピッチャー
1996
22.0 x 9.7
吹きガラス
寄贈

学芸

美術資料貸出状況

「美術資料貸出状況」における作品データは、作家名、作品の順に記した。

メメントモリと写真

貸出先
・東京都写真美術館
展示施設（会期）
・東京都写真美術館（2022/6/17−9/25）
貸出点数：10
作品名
・小島一郎「《つがる市稲垣》／地蔵さん（小島一郎写真[展示用プリント　発表作品]（198点中の1））」
・小島一郎「《つがる市木造》（小島一郎写真[展示用プリント　発表作品]（198点中の1））」
・小島一郎「《つがる市木造》（小島一郎写真[展示用プリント　発表作品]（198点中の1））」
・小島一郎「《つがる市木造》（小島一郎写真[展示用プリント　発表作品]（198点中の1））」
・小島一郎「《つがる市稲垣付近》（小島一郎写真[展示用プリント　発表作品]（198点中の1））」
・小島一郎「《つがる市木造〜出野里》（小島一郎写真[展示用プリント　発表作品]（198点中の1））」
・小島一郎「《つがる市木造柴田》（小島一郎写真[見本帳:台紙付名刺サイズプリント]（2件中の1））」
・小島一郎「《五所川原市磯松》（小島一郎写真[見本帳:台紙付名刺サイズプリント]（2件中の1））」
・小島一郎「《竜飛》（小島一郎写真[見本帳:台紙付名刺サイズプリント]（2件中の1））」
・小島一郎「《つがる市木造》（小島一郎写真[見本帳:台紙付名刺サイズプリント]（2件中の1））」

もしもし、奈良さんの展覧会はできませんか?奈良美智展 2002-2006 ドキュメント

貸出先
・弘前れんが倉庫美術館
展示施設（会期）
・弘前れんが倉庫美術館（2022/9/17−2023/3/21）
貸出点数：22
作品名
・奈良美智「回天」
・奈良美智「アラビアの船」
・奈良美智「ゼロ戦、空中戦」
・奈良美智「Train, にせものの王様」
・奈良美智「家」
・奈良美智「おむつ犬」
・奈良美智「自分はかめないよ」
・奈良美智「港のあの娘」
・奈良美智「Sleepy」
・奈良美智「Barcly's」
・奈良美智「Untitled」
・奈良美智「Untitled」
・奈良美智「Doppelt madchen」
・奈良美智「Untitled」
・奈良美智「Traveller Traveller」
・奈良美智「C'mon! C'mon!」
・奈良美智「Traveller」
・奈良美智「Untitled」
・奈良美智「Untitled」
・奈良美智「くまは夜行性」
・奈良美智「珍宝先生のお話」
・奈良美智「Seejuncfrau」

秋の展示「発見！日本の風景」

貸出先
・棟方志功記念館
展示施設（会期）
・棟方志功記念館（2022/9/21−12/18）
貸出点数：4
作品名
・棟方志功「新日本百景　水の新潟の柵」
・棟方志功「新日本百景　十和田湖の柵」
・棟方志功「新日本百景　国会議事堂の柵」
・棟方志功「新日本百景　天の橋立の柵」

風土と美術ー青森／徳島

貸出先
・徳島県立近代美術館
展示施設（会期）
・徳島県立近代美術館（2022/10/8−11/27）
貸出点数：52
作品名
・阿部合成「田園」
・阿部合成「メキシコ土偶」
・阿部合成「野仏」
・阿部合成「マリヤ」
・阿部合成「海を見る詩人」
・岡本太郎「無題」
・小野忠弘「アルプとオメガ」
・工藤甲人「夢と覚醒」
・工藤哲巳「前衛芸術家の魂」
・工藤哲巳「縄文の精子の生き残り」
・小島一郎　津軽地方西北部　※所蔵品リスト「小島一郎写真[展示用プリント　発表作品]（198点）」の一点
・小島一郎　竜飛崎付近　※所蔵品リスト「小島一郎写真[展示用プリント　発表作品]（198点）」の一点
・小島一郎　つがる市稲垣　※所蔵品リスト「小島一郎写真[展示用プリント　発表作品]（198点）」の一点
・小島一郎　ＰＴ台（ねぶた写真）146,151,152,154　※所蔵品リスト「小島一郎写真[見本帳:　台紙付名刺サイズプリント]（2件）」中の4点
・小島一郎　つがる市車力　※所蔵品リスト「小島一郎写真[展示用プリント　発表作品]（198点）」の一点
・小島一郎　つがる市木造亀ヶ岡『カメラ毎日』1963年9月号「津軽野 夏から冬まで」※所蔵品リスト「小島一郎写真[展示用プリント　発表作品]（198点）」の一点
・小島一郎　中津軽郡西目屋村付近　※所蔵品リスト「小島一郎写真[展示用プリント　発表作品]（198点）」の一点
・今純三　青森県画譜より
24「風俗図 露店、屋台店さまゞ」（第三輯）
56「郷土玩具（各地）」（第七輯）
79「青森四国八十八所霊場全景」（第十輯）
87「山村風俗（中郡西目屋村）」（第十一輯）
・今純三　創作版画小品集「年中行事ネブタ」より
1「子供のネブタいろいろ」
2「人形ネブタ運行の図」
3「ネブタ連合運行の夜景」
・今純三　創作版画小品集「初冬の街頭スケッチ」
・斎藤義重「あほんだらめ」
・斎藤真一「風・津軽じょんがら」
・佐野ぬい「ブルーノートの系譜」
・関野凖一郎「青森駅（雪）（『陸奥の四季』より）」
・関野凖一郎「棟方志功像」
・高木志朗「日本の鬼」
・鷹山宇一「ふるさと」
・鷹山宇一「叢の子馬」
・高山良策「陸稲と老農婦」
・高山良策（題不詳）
・高山良策「照葉樹林」
・田澤茂「鬼の門」
・田澤茂「地の声（野の地蔵）」
・立石大河亞「3J」
・土井典「大山デブ子人形」
・中村宏「場所の兆（2）」
・奈良美智「般若猫」
・成田亨「ウルトラマン初稿」
・成田亨「バルタン星人決定稿」
・成田亨「ベスター」
・成田亨「ゼットンイラスト」
・成田亨「シャドー星人イラスト」
・豊島弘尚「墓獅子舞（B）」
・豊島弘尚「空に播く種子（縄文）」
・橋本花「温室と水蓮」
・橋本花「津軽風景」
・棟方志功「勝鬘譜善知鳥版画曼荼羅」
・棟方志功「青森山之神図」
・村上善男「変数分離」
・村上善男「n階級分（Ⅳ）」
・村上善男「津軽、赤倉澤支脈釘打圖」
・横尾忠則「天井桟敷定期会員募集」

生誕 120 年棟方志功展 メイキング・オブ・ムナカタ

貸出先
・富山県美術館
・東京国立近代美術館
展示施設（会期）
・富山県美術館（2023/3/18−5/21）
・青森県立美術館（2023/7/29−9/24）
・東京国立近代美術館（2023/10/6−12/3）
貸出点数：26
作品名
・棟方志功「八甲田山麓図」
・棟方志功「雪国風景図」
・棟方志功「シラノ」劇版画
・棟方志功「歌舞伎版画勧進帳」
・棟方志功「桃真盛り」
・棟方志功「版画誌『版曹』第2号」
・棟方志功「十銭版画　木葉づく」
・棟方志功「市民体操の柵」
・棟方志功「空海頌（全54柵中4柵「扉の柵」「禿頭の柵」「村時雨の柵」[凶明の柵]）」
・棟方志功「勝鬘譜善知鳥版画曼荼羅」
・棟方志功「火の願ひ」
・棟方志功「挿頭花板画集」
・棟方志功「鍵板画柵」
・棟方志功「摩奈那発門多に建立すの柵」
・棟方志功「賜顔の柵」
・棟方志功「鷺暖の柵」
・棟方志功「花矢の柵」
・棟方志功「大印度の花の柵」
・棟方志功「雑華山房主人像図」
・棟方志功「コスモス自板像の柵」
・棟方志功「美魅寿玖と自画像」
・棟方志功「ロートレックと自画像」
・棟方志功「長頬の柵」
・棟方志功「杓アゴの柵」
・棟方志功「筆くわいの柵」
・棟方志功「くりぐりの柵」

春の展示「REMEMBER 〜雑華山房主人と鎌倉山〜」

貸出先
・棟方志功記念館
展示施設（会期）
・棟方志功記念館（2023/3/21−6/18）
作品名
・棟方志功「大世界の面の柵図」
・棟方志功「秋の柵」

学芸

作品保存修復

保存管理

展示・保管している美術資料の公開と保存を両立させるため、温湿度等の空調や照度の調整、粉塵・有害ガス・虫菌害等の定期的な環境調査の実施などにより展示･収蔵環境を管理している。また、日常的な点検に基づき、必要に応じて収蔵作品等のマット装や表装・額装の改善、保存箱の作成、専門家による調査・保存処置等を行った。

教育普及

普及プログラム

1　こどもアトリエ
制作キットを使用して親子などで「光る箱」を制作するワークショップを実施
日時：12 月 10 日（土）10:00 - 12:00、13:00 - 15:00
場所：青森県立美術館　ワークショップ A
テーマ：「光の箱をつくろう」

参加者数：36 人

2　鑑賞ワークショップ「じぶん鑑賞のすすめ」
※令和 4 年度は実施実績なし

教育普及

スクールプログラム

概要

未来の青森県を担う感性豊かな人材を育成するためには、多くの子どもたちに対して、優れた美術作品に出会い本物が持つ素晴らしさを実体験し、ふるさと青森の芸術文化や先人を学ぶ機会を提供することで、郷土に対する誇りが持てる鑑賞指導を行うことが極めて重要である。

このため、子どもたちが居住地域や家庭環境の違いの影響を受けずに、級友と語り合いながら発達段階に応じた深さで等しく学ぶ機会を提供する学校教育の場を活用して、児童・生徒、教育関係者を対象に、鑑賞指導、研修会等の多様な事業を行うスクールプログラムを実施する。

学校団体の来館受入れ

多くの子どもたちが優れた美術作品に接し、豊かな感性や能力を伸ばす機会として、学校団体の来館を積極的に受け入れている。

メニュー：鑑賞プログラム（自由鑑賞、誘導鑑賞）、オリジナルプログラム（創作体験、他）

月	学校団体		団体数				
	展覧会毎		小	中	高	特	計
	常設展	企画展					
4 月	107	0	0	0	1	0	1
5 月	1,320	325	2	6	1	1	10
6 月	667	147	19	1	1	1	22
7 月	192	41	2	3	1	2	8
8 月	216	117	1	1	1	1	4
9 月	1,199	425	7	9	2	2	20
10 月	0	0	0	0	0	0	0
11 月	53	0	1	0	0	0	1
12 月	108	0	1	0	2	1	4
1 月	0	0	0	0	0	0	0
2 月	79	0	1	0	1	0	2
3 月	0	0	0	0	0	0	0
合　計	3,941	1,055	34	20	10	8	72

出前講座

学校の要望等に応じ、学校での出前形式による講座（創作体験や職業講話等）を実施することがある。

実施実績 1 校

職場体験

美術館の教育普及活動、学校連携、キャリア教育推進等の観点から、各学校の要望を踏まえながら、中学校･高等学校等からの職場体験、見学等を受け入れ、美術館の公共施設・観光施設としての役割や仕事の体験を通じて学ぶ機会を提供する。

受入実績 1 校

アートカード

図工・美術の授業及びクラブ活動などの学校教育活動で気軽に使用できる鑑賞教材として、棟方志功、奈良美智、鷹山宇一、豊島弘尚等、本県ゆかりの作家の作品や三内丸山遺跡出土遺物などを 50 点にまとめた「アートカード」を制作し、平成 19 年度から県内 9 施設において学校への貸出しを行っている。

貸出実績：2 件

貸出施設一覧

施設・機関名
青森県立美術館
青森県総合学校教育センター
青森市教育研修センター
つがる市生涯学習交流センター「松の館」（つがる市教育委員会指導課）
五所川原市立図書館
弘前市教育センター
十和田市現代美術館
むつ市立図書館
八戸市美術館建設準備室

教員研修

美術館と連携した鑑賞教育について教員の理解を深めるため、当館のコレクションや鑑賞指導法（アートカードの活用、ギャラリートーク演習等）などをテーマに、県総合学校教育センター、市町村教育委員会図工及び美術等教科研究会との連携講座を実施している。

※令和 4 年度は実施実績なし

鑑賞サポーターの育成

学校団体鑑賞ツアーで来館した児童・生徒の鑑賞指導にあたる鑑賞サポーター（平成 22 年度までの「ファシリテーター」を呼称変更。）を配置・養成し、多くの学校団体の受入・指導を行っている。

令和 4 年度 3 月末現在：19 人

教育普及

サポートスタッフ

概要

青森県立美術館では、県民が美術館の活動に積極的に参加できるよう常に工夫し、「県民とともに活動する」ことを目指している。その取り組みの一つとして、美術館の様々な事業等の運営に参加、協力するボランティアを「サポートスタッフ」として募集し、各種イベント運営や、管理事務の補助、環境安全整備等、幅広いボランティア活動の展開を図っている。

募集概要

募集期間：2022 年 2 月 7 日（月）− 3 月 4 日（金）
応募要件：
・満18歳以上（2022年4月1日現在）。
・美術館活動に関心があり、積極的に学び活動する意欲のあること。
登録者数：73 人（令和 4 年度末現在）

活動内容

1　研修

※令和 4 年度はサポートスタッフ研修を全て中止し、資料送付をもって研修に代えた。

2　サポート活動

（1）舞台芸術（広報物発送作業等）
　活動日数：5 日
　参加人数：37 人
（2）運営管理（資料整理等）
　活動日数：16 日
　参加人数：165 人

パフォーミングアーツ

演劇

ドラマリーディングクラブ事業

1 ドラマリーディングクラブ

県立美術館に県民が積極的に参加できる環境を舞台芸術企画部門からアプローチする。

「青森県立美術館ドラマリーディングクラブ (2009 年設立)」は、経験や技術の枠にとらわれない幅広い年齢層の県内在住者を参加対象に、オリジナルの戯曲や詩・小説、その他の文章を用いた朗読形式による公演を実施している。

令和 2 年度に、青森県立美術館ドラマリーディングクラブ員の人数が年々減少していること等を受け、新規クラブ員の募集についての積極的な広報を行ったところ新規加入者が 16 名増え、クラブ員総数は 25 名となる。令和 4 年度は、県外転出等で 22 名。

設立：平成 21 年度

参加条件：

・青森県立美術館での稽古に参加できること
・年齢・経験不問(未成年者は保護者の同意が必要)
・年間に最低1公演には参加できる
・交通費や食費等など、活動に際して個人に係るものは全て自己負担

活動場所：青森県立美術館施設内を基本とする。

募集期間：募集定員に達するまで随時募集

定員：50名（欠員が出た場合は補充）

参加料：無料（交通費、食費等の個人に係わるものは全て自己負担となる。）

選考方法：書類選考とし、書類受理後に随時面談を行う。

稽古内容：

・青森県立美術館パフォーミングアーツ専門スタッフの指導のもと、オリジナルの戯曲や既成の詩・小説、その他の文章を使い、空間を意識しつつ朗読する。
・定期公演に向けた稽古を実施する。
・青森県立美術館企画サポート公演に向けた稽古を実施する。
・その他公演に向けた稽古を実施する。

2　定期公演

（1）定期公演概要

演目：青森県立美術館ドラマリーディングクラブ定期公演「小さなニオイ ～宮沢賢治を聞きながら～」

日時：2022 年 7 月 23 日（土）、24 日（日）
各日 14:00 開演（13:30 開場、受付開始）

途中休憩あり

会場：青森県立美術館シアター

席数：89 席（全席指定）

構成／演出／照明：清水　司

原作：宮沢賢治

作品：「注文の多い料理店　序」
「やまなし」
「どんぐりと山猫」
「注文の多い料理店」
「虔十公園林」

映像／美術：三浦　孝治

音響：寺山　紀幸

出演：7 月 23 日（土）
金　恵美子、小野寺　圭子、盛　桜華、三上　由美子、菊地　茉美、須藤　真由美、井上　美雪、石岡　博之（計 8 名）
7 月 24 日（日）
須藤　哲也、田中　昌子、福田　寿枝、菊地　泰子、今　ゆき子、寺山　映夢、永澤　恵里、上林　有紀、古川　史生（計 9 名）

観客動員数：146 名（2 公演合計）

広報活動

①宣材物：
・チラシ：（A4 版／カラー、白黒）10,000 枚
・ポスター：（B2 版／カラー）500 枚

②広報：
・6 月中旬から宣材物の配布開始。
・県内新聞において公演告知。
・青森市内小、中学校へポスター・チラシ送付。
・県内大学、高校、図書館、文化施設、商業施設等を中心に宣材物を配布し、掲示を依頼。
・パフォーミングアーツ推進実行委員会顧客へのダイレクトメールの送付。
・美術館ホームページ、Facebook、Twitter、Instagram に掲載。
・青森ケーブルテレビでの告知。

（2）チケット予約／販売

チケットサイト「カンフェティ」のＷＥＢまたは電話で予約（ＷＥＢは販売有）、コンビニエンスストア（セブンイレブン）での発券（販売）とした。

（3）新型コロナウイルス感染症対策

・チケットは、全てＷＥＢまたは電話での予約（カンフェティ）による事前購入とし、座席は全席指定、当日券の販売は無しとした。
・感染者が発生した場合など必要に応じて保健所等の公的機関へ氏名及び緊急連絡先が提供され得ること、来場を控えてもらうケース等をチラシ、ホームページで周知。
・検温の実施（37.5℃以上の場合は入場不可）。
・館内での咳エチケット、マスク着用、手洗い、手指消毒、社会的距離の確保の要請。
・空調稼働時間の延長等による換気の徹底。
・出演者、スタッフには、稽古等参加前の検温と体調不良時の不参加、稽古時のマスク着用等を徹底した。
・託児サービスは行わない。
・パンフレット、チラシ、アンケート、ブランケットは客席に予め設置し、手渡ししない。
・チケットのもぎりは、来場者自身が行う。
・出演者への面会、お花、贈り物はご遠慮いただく。
・座席はステージに近い前１列は空席とし、前後左右も1席ずつ空けた配置とする。
・出演者控室では、1人1テーブルとした。

（4）稽古

日時：2022 年 6 月18日（土）、19日（日）、25日（土）、
26日（日）、7月2日（土）、3日（日）、9日（土）、
10日（日）、17日（日）、18日（月祝）、22日（金）
合計11回
※時間 13:00 ～、22 日（金）は 19：00 ～

場所：青森県立美術館シアター

参加人数：118名（累計）



定期公演の様子



定期公演チラシ（オモテ）



定期公演チラシ（ウラ）

パフォーミングアーツ

音楽

アレコホール活用によるファン獲得事業

1　事業概要

シャガール作バレエ「アレコ」舞台背景画を展示する青森県立美術館アレコホールでは、開館以来プロによる演劇や音楽、ダンス公演が開催され、単なる展示室ではなく総合芸術の場として機能してきた。

本事業では、コロナ禍により県民が舞台芸術を鑑賞・発表する場が極端に減っていることから、アレコホールにおいてプロの演奏家による特別演奏会を実施し、プログラムの一つとしてプロと県内中高生が一緒に演奏する機会を設けることで、県民の関心を高め美術館への誘客及びアレコホールの PR を促進した。

また、県民によるミュージアムコンサートを実施し、県民の表現の場を確保するとともに、県内音楽人材の掘り起こしを進めることで、新たなファン層を取り込み、地域に親しまれる美術館として認知度の向上や利用者の拡大を目指した。

2　特別演奏会

（1）出演中高生募集

募集期間：2022 年 5 月 31 日 (火) ～ 6 月 30 日 (木)

募集人数：5 人

演 奏 曲：ラヴェル作曲「ボレロ」

応募条件：

・青森県内の中学校又は高等学校に在籍すること。

・以下のピアノ曲を演奏できる程度の演奏レベルを有すること。

例）・バッハ／シンフォニア BWV787-801

・ベートーヴェン／
ソナタ第 8 番「悲愴」op.13 第 3 楽章

・ショパン／幻想即興曲

・青森県立美術館において実施する合同稽古 2 日（9 月 16 日（金）・17 日（土）18:00 ～ 19:30）、及び公演 2 日（9 月 18 日（日）・19 日（月・祝）18:00 開演）に参加できること。

・出演に関して保護者の同意があること。

選考方法：申込書及び演奏動画

選考委員：出演ピアニスト 5 人

宣材物作成枚数：チラシ（A4 版／カラー、白黒）5,000 枚

広　　報：

・青森県内の文化施設、商業施設、音楽教室、市町村教育委員会、中学校、高等学校等に宣材物を配布。

・青森県立美術館のホームページ、Twitter、Instagram、Facebook等での公演情報の発信。

応募人数：13 人（内選定 5 人）

（2）公演概要

公 演 名：アレコホール特別演奏会
5 台ピアノコンサート「10hands Vol.2」

日　　時：2022 年 9 月 18 日（日）・19 日（月・祝）
開場 18:00　開演 18:30

会　　場：青森県立美術館アレコホール

席　　数：132 席（全席指定）

ライブ配信：2022 年 9 月 19 日（月・祝）18:30
（9 月 26 日 23:59 までアーカイブ配信）

料　　金：

・来場チケット
一般3,000円、高校生以下2,000円
※事前購入のみ、別途1枚につき手数料330円。

・ライブ配信チケット
視聴券1,500円　※別途手数料198円。

主　　催：青森県立美術館パフォーミングアーツ推進実行委員会、青森県立美術館

協　　賛：協同組合青森総合卸センター

助　　成：一般財団法人地域創造

（3）広報活動

宣材物作成枚数：

・チラシ（A4版／カラー、白黒）40,000枚

・ポスター（B2版／カラー）600枚

広　　報：

・PA顧客へダイレクトメールを送付。

・青森県内の文化施設、商業施設、音楽教室、大学、高等学校、中学校等に宣材物を配布。

・新聞折込による宣材物の配布。

・青森県立美術館のホームページ、Twitter、Instagram、Facebook等での公演情報の発信。

・青森県の広報枠を使用したラジオ番組や新聞広告での公演情報の発信。

・市町村広報誌、フリーペーパー「カンフェティ」、月刊誌「音楽の友」等へ広告を掲載。

（4）チケット予約／販売

・来場チケット
チケットサイト「カンフェティ」のWEBまたは電話で予約（WEBは販売有）、コンビニエンスストア（セブンイレブン）での発券（販売）とした。

・ライブ配信チケット
チケットサイト「カンフェティ」のWEB販売とした。

(5) 公演詳細
出 演 者：
・高　実希子（ピアノ）
・村田　恵理（ピアノ）
・佐野　隆哉（ピアノ）
・佐藤　慎悟（ピアノ）
・崎谷　明弘（ピアノ）
・『ボレロ』演奏参加県内中高生
松山　結宇（南部町立名川中学校1年）
佐々木　倫（弘前市立第一中学校1年）
葛西　結衣（県立青森高等学校2年）
船橋　温揮（平内町立東平内中学校3年）
山崎　悠陽（県立田名部高等学校1年）

演奏曲目：
・W.A.モーツァルト（G.アンダーソン編曲）／トルコ行進曲
【5台10手】（高、村田、佐野、佐藤、崎谷）
・E.グリーグ（J.シュムウェイ編曲）／「ペール・ギュント組曲」より朝　山の魔王の宮殿にて
【5台10手】（高、村田、佐野、佐藤、崎谷）
・M.ラヴェル（西澤　ななえ編曲）／ボレロ～5台20手編～
【5台20手】（松山・高、佐々木・村田、葛西・佐野、船橋・佐藤、山崎・崎谷）

休憩（20分）

・J.S.バッハ（N.J.タン編曲）／主よ、人の望みの喜びよ
【5台10手】（高、村田、佐野、佐藤、崎谷）
・M.ファリャ（M.ブラッジョッティ編曲）／バレエ音楽「恋は魔術師」より火祭りの踊り
【2台4手】（佐野、崎谷）
・S.ジョプリン（G.アンダーソン編曲）／メイプルリーフラグ・ファンタジー
【3台6手】（高、村田、佐藤）
・A.ピアソラ（山本　京子編曲）／リベルタンゴ
【4台8手】（崎谷、佐藤、佐野、村田）
・G.ホルスト（G.アンダーソン編曲）／組曲『惑星』より
Ⅰ.火星、戦いをもたらす者
Ⅱ.海王星、神秘主義者
Ⅲ.木星、快楽をもたらす者
【5台10手】（高、村田、佐野、佐藤、崎谷）

【アンコール】
・E.グリーグ（榊原　旬編曲）／山の魔王の宮殿にて
【1台10手】（高、村田、佐野、佐藤、崎谷）
・W.A.モーツァルト（G.アンダーソン編曲）／トルコ行進曲～ラグタイムver～
【5台10手】（高、村田、佐野、佐藤、崎谷）
観客動員：257人（97%）
ライブ配信：視聴券販売数77枚
合計視聴数279回

(6) 演奏家プロフィール
高　実希子（ピアノ）：
北海道函館市出身。桐朋女子高等学校音楽科、桐朋学園大学首席。パリ国立高等音楽院卒業。ショパン国際ピアノコンクールin ASIA大学生部門最高位他、国内外での受賞歴多数。ソリスト、室内楽奏者としてフランス・ベルギー・イタリア・ロシア等海外から招聘他、国内外の著名演奏家と共演を重ねる。令和2年度函館市文化団体協議会青麒章受章。

村田　恵理（ピアノ）：
東京藝術大学音楽学部器楽科ピアノ専攻卒業。英国王立音楽院大学院課程ディプロマコース卒業。第26回イタリア・セニガリア国際ピアノコンクール第4位。第8回東京音楽コンクールピアノ部門入選。現在は演奏活動を行うと共に古楽器にも目を向け、フォルテピアノ・チェンバロを研鑽中。第33回国際古楽コンクール<山梨>鍵盤楽器部門入選。ピアノ個人教室「エリピアノアカデミー」主宰。

佐野　隆哉（ピアノ）：
東京藝術大学大学院修士課程、パリ国立高等音楽院修了。日本音楽コンクール第2位、ショパン国際ディプロマなど、国内外での受賞歴多数。国内はもとより、フランス、ヨーロッパ各地でソロ・室内楽奏者として活躍中。演奏活動の傍ら、国立音楽大学、都立総合芸術高校で後進の指導にあたっている。ダイナミックにして繊細。色彩感と叙情性に満ちた実力派ピアニスト。

佐藤　慎悟（ピアノ）：
八戸市生まれ。昭和音楽大学ピアノ演奏家コース首席卒業。国立ローマ・サンタ・チェチリア音楽院アカデミアに入学後、数々の国際コンクールで第1位受賞。インターナショナル・アーツ・アカデミーピアノ演奏家コース満場一致で首席修了。帰国後は自宅でピアノ教室を主宰。ソロ活動や合唱団、室内楽、声楽や器楽の各ソリストとの共演にも力を入れ活動中。

崎谷　明弘（ピアノ）：
88年生、神戸市出身。パリ国立高等音楽院、東京藝術大学大学院修士課程を共に首席修了。同大院博士後期課程にて博士号取得。主な入賞歴にリヨン国際第1位、ブゾーニ国際第3位、ハエン賞国際第1位など。今春、神戸女学院大学専任講師に就任。大阪教育大学・京都市立堀川音楽高校各非常勤講師を兼務。

(7) 新型コロナウイルス感染症対策
・来場者の氏名、連絡先把握のため、チケット販売をインターネット（カンフェティ）で行い、座席は全席指定制、当日券の販売は無し。

・感染者が発生した場合など必要に応じて保健所等の公的機関へ氏名及び緊急連絡先が提供され得ること、来場を控えてもらうケース等をチラシ、ホームページで周知。
・検温の実施（37.5℃以上の場合は入場不可）。
・館内での咳エチケット、マスク着用、手洗い、手指消毒、社会的距離の確保の要請。
・空調稼働による換気の徹底。
・休憩時の飲料販売は行わない。
・パンフレット、チラシ、アンケートは、客席に予め設置し、手渡ししない。
・チケットのもぎりは、来場者自身が行う。
・出演者への面会、お花、贈り物はご遠慮いただく。
・物販、出演者による見送りは行わない。

3　県民によるミュージアムコンサート



5台ピアノチラシ（オモテ）



5台ピアノチラシ（ウラ）



出演中高生募集チラシ（オモテ）


2022年 青森県立美術館アレコホール特別演奏会

5台ピアノコンサート　中高生ピアノ演奏者募集

【応募内容】
アレコホール特別演奏会5台ピアノコンサートのプログラムの1つとして、ピアニスト5名と県内中高生5名による5台20手でラヴェル作曲「ボレロ」をピアノ演奏します。このプログラムでピアニストと一緒に演奏する中高生を募集します。

【申込方法】
申込書に必要事項を記入し、演奏動画を添付のうえ下記申込先へ郵送またはe-mailにて申込みください。全ての申込者に対して、受理した旨の連絡を行いますが、連絡のない場合はお問い合わせください。

【選考方法】
申込書及び演奏動画により選考します。
※演奏する曲は5～10分程度の自由とします。（複数曲可、クラシック曲に限る。）
※応募者の構成、及び子供の年齢に制限は特に設けておりません。
※通常完全暗で設置し、撮影が入らないように留意してください。

【選考委員】
高実希子氏、村田恵理氏、佐野隆哉氏、佐藤慎悟氏、崎谷明弘氏（出演ピアニスト）

【結果通知】
選考結果は、2022年7月15日（金）までに申込者全員に通知します。
その際、選考されたかたには、コンサートでピアノ演奏していただくパートをお知らせし、楽譜をお送りします。

【そ の 他】
出演する中高校生及び保護者1名には、合同稽古及び公演当日に伴う交通費及び宿泊費を県の規定に基づき支給します。出演料は支給しません。
※感染状況により、本事業を変更または中止する場合があります。その場合は、ホームページ等で随時お知らせします。

《問合せ・申込先》
青森県立美術館パフォーミングアーツ推進実行委員会事務局
〒038-0021　青森市安田字近野185
TEL：017-783-5243（直通、平日9:00～17:00）　E-mail：aleko@asmori-museum.jp

※全ての項目を記入してください。　2022年　月　日記入

アレコホール特別演奏会5台ピアノコンサート　出演申込書

フリガナ	生年月日	学校名・学年
お名前	（　歳）	
住所	TEL（携帯可）	メールアドレス
〒		
これまでのピアノ歴（発表会出場、コンクール結果含む）		
応募動機		
自己 PR		
演奏動画曲名	保護者署名欄	
	出演を承諾いたします。	

ご提出いただいた応募書類等は本事業のみに使用し、返却はしません。
提出期限 6月30日（木）必着
出演中高生募集チラシ（ウラ）


5台ピアノの様子1


5台ピアノの様子2

（1）学生ピアノ演奏

ア　募集概要

夏期実施分については、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策による休館のため昨年度演奏できなかった学生が演奏することとしたため、公募しなかった。

冬期実施分については、公募により演奏者を選定した。

日　　時：2022年12月10日（土）、12月24日（土）
　　2023年1月14日（土）、1月28日（土）
　　2月11日（土・祝）、2月25日（土）
　　各日17:15～17:45

（ナイトミュージアムのプログラムの1つとして実施。）

会　　場：青森県立美術館アレコホール

演奏時間：1人10分以内

定　　員：各日、最大3人（3人×6日間＝最大18人）

参 加 料：無料

募集期間：2022年10月12日（水）～11月11日（金）

応募資格：以下の全てを満たす者を対象とする。

・ソナチネ以上の教本を勉強中であること。
・青森県内の小学校、中学校、高等学校、大学等の学生であること。

選考方法：書類審査

応募者数：14名　選定者数：14名

主　　催：青森県立美術館パフォーミングアーツ推進実行委員会、青森県立美術館

助　　成：一般財団法人地域創造

イ　広報活動

宣材物作成枚数：チラシ（A4版／カラー、白黒）

5,000枚

広　　報：

・青森県内の高校・大学、文化施設、教育機関、道の駅、音楽教室等を中心に宣材物を配布。
・青森県立美術館のホームページ、Facebook等、ウェブ上での公演情報の発信。

ウ　実施概要

令和3年度選定者　2022年　8月27日（土）3名
　　〃　　9月24日（土）3名
令和4年度選定者　2022年12月10日（土）2名
　　〃　12月24日（土）3名
　　2023年　1月14日（土）3名
　　〃　　1月28日（土）3名
　　〃　　2月11日（土・祝）3名



学生募集チラシ（オモテ）


青森県立美術館の中心にある吹抜け空間アレコホール。ここには20世紀を代表する画家、マルク・シャガールによるバレエ「アレコ」の舞台背景画が展示されています。「色彩の魔術師」と呼ばれるシャガールの本領が存分に発揮された舞台美術の傑作といわれています。
現在、アメリカのフィラデルフィア美術館収蔵の第3幕《ある夏の午後の変奏》を期間限定で借用しており、当館で全4作品を一挙に鑑賞することができます。「アレコ」舞台背景画全4作品が揃った貴重な機会に、巨大空間アレコホールで特別な経験をしてみませんか。

【応募方法】
出演申込書の項目を全て記入し、演奏動画（3分程度）を添付のうえ、郵送、E-mail、FAXまたはLINEにてお申し込みください。

【選者・出演決定】
応募者多数の場合は、出演申込書及び演奏動画を参考として出演者を決定し、11月下旬に事務局より通知します。

【その他】
①小・中学生の場合は必ず保護者が同行してください。
②アレコホールでの演奏中の撮影は可能ですが、撮影した画像や動画の使用は個人使用に限ります。
③感染状況により、本事業を変更または中止する場合があります。その場合は、ホームページ等で随時お知らせします。

【問合せ・申込先】
青森県立美術館パフォーミングアーツ推進実行委員会事務局
〒038-0021　青森市安田字近野185
TEL　017-783-5243（直通、平日9:00～17:00）
FAX　017-783-5244
E-mail　aleko@aomori-museum.jp

青森県立美術館 LINE
青森県立美術館
パフォーミングアーツ
LINE official Account

【新型コロナウイルス感染症拡大防止に係るお願い】
・以下の場合は、参加をご遠慮いただきますので、ご了承ください。
※37.5℃以上の発熱がある場合。
※咳、咽頭痛、全身倦怠感、鼻炎、味覚障害などの症状がある場合。
・感染者又は感染が疑われる方が発生した場合は、保健所等との機関へ氏名・連絡先が提供される可能性があります。ご了承ください。
・社会的距離の確保、マスク着用、手指消毒等にご協力ください。

※全ての項目を記入してください。

２０２２年度アレコホールミュージアムコンサート出演申込書

氏名／ふりがな	生年月日	年齢	学校・学年
		歳	
住所	電話番号		メールアドレス
〒			
希望出演日（第三希望まで）		ピアノ学習歴	保護者署名欄
第一希望　第二希望　第三希望			年（未就園者および成年の場合記入）
応募動機・ピアノを習うことになったきっかけ・今後の目標・自己PRなど			
当日演奏予定曲／全約　分			

○本申込書と演奏動画をお送りください。
○申込に際して提供いただく個人情報は、アレコホールミュージアムコンサートに関する業務のみに使用します。

学生募集チラシ（ウラ）



学生ピアノ演奏の様子

（2）一般演奏

ア　募集概要

昨年度公募した際に38組の応募があったが、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策による休館のため4組のみの演奏となったため、今年度は新規に公募せず、昨年度応募した組の中から選定した。



一般演奏の様子１

（参考：昨年度募集概要）

日　　時：2021年8月20日（金）、8月21日（土）、9月17日（金）、9月18日(土)、9月19日（日）、11月26日（金）、11月27日（土）、12月18日（土）
各日18:50～19:20

（ナイトミュージアムのプログラムの1つとして実施。）

会場：青森県立美術館アレコホール

募集人数：各日1組（全8組）
※個人または5人以内のグループ

演奏時間：1組30分以内

経　　費：出演料、旅費、食費等の支給はしない

募集期間：2021年6月9日（水）～7月9日（金）

応募条件：

以下の全てを満たす者を対象とする。

・青森県内に居住している者、または青森県内の事業所に所属する者
・これまで公演実績があること
・30分程度の演奏を行うことができること
・アレコホールの雰囲気を損なうような大音量となる演奏をしないこと
・政治的な目的を有しないこと
・自己の営業宣伝を目的としないこと
・床や壁等の設備の破損・損壊や美術館の運営に支障をきたすおそれのあることをしないこと

選考方法：書類審査

主　　催：青森県立美術館



一般演奏の様子２

イ　実施概要

2022年7月9日（土）	津軽三味線（1名） ピアノ（1名）
〃　8月27日（土）	ハンドベル（6名）
〃　9月24日（土）	ピアノ（1名）
〃　12月24日（土）	クラリネット等（3名）
2023年1月14日（土）	フルート等（2名）
〃　1月28日（土）	サクソフォン（4名）
〃　2月11日（土・祝）	トランペット等（2名）
〃　2月25日（土）	フルート（4名） ソプラノ等（2名）

音楽事業

1　事業概要

当館では開館以来、舞台芸術事業のひとつとしてアレコホールでの定期演奏会を開催しており、毎年好評をいただいているところである。

令和 4 年度はハープ奏者とソプラノ歌手による公演を開催し、アレコホールに初めて響き渡ったハープと歌声の色彩豊かな音色によって、きらきらとした幻想の世界が広がった。

2　定期演奏会

（1）公演概要

公演名：アレコホール定期演奏会 2023
　　「冬の夜を彩るハープとソプラノの調べ」
日時：2023 年 2 月 19 日 (日) 開場 17:30 開演 18:00
会場：青森県立美術館アレコホール
席数：150 席（全席指定）
入場料金：一般 2,000 円、高校生以下 1,000 円
　　※事前購入のみ、別途 1 枚につき手数料 330 円
主催：青森県立美術館パフォーミングアーツ推進実行委員会、青森県立美術館

（2）広報活動

宣材物作成枚数：
・チラシ（A4版／カラー、白黒）15,000枚
・ポスター（B2版／カラー）300枚

広報：
・PA顧客へダイレクトメールを送付。
・青森県内の文化施設、商業施設、音楽教室、大学、高等学校等に宣材物を配布。
・新聞折込による宣材物の配布。
・青森県立美術館のホームページ、Twitter、Instagram、Facebook等での公演情報の発信。
・青森県の広報枠を使用したラジオ番組や新聞広告での公演情報の発信。

（3）チケット予約／販売

チケットサイト「カンフェティ」の WEB または電話で予約（WEB は販売有）、コンビニエンスストア（セブンイレブン）での発券（販売）とした。

（4）公演詳細

出演者：高野　麗音（ハープ）
　　熊田　祥子（ソプラノ）

プロデューサー：高　実希子

演奏曲目：
・ドビュッシー／星の夜（高野、熊田）
・ドビュッシー／美しき夕べ（高野、熊田）
・ドビュッシー／月の光（高野ハープソロ）
・フォーレ／夢のあとに（高野、熊田）
・フォーレ／秘密（高野、熊田）
・フォーレ／夜明け（高野、熊田）
・フォーレ／即興曲（高野ハープソロ）
・サルツェード／夜の歌（高野ハープソロ）
・シャルパンティエ／
　オペラ「ルイーズ」よりルイーズのアリア
　‘その日から’（高野、熊田）

休憩（20分）

・ヘンデル／ハープ協奏曲（高野ハープソロ）
・アーン／私の詩に翼があったなら（高野、熊田）
・アーン／愛されるひと（高野、熊田）
・アーン／魅惑の時（高野、熊田）
・アーン／クロリスに（高野、熊田）
・ファリャ／スペイン舞曲第一番（高野ハープソロ）
・シュトラウス／あした！（高野、熊田）
・シュトラウス／万霊節（高野、熊田）
・コルンゴルト／
　オペラ「死の都」よりマリエッタのアリア
　‘私に残された幸せは’（高野、熊田）

【アンコール】
・山田耕筰／この道（高野、熊田）

観客動員：142人（95%）

（5）演奏家プロフィール

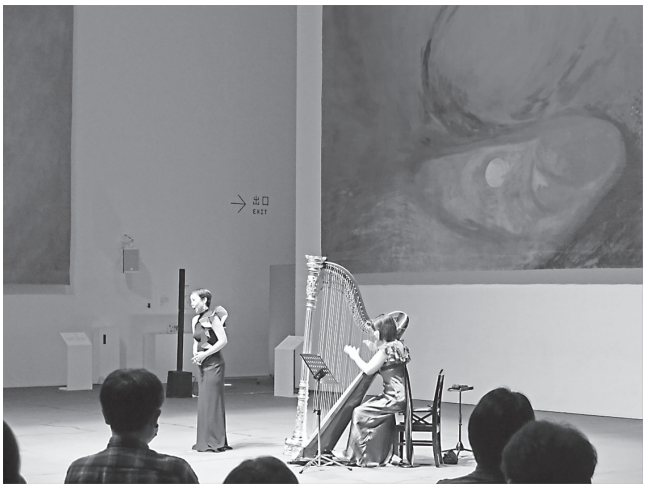
高野　麗音（ハープ）：
東京藝術大学附属高校、東京藝術大学を経てパリ国立高等音楽院に審査員満場一致で合格、2010 年同大学院修士課程を首席で修了。2008 年パリ国際ハープコンクール最高位。景山真菜、木村茉莉、渡邊萬里、イザベル・モレッティの各氏に師事。広島交響楽団、群馬交響楽団、札幌交響楽団と共演。東京藝術大学非常勤講師。

熊田　祥子（ソプラノ）：
石川県立小松高校、東京学芸大学卒業、同大学院修了。京都フランス音楽アカデミーにてスカラシップ賞、フジテレビ KBK 賞を受賞、パリ・エコールノルマル音楽院に奨学生として留学。マルセイユ・フランス国立オペラ研修所修了。2011 年ジュネーブ国際音楽コンクール声楽部門本選出場。2013 年パリ・ベラン国際音楽コンクール声楽部門第 2 位。東京二期会オペラ研修所フランス語原語講師。

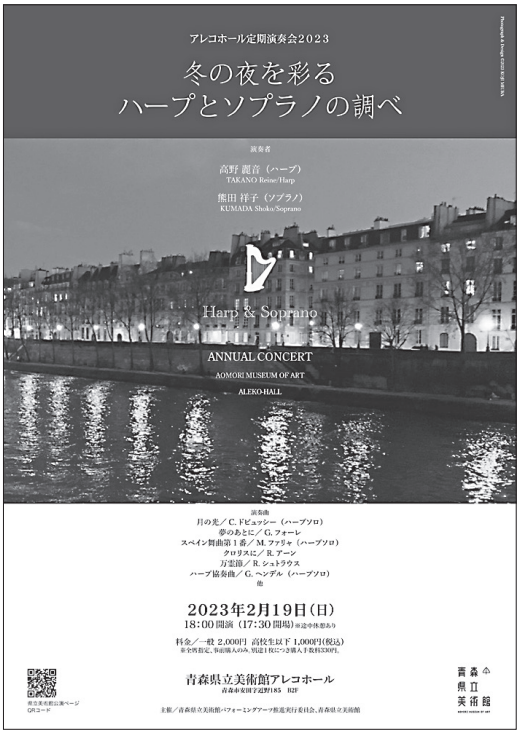
（6）新型コロナウイルス感染症対策

・来場者の氏名、連絡先把握のため、チケット販売をインターネット（カンフェティ）で行い、座席は全席指定制、当日券の販売は無し。

・感染者が発生した場合など必要に応じて保健所等の公的機関へ氏名及び緊急連絡先が提供され得ること、来場を控えてもらうケース等をチラシ、ホームページで周知。
・検温の実施(平熱より1度以上高い発熱は入場不可)
・館内での咳エチケット、マスク着用、手洗い、手指消毒、社会的距離の確保の要請。
・空調稼働による換気の徹底。
・休憩時の飲料販売は行わない。
・パンフレット、チラシ、アンケートは、客席に予め設置し、手渡ししない。
・チケットのもぎりは、来場者自身が行う。
・出演者への面会、お花、贈り物はご遠慮いただく。
・物販、出演者による見送りは行わない。



定期演奏会の様子



定期演奏会チラシ（オモテ）


アレコホール定期演奏会2023
冬の夜を彩るハープとソプラノの調べ
2023年2月19日（日） 18:00 開演（17:30 開場）※途中休憩あり
青森県立美術館アレコホール
青森市安田字近野185 B2F
演奏者

高野 麗音 TAKANO Reine （ハープ）
東京藝術大学附属高校、東京藝術大学を経てパリ国立高等音楽院に審査員満場一致で合格、2010年同大学院修士課程を首席で修了。2008年ハ-ナ国際ハープコンクール最高位、第1位なし、木村茉莉、渡邉真琴、イザベル・モレッティの各氏に師事。広島交響楽団、群馬交響楽団、札幌交響楽団と共演。東京藝術大学非常勤講師。

熊田 祥子 KUMADA Shoko （ソプラノ）
石川県立小松高校、東京学芸大学卒業、同大学院修了。京都フランス音楽アカデミーにてスカラシップ賞、ジリアレビKBK賞を受賞。パリ・エコール・ノルマル音楽院に奨学生として留学。マルセイユ・フランス国立オペラ研修所修了。2011年ジュネーブ国際音楽コンクール声楽部門本選出場。2013年パリ・ベラシ国際音楽コンクール声楽門第2位。東京二期会オペラ研修所フランス語原語講師。
演奏曲
月の光／C. ドビュッシー（ハープソロ）
夢のあとに／G. フォーレ
スペイン舞曲第１番／M. ファリャ（ハープソロ）
クロリスに／R. アーン
万霊節／R. シュトラウス
ハープ協奏曲／G. ヘンデル（ハープソロ）
他
■チケット（カンフェティ）
【料金】一般 2,000 円／高校生以下 1,000 円（税込）
※全席指定、事前購入のみ。別途1枚につき購入手数料 330 円。（手数料込 一般2,330 円／高校生以下 1,330 円）
《予約・販売開始》2023年１月10日(火)10:00
【WEB 予約】http://confetti-web.com/aomoriteiki2023
カンフェティ QR コード
WEB 予約は、公演当日の16:00までの受け付けとなります。
会員登録（無料）が必要です。ご希望の座席がお選びいただけます。
お支払いは、クレジットカードまたはセブン-イレブン店頭払い（払込期限1週間）となります。
チケットはセブン-イレブン店頭レジにてお受け取りください。（発券期限公演当日17:00）
【電話予約】0120-240-540（受付時間・平日 10:00 ～ 18:00）
電話予約は、2月17日(金)16:00までの受け付けとなります。
通話料無料。オペレーターが対応いたします。座席はご自身でお選びいただけません。何卒ご了承ください。
お支払いは、セブン-イレブン店頭払い（払込期限1週間）のみとなります。
チケットはセブン-イレブン店頭レジにてお受け取りください。（発券期限公演当日17:00）
【ご注意】
・ご自身の都合によるお申込後の変更・取消はできません。ご了承ください。
・公演中の撮影及び録音は禁止させていただきます。
・車椅子で観覧される方は、ご予約の上、下記事務局へお知らせください。
・未就学児のご観覧はご遠慮ください。尚、無料託児サービス（定員4名）がございますので、ご希望の方は2月10日（金）までに事務局へご連絡ください。
■新型コロナウイルス感染症感染拡大防止にご理解とご協力をお願いいたします。
感染拡大防止策の詳細は、表面 QR コードより公演ページをご確認ください。なお、感染状況により内容を変更または中止する場合がございますので、当日来場前に必ず公演ページをご確認ください。中止の場合のみ料金を払い戻しいたします。
■アクセス
・青森市営バス：青森駅前６番バス停から三内丸山遺跡行き「県立美術館前」下車（所要時間約 20 分）
・ルートバスねぶた号：新青森駅東口バス停から「県立美術館前」下車（所要時間約 10 分）
・JR 新青森駅から車で約 10 分、JR 青森駅から車で約 20 分、青森空港から車で約 20 分

【公演に関するお問い合わせ】
青森県立美術館パフォーミングアーツ推進実行委員会 事務局
TEL：017-783-5243（受付時間・平日 9：00－17：00）
FAX：017-783-5244 E-Mail：teien@aomori-museum.jp
【チケットに関するお問い合わせ】
カンフェティ
TEL：0120-240-540（受付時間・平日10：00－18：00）
※WEB予約に関する操作方法等のお問い合わせはこちらにお願いします。
定期演奏会チラシ（ウラ）

パフォーミングアーツ

映画

映画事業

1 事業概要

当館ではこれまで、美術館シアターにおいて映画監督や俳優等に焦点をあてた特集を組み、映画上映会を開催してきた。
令和 4 年度は、当館で開催する巡回企画展「ミナ ペルホネン／皆川明　つづく」(2022年7月16日(土)－2022年10月2日(日))の開催を記念し、クラフトアートや服飾に焦点をあて「布と糸がつむぐもの」と題した 4 年ぶりとなる自主企画の上映会とともに、文化庁及び国立映画アーカイブが実施する「優秀映画鑑賞推進事業」の制度を活用した上映会「熱狂の時代劇～ 35 ミリフィルムで蘇る時代劇スターの競演～」を開催した。

2「布と糸がつむぐもの」

(1) 公演概要

日時：2022 年 9 月 3 日（土）、4 日（日）
　　10:30 開演（10:00 開場、受付開始）
会場：青森県立美術館シアター
席数：70 席（全席指定）
料金：一日券 800 円
広報活動
①宣材物：
・チラシ：（A4版／カラー、白黒）12,000枚
・ポスター：（B2版／カラー）300枚
②広報：
・7月下旬から宣材物の配布開始。
・県内新聞、ラジオにおいて公演告知。
・県内大学、高校、図書館、文化施設、商業施設等を中心に宣材物を配布し、掲示を依頼。
・パフォーミングアーツ推進実行委員会顧客へのダイレクトメールの送付。
・美術館ホームページ、Facebook、Twitter、Instagramに掲載。
・青森ケーブルテレビでの告知。
・青森市内一部地域でのチラシ新聞折込。
・県内一部コンビニへのポスター設置。

(2) 公演詳細

上映作品：「YARN 人生を彩る糸」（2016 年、ウナ・ローレンツェン監督、76 分、4 組のアーティストを描く北欧アイスランド発クラフト・アート・ドキュメンタリー）
「繕い裁つ人」（2015年、三島有紀子監督、104分、人生を変える一着を仕立てる町の仕立屋と常連客たちとの織りなす切ない物語を描いた池辺葵の同名コミックの実写化）
上映スケジュール（両日とも）
10:30上映　「YARN 人生を彩る糸」
13:00上映　「繕い裁つ人」

観客動員数：242名(全 4 合計)

【内訳】　（カッコ内は左数字に含まれる招待者数）

作品名	3日	4日	計
YARN 人生を彩る糸	58（1）	60（3）	118（4）
繕い裁つ人	60（3）	64（3）	124（6）
計	118（4）	124（6）	242（10）



映画上映会チラシ（オモテ）



映画上映会チラシ（ウラ）

3「熱狂の時代劇～35ミリフィルムで蘇る時代劇スターの競演～」

（1）公演概要

日時：2022年12月3日（土）、4日（日）
　　10:00開演（9:30開場、受付開始）

会場：青森県立美術館シアター

主催：青森県立美術館パフォーミングアーツ推進実行委員会、青森県立美術館、国立映画アーカイブ

特別協力：文化庁、（一社）日本映画製作者連盟、全国興行生活衛生同業組合連合会

席数：89席（全席指定）

料金：一日券800円

広報活動

③宣材物：

・チラシ：（A4版／カラー、白黒）13,000枚
・ポスター：（B2版／カラー）300枚

④広報：

・10月下旬から宣材物の配布開始。
・県内新聞、ラジオにおいて公演告知。
・県内大学、高校、図書館、文化施設、商業施設等を中心に宣材物を配布し、掲示を依頼。
・パフォーミングアーツ推進実行委員会顧客へのダイレクトメールの送付。
・美術館ホームページ、Facebook、Twitter、Instagramに掲載。
・青森ケーブルテレビでの告知。
・青森市内一部地域でのチラシ新聞折込。
・県内一部コンビニへのチラシ設置。

（2）公演詳細

上映作品：「銭形平次捕物控　からくり屋敷」（1953年、森一生監督、86分、長谷川一夫主演）
「大江戸五人男」（1951年、伊藤大輔監督、132分、阪東妻三郎主演）
「旗本退屈男」（1958年、松田定次監督、108分、市川右太衛門主演）
「赤穂浪士」（1961年、松田定次監督、151分、片岡千恵蔵主演）

上映スケジュール

12/3 10:00上映「銭形平次捕物控　からくり屋敷」
　　13:00上映「大江戸五人男」
12/4 10:00上映「旗本退屈男」
　　13:00上映「赤穂浪士」

観客動員数：139名（全4合計）

【内訳】（カッコ内は左数字に含まれる招待者数）

作品名	動員数
銭形平次捕物控　からくり屋敷	24（0）
大江戸五人男	31（1）
旗本退屈男	41（3）
赤穂浪士	43（1）
計	139（5）



映画上映会チラシ（オモテ）



映画上映会チラシ（ウラ）

4 チケット予約／販売

チケットサイト「カンフェティ」のＷＥＢまたは電話で予約（ＷＥＢは販売有）、コンビニエンスストア（セブンイレブン）での発券（販売）とした。

5 新型コロナウイルス感染症対策

・チケットは全てインターネット（カンフェティ）で行い、座席は全席指定制、当日券の販売は無しとした。
・感染者が発生した場合など必要に応じて保健所等の公的機関へ氏名・緊急連絡先が提供され得ること、来場を控えてもらうケース等をチラシ、ホームページで周知。
・検温の実施（37.5℃以上の場合は入場不可）。
・館内での咳エチケット、マスク着用、手洗い、手指消毒、社会的距離の確保の要請。
・空調稼働時間の延長等による換気の徹底。
・託児サービスは行わない。
・パンフレット、チラシ、アンケートは、客席に予め設置し、手渡ししない。
・チケットのもぎりは、会場入口で来場者自身が行う。

サービス等

貸館

使用施設について

（1）使用目的

展覧会や作品の創作活動、映像、演劇及び音楽などの芸術活動の発表、練習の場として本県の芸術振興に資する使用であること。

（2）使用料

①展示施設を使用する場合

■コミュニティギャラリー

室名（面積）	使用料（入場料等を徴収しない場合）		
	9:30～12:00	13:00～17:00	左記以外の時間帯
A（148.76㎡）	2,200円	3,520円	1時間　880円
B（60.47㎡）	900円	1,440円	1時間　360円
C（131.30㎡）	1,950円	3,120円	1時間　780円

＊1　入場料等を徴収する場合（使用期間内に有料配信する場合を含む）は、上記使用料の 2 倍とします。
＊2　コミュニティギャラリーの 1 室が使用されている場合、他のコミュニティギャラリーは使用できません。

■企画展示室

室名（面積）	使用料（入場料等を徴収しない場合）		
	9:30～12:00	13:00～17:00	左記以外の時間帯
A（182.70㎡）	2,580円	4,120円	1時間　1,030円
B（140.39㎡）	2,080円	3,320円	1時間　830円
C（389.51㎡）	5,750円	9,200円	1時間　2,300円
D（228.06㎡）	3,380円	5,400円	1時間　1,350円
E（105.91㎡）	1,550円	2,480円	1時間　620円
映像室（70.38㎡）	1,030円	1,640円	1時間　410円

＊1　入場料等を徴収する場合（使用期間内に有料配信する場合を含む）は、上記使用料の 2 倍とします。
＊2　企画展示室の使用については、原則として県立美術館との共催事業に限ります。

②シアター等を使用する場合

室名（面積）	使用料（入場料等を徴収しない場合）
シアター（220席）（348.20㎡）	1時間　2,500円
映写室（36.36㎡）	1時間　260円
アナウンスブース（6.35㎡）	1時間　50円
ワークショップA（124.38㎡）	1時間　930円
ワークショップB（185.28㎡）	1時間　1,350円
暗室（22.45㎡）	1時間　160円
スタジオ（100.98㎡）	1時間　750円
映像編集室（24.77㎡）	1時間　180円
スタジオ映写室（28.88㎡）	1時間　210円

＊1　入場料等を徴収する場合（使用期間内に有料配信する場合を含む）は、上記使用料の 2 倍とします。
＊2　ワークショップ、暗室（写真現像用途には適しておりません）、スタジオ、映像編集室及びスタジオ映写室は、当面の間貸出を停止します。
＊3　映写室、アナウンスブースは、シアターを利用する場合、使用できます。
＊4　シアター借用時は、映写室も併せて借用いただきます。

（3）使用期間

①展示施設

・コミュニティギャラリーは、原則として、月曜日始まり、日曜日終わりの1週間単位での使用期間とし、同一の使用者について引き続き5週間を超えることはできません。
・企画展示室については、原則として、1週間単位での使用期間とし、同一の使用者について引き続き5週間を超えることはできません。

②シアター等

・1時間単位での使用期間とし、同一の使用者について原則として引き続き10日を超えることはできません。

＊美術館のすべての施設において

・美術館の休館日は、原則として使用できません。（準備、撤去作業の場合は除く。）
・毎年度日数を定めて開催している展覧会や上記使用期間では開催目的が達成されない場合において必要と認められるときは、使用期間を変更できるものとします。

（4）使用時間

①美術館の施設使用時間は、美術館の開館時間〔9 時 30 分から 17 時まで〕とします。なお、施設使用上やむを得ない理由があると認められる場合には、閉館後、1 時間単位で 20 時まで延長することができます。開館時間前の使用については、御相談ください。

②施設使用時間には、展覧会等の準備の時間及び撤収の時間も含まれます。（延長した場合であっても 20 時には撤収が完了していなければなりません。）

③展示施設は、9 時 30 分から 12 時、13 時から 17 時の使用区分とし、それ以外は 1 時間単位での使用とします。

④シアター等は、1 時間単位での使用とします。

■コミュニティギャラリー、企画展示室、シアターほか

（単位：人）

使用期間	使用者	催事名	使用施設	入場者数
4/11 － 4/27	エヌ・アンド・エー株式会社	Aomori Spring Sprout展	コミュニティギャラリーABC	3,657
4/28 － 5/ 8	八島　和浩	八島和浩写真展「USORI」	コミュニティギャラリーAB	868
5/16 － 6/21	泉山　元	縄文を尋ねて（写真展）	コミュニティギャラリーABC	1,936
6/24 － 6/26	JAGDA青森	グラフィックデザイナーの1年展×2	コミュニティギャラリーABC	360
7/14 － 7/25	社会福祉法人あーるど	ありのままの表現展2022	コミュニティギャラリーABC	686
9/14 － 9/19	柳谷　暁彦	柳谷暁彦作品展「なみ」	コミュニティギャラリーBC	140
9/24 － 9/25	社会福祉法人　平舘福祉会	エコル作品展	コミュニティギャラリーABC	49
9/30 － 10/2	MOA美術館青森児童作品展実行委員会	第33回MOA美術館青森児童作品展	コミュニティギャラリーABC シアター、試写室	686
11/18 － 12/14	あおもりJOMON GYOMOプロジェクト実行委員会、 国立大学法人東京藝術大学美術学部　美術教育研究室 工芸科染織研究室	あおもりJOMON GYOMOプロジェクト展	コミュニティギャラリーABC	617
12/16 － 12/18	高文連東青支部	令和4年度青森県高等学校文化連盟美術部 「第58回東青地区美術展」及び「東青支部講習会」	コミュニティギャラリーABC ワークショップAB	45
12/22 － 12/25	青森市中学校教育研究会美術部	青森県中学校選抜美術展	コミュニティギャラリーABC	791
1/5 － 1/30	菅原一剛	菅原一剛写真展「発光」	コミュニティギャラリーABC	903
2/4 － 2/15	丸山眈奎為	TANKEI EXHIBITION	コミュニティギャラリーABC	223
2/22 － 2/23	株式会社エフエム青森	青森県応援プログラム　AOMORISM2023	シアター、試写室	70
3/10 － 3/12	津軽裂織さくり会	津軽裂織教室作品展―春夏秋冬・想いを形に―	コミュニティギャラリーBC	148
3/16 － 3/26	小田桐啓太	小田桐啓太個展「肌」	コミュニティギャラリーABC	500
3/25	青森県企画政策部地域活力振興課	AOMORI SHORTFILM PROJECT 21-22上映会	シアター、試写室	67

合計　11,746 人

サービス等

図書室

概要

図書室は、館の美術情報センターとしての機能を担い、その機能のうち美術に関する図書資料情報を収集、整理、保存、提供することで美術の普及を図ることを目的として、一般開放している。
具体的には、美術に関する専門ライブラリとして、来館者に対し、当館所蔵作品・作家に関するものをはじめ、美術に関する知識を深める図書資料情報の提供、閲覧、美術及び図書資料に関する相談受付（レファレンス）、他美術館等の展覧会情報の提供等を行っている。
設備：図書閲覧席　20 席
開館日・開室時間：美術館開館日の 10:00－16:00

図書資料の収集方針

「青森県立美術館作品収蔵基本方針」に準じ、1）近・現代の青森県出身作家及びゆかりのある作家に関するもの、2）青森県以外の近・現代の美術状況に対応するために必要な優れた美術作品に関するもの、3）今に生きる県民の心の原点に関わり、未来に資するもの、4）1－3 を理解するために必要なもの、を購入および寄贈により収集した。

蔵書数（令和 4 年度 3 月末現在）

・美術図書　5,918冊
・デザイン･建築関係図書　498冊
・写真関係図書　672冊
・絵本・イラスト関係図書　1,290冊
・民俗・歴史関係図書　628冊
・音楽・映画・舞台関係図書　1,024冊
・展覧会カタログ　16,660冊
・その他（自然科学、文学など）　2,728冊
・雑誌（約60タイトル）12,629冊
　※継続購入は14タイトル
　計　42,047冊

サービス

図書資料閲覧
美術に関する映像ソフトの鑑賞
美術に関する図書資料に係る相談受付（レファレンス）
当館に関する情報の掲載誌の閲覧

実績

開室日数：251 日
利用者数：2,151 人
レファレンス利用件数：8 件

令和 4 年度図書室利用実績

	開室日数（日）	入室者数（人）		レファレンス	
	月計	月計	1日平均	月計	1日平均
4月	14	124	8.9	1	0.07
5月	29	306	10.6	3	0.10
6月	25	126	5.0	0	0.00
7月	21	168	8.0	0	0.00
8月	29	434	15.0	1	0.03
9月	28	317	11.3	0	0.00
10月	2	38	19.0	0	0.00
11月	7	34	4.9	0	0.00
12月	24	96	4.0	0	0.00
1月	20	103	5.2	1	0.05
2月	23	109	4.7	1	0.04
3月	29	296	10.2	1	0.03
計	251	2,151	8.6	8	0.03

事業

1　美術館事業への支援・事業との連携
当館で行う常設展示及び企画展示と連携し、開催期間中、所蔵図書資料のうち展示に関連する資料を展示用書架にて紹介した。

2　他の美術館・関係団体等との連携
「新着カタログコーナー」にて、新しく受け入れた他美術館の展覧会カタログを継続的に紹介した。

サービス等

キッズルーム

概要

絵本やお絵かき、積み木などを親子で楽しむことを通じて、子どもたちの美術への関心を高めることを目的として、地下１階「キッズルーム」を、来館者の多い土日祝日と企画展開催時の平日に無料で開放している。

「キッズルーム」は、約 600 冊の絵本をはじめとして、スイスの naef（ネフ）社製やあおもり木製玩具研究会「わらはんど」製作の色や形の美しい積み木やお絵かきを自由に楽しめる空間となっている。

利用実績

令和２年度より新型コロナウィルス感染拡大防止の観点から、キッズルームを閉室している。

（令和２年３月までの開室時間は、土日祝日及び企画展開催時の平日 10:00－15:00）

サービス等

博物館実習

概要
博物館法施行規則第 1 条に定められた学芸員資格取得に関する博物館実習を実施した。

実施内容：美術館における諸活動（展示・収蔵・教育普及等）
期間：2022 年 8 月 23 日（火）−27 日（土）
実習指導：青森県立美術館職員他
実習生：10 大学 11 名
弘前学院大学（2 名）、札幌学院大学（1 名）、青山学院大学（1 名）、専修大学（1 名）、群馬県立女子大学（1 名）、国士舘大学（1 名）、東北芸術工科大学（1 名）、立教大学（1 名）、愛知県立芸術大学（1 名）、秋田公立美術大学（1 名）

プログラム
令和 4 年度　博物館（美術館）学芸員実習日程

第 1 日目　8 月 23 日（火）
・オリエンテーション
・施設見学（バックヤードおよび作業導線含む）
・青森県立美術館の概要について
・学芸員の仕事について
・美術館のコレクション形成について
・5 館連携事業と美術館の広報について
・アートプロジェクトについて
・実習日誌作成

第 2 日目　8 月 24 日（水）
・作品の保存・管理について（空調設備見学含む）
・作品の取扱いおよび調書作成（日本画、油彩画、立体、紙作品）
・美術館の施設およびサイン計画について（サイン等掲示物の作成実技含む）
・来館者対応と美術館のホスピタリティーについて～アテンダントの仕事～監視・受付
（新型コロナウイルスへの対応を含む）
・実習日誌作成

第 3 日目　8 月 25 日（木）
・美術館の教育普及活動について
・美術館のパフォーミングアーツ活動
・作家調査とアーカイブ
・ディスカッション「文化財の保存と活用」
・実習日誌作成

第 4 日目　8 月 26 日（金）
・企画展鑑賞とディスカッション
・展覧会の作り方（企画と実務）
・［演習］ワークショップを企画してみよう
・実習日誌作成

第 5 日目　8 月 27 日（土）
・［演習］展覧会を企画してみよう（展示プランニング、出品リスト作成、展示レイアウト作成）
・［演習］企画した展覧会の発表（発表 ＋ 講評）
・実習日誌作成

サービス等

サポートシップ倶楽部

概要
青森県立美術館の活動に協力するとともに広く県民の美術その他の芸術文化の向上に寄与するために平成 27 年度(平成 28 年 3 月)に発足した任意団体。

会員の区分と年会費
一般会員
成人会員：3,000 円、学生会員（高校生以上）：2,000 円、
法人会員：30,000 円

特別会員（総会出席）
法人会員：一口 100,000 円

会員数（令和 5 年 3 月 31 日現在）
一般会員：成人会員 74 名、学生会員 0 名、法人会員 4 団体
特別会員：17 法人（35 口）

特典
会員への情報提供

一般会員
常設展観覧料無料観覧（法人会員は 3 名まで同時観覧可能）
企画展観覧料無料招待券配布のほか、いつでも団体料金で観覧可
ミュージアムショップ割引
カフェ割引
等

特別会員
企画展内覧会・レセプション招待
等

令和 4 年度事業報告
1　美術館活動への支援事業
（1）美術品購入及び寄贈
　馬場のぼる作品を購入し、青森県立美術館へ寄贈した。
（2）美術資料の充実
　美術品寄付のための積み立て。
（3）美術館ファンの拡大
　一般会員の会員特典（観覧料無料）をアピールし、観覧者数の増加を図った。延べ観覧者数 302 名。

2　県民の美術その他の芸術文化の向上に寄与するための事業
（1）展覧会関連の講演会・ワークショップ等への協賛等
　①企画展「ミナ ペルホネン／皆川明　つづく」関連事業への協賛
　○「サポートシップ倶楽部特別会員によるナイトミュージアム無料招待イベント」
　令和 4 年 9 月 24 日（土）17:00 ～ 20:00 ／
　青森県立美術館
　ナイトミュージアム来館者を企画展へ無料招待するイベントを実施。
　○「つづく展青森記念公演」
　haruka nakamura「PIANO inspired by minä perhonen」
　令和 4 年 9 月 23 日（金・祝）15:30 ～ 17:00 ／
　アレコホール
　○伊藤ゴロー featuring 坂本美雨「A Midsummer Night's dream」
　令和 4 年 9 月 25 日（日）19:00 ～ 20:00 ／アレコホール
　②「サポートシップ倶楽部限定　あおもり犬リニューアル後の内覧会」
　令和 4 年 11 月 2 日（水）11:30 ～ 12:00 ／
　青森県立美術館
（2）視察研修
　新型コロナウイルス感染症の影響により中止

3　理事会及び総会の開催について
（1）第 1 回理事会
　①議決日　令和 4 年 6 月 1 日（水）10:30 ～ 10:50
　②場所　　青森県立美術館地下 1 階　ワークショップ A
　③議事
　第 1 号議案　令和 3 年度事業報告の件
　第 2 号議案　令和 3 年度収支決算の件
　第 3 号議案　令和 4 年度事業計画（案）の件

第４号議案　令和４年度収支予算（案）の件
第５号議案　規約の一部改正（案）の件
第６号議案　役員の任期満了に伴う改選の件

（2）第１回総会

①議決日 令和４年６月１日（水）11:00 ～ 11:30
②場所　　青森県立美術館地下１階　ワークショップ A
③議事
第１号議案　令和３年度事業報告の件
第２号議案　令和３年度収支決算の件
第３号議案　令和４年度事業計画（案）の件
第４号議案　令和４年度収支予算（案）の件
第５号議案　規約の一部改正（案）の件
第６号議案　役員の任期満了に伴う改選の件
④購入作品目録贈呈

資料

広報

県の広報媒体を活用した広報活動や、Twitter・Facebook 等のソーシャルメディアネットワークによる活動を展開した。

（1）県広報による実績
・青森放送（RAB ラジオ）「県広報タイム」
・エフエム青森「あおもり・ふぁん」
・東奥日報、デーリー東北、陸奥新報「広報あおもりけん」
・広報広聴課 Facebook「県政トピックス」
・コンビニ等から県政情報の発信！

（2）ソーシャルディアネットワーク
・Twitter
　アカウント：aomori_museum_of_art@aomorikenbi
・Facebook
　アカウント：www.facebook.com/aomori.museum
・Instagram
　アカウント：aomorikenbi

（3）ホームページ
URL：www.aomori-museum.jp
年間アクセス数（2022.4 - 2023.3）：1,636,880 件

（4）雑誌等掲載実績（主なもの、順不同）
・ウェブ版美術手帖
・美術の窓
・和樂
・美術展ぴあ
・arch
・月刊美術
・芸術新潮
・アートアジェンダ
・アートコレクターズ
・インターネットミュージアム
・ウォーカープラス
・まっぷる
・るるぶ
・ことりっぷ
・じゃらんニュース
・大人の休日倶楽部
・旅の手帖
・rakra
・あおもりのき
・Casa BRUTUS
・月刊 MOE
・ART iT　　ほか多数

資料

広聴

青森県立美術館アドバイザリー・ボード

青森県立美術館のより良い運営を推進するため、青森県立美術館の運営に関して専門的及び県民の立場から必要な助言等を行う第三者委員会を設置。

アドバイザー

座長　建畠　　晢（全国美術館会議会長・多摩美術大学学長・埼玉県立近代美術館館長）
三上　満良（東北芸術工科大学講師、宮城県美術館元副館長）
山田　泰子（八戸市新美術館建設推進室室長）
蜷川　有紀（美術家・女優）
三澤　一実（武蔵野美術大学教授）
西　　秀記（青森商工会議所　副会頭）
花田　玲子（県民代表）

会議開催状況

第１回
開催日：2016 年３月 19 日（土）
会場：青森県立美術館

第２回
開催日：2017 年２月９日（木）
会場：青森県立美術館

第３回
開催日：2018 年３月 12 日（月）
会場：青森県立美術館

第４回
開催日：2019 年２月 28 日（木）
会場：青森県立美術館

第５回
開催日：2020 年３月 19 日（木）
会場：青森県立美術館

第６回
資料送付日：2021 年３月 23 日（水）（書面開催）

第７回
開催日：2022 年３月 30 日（水）
会場：青森県立美術館（オンライン開催）

第８回
開催日：2023 年３月８日（水）
会場：青森県立美術館

資料

入館者数

（単位：人）

		H18年度	H19年度	H20年度	H21年度	H22年度	H23年度	H24年度	H25年度	H26年度	H27年度	H28年度	H29年度	H30年度	R元年度	R2年度	R3年度①	R4年度②	増減（②−①）
常設展	一般観覧者	193,501	89,229	109,609	190,672	233,192	141,904	177,266	179,793	73,541	137,198	92,714	125,342	134,453	92,807	39,216	38,421	80,313	41,892
	スクール免除	12,685	6,968	6,668	9,098	11,574	6,777	5,798	3,712	3,845	3,530	3,295	2,448	2,612	1,898	2,868	3,249	2,284	△ 965
	常設展計	206,186	96,197	116,277	199,770	244,766	148,681	183,064	183,505	77,386	140,728	96,009	127,790	137,065	94,705	42,084	41,670	82,597	40,927
企画展	シャガール展	192,918																	
	縄文と現代展	14,894																	
	工藤甲人展	1,680	10,950																
	旅順博物館展		30,065																
	舞台芸術の世界展		6,282																
	棟方志功・崔榮林展		4,156																
	寺山修司展			9,533															
	大ナポレオン展			46,609															
	小島一郎展			8,660															
	ウィーン展				36,884														
	（特別展　太宰治と美術展）				（23,191）														
	馬場のぼる展				25,464														
	ラブラブショー				5,160														
	ローマ展					45,622													
	ロボット展					25,076													
	芸術の青森展					3,530													
	印象派展						105,758												
	今和次郎展						4,807												
	フィンランド展							31,876											
	Art and Air展							18,267											
	奈良美智展							80,275											
	種差展								16,807										
	横尾忠則展								10,516										
	日本の民家展								5,115										
	工藤哲巳展									5,056									
	美少女展									33,866									
	関野準一郎展									8,158									
	成田亨展										18,257								
	化け物展										32,984								
	「青森EARTH2015みちの奥へ」展示										3,022								
	棟方志功展											17,427							
	日展											19,094							
	青森EARTH2016根と路											11,190							
	澤田教一展											10,195							
	ラブラブショー２展												10,962						
	遙かなるルネサンス展												40,188						
	近代洋画展												6,762						
	シャガール 一三次元の世界展												4,057	14,665					
	フランスと日本展													31,543					
	めがねと旅する美術展													16,867					
	アルヴァ・アアルト展														12,858				
	子どものための建築と空間展														13,431				
	青森EARTH2019：いのち耕す場所														5,944				
	阿部合成展															5,354			
	富野由悠季の世界展															6,079	10,474		
	大・タイガー立石展																7,549		
	あかし testaments展																6,246		
	石井康治展																	17,500	
	つづく展																	28,568	
	企画展計	209,492	51,453	64,802	67,508	74,228	110,565	130,418	32,438	47,080	54,263	57,906	61,969	63,075	32,233	11,433	24,269	46,068	21,799
教育普及	スクールプログラム	18,775	9,905	9,242	7,087	7,272	7,368	6,310	5,792	4,214	4,065	4,158	2,687	3,762	2,265	3,840	5,305	3,228	△ 2,077
	普及プログラム	2,300	2,148	2,873	886	718	11,763	2,565	2,744	1,575	557	96	851	1,692	568	331	0	36	36
	お出かけ講座	1,196	1,587	1,122	1,119	537	1,250	1,022	1,245	383						0	0	72	72
	展示関係プログラム			625	1,526	7,546	930	909	1,738	932	757	1,688	482	549	541	0	143	333	190
	その他	500		464	266	399	387	351	136	200	393	411	1,161	285	281	5	6	11	5
	教育普及計	22,771	13,640	14,326	10,884	16,472	21,698	11,157	11,655	7,304	5,772	6,353	5,181	6,288	3,655	4,176	5,454	3,680	△ 1,774
パフォーミングアーツ	演劇	2,170	1,821	1,516	1,333	1,085	2,962	3,468	5,255	2,258	2,140	2,163	3,054	835	2,101	326	486	146	△ 340
	ダンス			1,419	1,089	520			339	699	662	490	632	602			0	0	0
	音楽	1,559	471	1,583	1,959	970	979	1,133	810	469	479	469	428	573	629	303	125	398	273
	映画	975	1,954	1,584	685				240	991	503	1,024	818	1,993	446		44	234	190
	パフォーミングアーツ計	4,704	4,246	6,102	5,066	2,575	3,941	4,601	6,644	4,417	3,784	4,146	4,932	4,003	3,176	629	655	778	123
貸館		10,268	26,481	194,807	104,625	144,520	20,735	33,410	126,284	26,192	71,045	58,931	28,185	47,790	11,421	4,154	42,308	22,107	△ 20,201
図書館		2,552	7,727	12,910	10,012	7,864	6,561	10,688	6,818	4,662	4,307	6,557	3,467	4,474	3,542	1,961	1,529	2,023	494
キッズルーム			2,850	3,690	3,127	3,555	20,501	15,889	4,267	2,602	3,118	3,545	2,738	3,015	1,799	15	0	0	0
合　計		455,973	202,594	412,914	400,992	493,980	332,682	389,227	371,611	169,643	283,017	233,447	234,262	265,710	150,531	64,452	115,885	157,253	41,368

※キッズルームは平成 19 年 4 月 28 日からオープン
※特別展太宰治と美術展入館者数は常設展入館者数に含む

資料

運営予算・決算

令和４年度

一般会計予算額

（単位：千円）

事業名	収入	科目	支出	細目	説明
美術館費	37,637	使用料及び手数料	152,819	職員費	人件費
	16,295	国庫支出金	527,512	美術館運営管理費	管理運営費、調査研究費、美術資料保存管理費、展示費、教育普及費、情報事業費、パフォーミングアーツ事業費 他
	84	財産収入	967	公園管理費	青森県総合運動公園管理費
	4,500	繰入金			
	87,539	諸収入			
	96,000	県債			
	439,243	一般財源			
合計	681,298		681,298		

令和４年度

一般会計決算額

（単位：千円）

事業名	収入	科目	支出	細目	説明
美術館費	32,317	使用料及び手数料	154,903	職員費	人件費
	15,387	国庫支出金	526,004	美術館運営管理費	管理運営費、調査研究費、美術資料保存管理費、展示費、教育普及費、情報事業費、パフォーミングアーツ事業費 他
	50	財産収入	910	公園管理費	青森県総合運動公園管理費
	30,657	繰入金			
	39,195	諸収入			
	95,000	県債			
	469,211	一般財源			
合計	681,817		681,817		

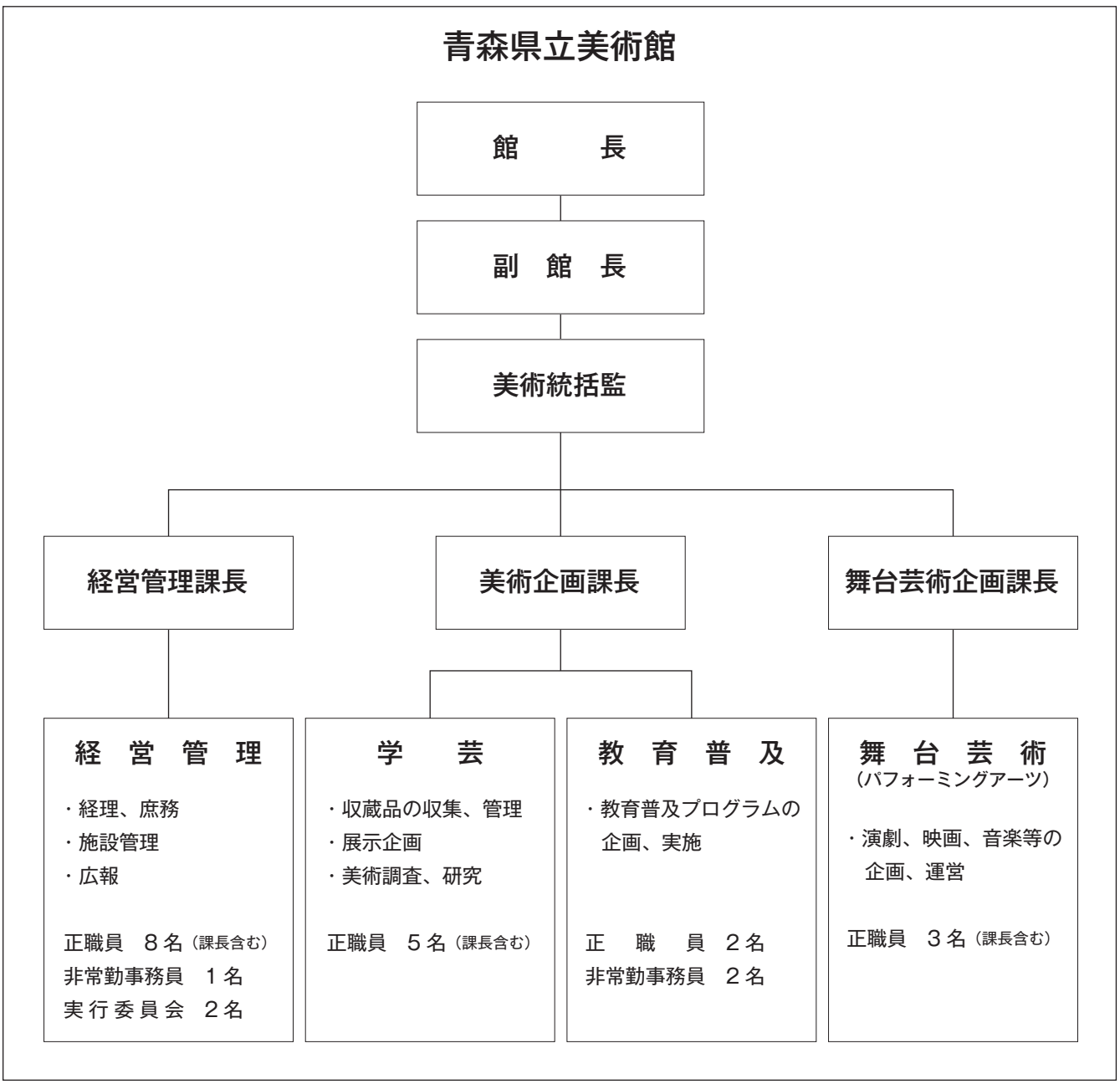
資料

組 織

青森県立美術館の運営体制

□県立美術館の運営は、アドバイザリー・ボードからの助言を得ながら行っている。
□館長及び県職員（非常勤含む）23 名の計 24 名が美術館運営にあたっている。
　このほか、企画展実行委員会職員 2 名が配置されている。

（令和 4 年 4 月 1 日現在）



資料

関係規程等

青森県立美術館条例

（設置）

第一条　美術その他の芸術の鑑賞及び学習の機会並びに創作活動の場の提供を行うことにより、県民の芸術に関する活動への参画を支援し、もって文化の振興を図るため、青森市に青森県立美術館（以下「美術館」という。）を設置する。

（業務）

第二条　美術館は、次に掲げる業務を行う。

一　美術品その他の芸術に関する資料（以下「美術品等」という。）の収集、保管及び展示に関すること。

二　美術品等の利用に関し必要な説明、助言及び指導に関すること。

三　美術品等に関する専門的、技術的な調査研究に関すること。

四　美術品等に関する案内書、解説書、目録、図録、年報、調査研究の報告書等の作成及び配布に関すること。

五　美術その他の芸術に関する講演会、講習会、映写会、研究会、公演会等の開催に関すること。

六　美術その他の芸術に関する情報の収集及び提供に関すること。

七　美術その他の芸術に関する創作活動の場の提供に関すること。

八　その他県民の芸術に関する活動への参画を支援するために必要な業務

（使用の承認）

第三条　別表第二号又は第三号に掲げる場合において、美術館の施設を使用しようとする者は、知事の承認を受けなければならない。

（使用料）

第四条　美術館の施設を使用する者（以下「使用者」という。）は、別表に定める使用料を納入しなければならない。

2　知事は、特別の理由があると認めたときは、前項の使用料の全部又は一部を免除することができる。

（使用の制限等）

第五条　知事は、使用者が次の各号のいずれかに該当する場合は、当該使用者の美術館の使用を拒み、その使用の承認を取り消し、又はその使用を制限することができる。

一　他の使用者に迷惑をかけ、又はそのおそれがあるとき。

二　美術館の施設、設備等をき損し、若しくは汚損し、又はそれらのおそれがあるとき。

三　この条例又はこの条例に基づく規則に違反したとき。

2　知事は、前項に規定する場合のほか、美術館の管理運営上支障があると認めるときは、美術館の使用を制限することができる。

（委任）

第六条　この条例に定めるもののほか、美術館の管理に関し必要な事項は、規則で定める。

附則　この条例は、規則で定める日から施行する。

別表（第三条、第四条関係）

一　美術品等の観覧のための使用の場合

区分	金額（一回につき）
常設展の観覧	一人につき　千円を超えない範囲内で知事が定める額
企画展の観覧	知事がその都度定める額

二　展示施設の使用の場合

イ　入場料その他これに類する料金を徴収しないで使用する場合

区分	九時三十分から十二時まで	十三時から十七時まで	九時三十分以前、十二時から十三時まで及び十七時以降
コミュニティギャラリーA	二千百三十円	三千四百円	八百五十円
コミュニティギャラリーB	八百八十円	千四百円	三百五十円
コミュニティギャラリーC	千八百八十円	三千円	七百五十円
展示室A	二千五百円	四千円	四千円
展示室B	二千円	三千二百円	八百円
展示室C	五千五百円	八千八百円	二千二百円
展示室D	三千二百五十円	五千二百円	千三百円
展示室E	千五百円	二千四百円	六百円
映像室	千円	千六百円	四百円

ロ　入場料その他これに類する料金を徴収して使用する場合　イの場合の使用料の額の二倍に相当する額

三　シアター等の使用の場合

イ　入場料その他これに類する料金を徴収しないで使用する場合

区分	金額（一時間につき）
シアター	二千四百円
映写室	二百六十円
アナウンスブース	五十円
ワークショップA	九百円
ワークショップB	千三百円
暗室	百六十円
スタジオ	七百二十円
映像編集室	百八十円
スタジオ映写室	二百十円

ロ　入場料その他これに類する料金を徴収して使用する場合　イの場合の使用料の額の二倍に相当する額

四　食堂施設又は売店施設の使用の場合

知事が定める額

資料

施設設備概要

建設概要

施設名称　青森県立美術館
所 在 地　青森市大字安田字近野 185
主 用 途　美術館
事業主体　青森県
設計期間　平成 11 年（1999 年）12 月ー平成 14 年（2002 年）3 月
施工期間　平成 14 年（2002 年）12 月ー平成 17 年（2005 年）9 月
設計監理　青木淳建築計画事務所
構造：金箱構造設計事務所
設備：森村設計
音響：永田音響設計
土系素材：INAX
施　工　建築：竹中・西松・奥村・北斗特定建設工事共同企業体
強電：きんでん・五十嵐・野呂特定建設工事共同企業体
弱電：奈良・高田特定建設工事共同企業体
空調：高砂・青木・佐藤設備特定建設工事共同企業体
衛生：芝管・五戸特定建設工事共同企業体
昇降機：三菱電機株式会社
面　積　敷地面積：129,536.37 ㎡
建築面積：7,223.07 ㎡
延床面積：21,222.19 ㎡
地下 2 階：4,736.15 ㎡
地下 1 階：3,965.11 ㎡
1 階：5,339.02 ㎡
2 階：2,403.81 ㎡
3 階（機械室エリア）：4,778.10 ㎡
建ぺい率：5.58%
容積率：16.38%
階　数　地下 2 階　地上 3 階
寸　法　最高高：16,160mm
軒高：15,150mm
階高：地下 2 階　2,300―19,000mm
地下 1 階　2,500―7,500mm
1 階　2,700―11,000mm
2 階　2,500―4,000mm
主なスパン：3,000mm×3,000mm
地域･地区　都市計画区域内　市街化区域
構　造　鉄骨鉄筋コンクリート造（地下 1・2 階）
鉄骨造（地上 1―3 階）
杭・基 礎：杭 基 礎（PHC-ST 抗）600φ・700φ、（PHC 杭）600φ
外部仕上げ　屋根：ウレタン塗膜防水
外壁：煉瓦＋アクリルシリコン塗装
外構：コンクリート舗装ほうき目仕上げ
内部仕上げ　【展示室（白）】
床：カラーモルタル金こて押え t=20mm ＋ 防塵防汚塗装
壁：合板 t=15mm×2 ＋ プラスターボード t=12mm ＋ 全面寒冷紗パテ処理 ＋ EP
天井：合板 t=12mm ＋ プラスターボード t=9mm ＋ EP
【展示室（土）】
床：タタキ t=50mm
壁：版築 t=200mm
天井：合板 t=12mm ＋ プラスターボード t=9mm ＋ EP
【コミュニティホール】
床：クリフローリング t=15mm
壁：プラスターボード 12mm×2 ＋ スタッコ
天井：人工木材ローズウッド練り付け
【シアター】
床：フェルト t=8mm ＋ カーペット t=7mm
壁：プラスターボード t=15mm ＋ グラスウールボード ＋ エキスパンドメタル t=6mm（樹脂コーティング処理）
天井：グラスウール ＋ プラスターボード t=15 mm ＋ エキスパンドメタル t=6mm（樹脂コーティング処理）
【オフィス】
床：システム根太ユニット 600mm×600mm ＋ コンパネ t=12mm ＋ クリフローリング t=15mm
壁：プラスターボード t=12mm×2 ＋ EP
天井：プラスターボード 12mm ＋ 吸音板 t=12mm ＋ EP
空調設備　AHU・定風量単一ダクト方式、一部 FCU、空冷パッケージ方式、冷温水発生機、加湿用蒸気ボイラ、空冷チラー
照明設備　LED 照明、スポットライト及び蛍光灯（調光設備・

紫外線カット付）

消火設備　屋内消火栓、スプリンクラー、不活性ガス（窒素）消火、加圧式粉末ＡＢＣ消火器
設備項目：防排煙設備、屋内消火栓設備、スプリンクラー設備（開放型、予作動型）、窒素ガス消火設備（一部展示室、収蔵庫、熱源機械室）

排煙設備　機械排煙設備（3 系統）

防犯設備　常時警備員巡回。展覧会開催中は会場内に監視スタッフを配置。展示室等に監視カメラを設置。

衛生設備　給水：受水槽（42t）＋加圧給水ポンプユニット方式
給湯：貯湯式電気温水器、ガス湯沸器（厨房）
排水：下水道放流（汚水・雑排水）

電気設備　受電方式：高圧電力 3φ3W 6,600Ｖ（業務用電力＋融雪電力）
設備容量：2,650kVA
契約電力：830kW
予備電源：非常用発電設備 500kVA、直流電源設備（非常照明用）
設備項目：受変電設備、自家発電設備、動力設備、電灯設備、展示調光設備、避雷設備、構内交換設備、情報通信設備、誘導支援設備、テレビ共同受信設備、監視カメラ設備、拡声設備、自動火災報知設備、演出照明設備（シアター、スタジオ）、演出音響設備、映写設備（シアター）

昇 降 機　荷物用エレベータ 1 台　乗用エレベータ 8 台

アクセス

―JR 新青森駅から車で約 10 分

―青森駅から車で約 20 分

―青森空港から車で約 20 分

―東北縦貫自動車道青森 I.C. から車で約 5 分

―（八戸方面から）青森自動車道青森中央に I.C. から車で約 10 分

―市営バス　青森駅前 6 番バス停から三内丸山遺跡行き
「県立美術館前」下車（所要時間約 20 分）

―ルートバスねぶたん号新青森駅東口バス停から乗車
「県立美術館前」下車（所要時間約 10 分）



青森県立美術館年報

令和 4 年度

編集・発行：青森県立美術館
青森市安田字近野 185　038-0021
017-783-3000

表紙デザイン : 菊地敦己

印刷 : 川口印刷工業株式会社

発行日 : 2024 年 3 月